【每月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可】

明治三十五年六月廿四日發兌

女鑑

第貳百五拾五號

堀内新泉子著

少女讀本

花の卷

大和綴美本
全三册
定價各拾八錢
郵税各四錢

さきに本社より『家庭の鑑』を出して廣く江湖の喝采を博し、次に開發社より『家庭讀本』春、夏、秋、冬の四册を出して、出版物中に實に稀有なる世の賞讃を博し得たる堀内新泉子は、今また本社より近來の『少女讀本』花の、雪、月、三册を出して、廣く世の教育家諸君に向つて問ふ所あらんとす。子が着想の如何に高潔多趣味にして、その着筆の如何に穩健優雅なるかは、已に讀者の熟知せらるゝ所なれば、本社は重ねて此に贅せず。唯、本社は讀者に告ぐ。從來『少年讀本』の著作は、已に數十種ありと雖も、獨り『少女讀本』に至りては、未だ世間にこれあるを見ず。家庭に並びに學校に於ても、この種の著作の世に出でんとは兼て渴望せられしならんが、今日初めて本書を以て、廣く江湖の需用に應じ得るは、著者と本社との聊か自負する所なりとす。願くは家庭の讀本として、將又、學校の賞與品として、續々購求の榮を賜はらんことを。今『花の卷』の目次を左に

（一）花の宴　（二）雪姫　（三）野末の露　（四）たま椿　（五）山吹　（六）ぬいはり　以上

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社出版部

女鑑第貳百五拾五號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年六月十九日印刷
明治三十五年六月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十二番地 渡邊彖一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 並木兵雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 株式會社 國光社出版部 (電話新橋二六九三番) (電話新橋特八八)

◎第十一版出來!!!

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著

第拾一版

女子の本分

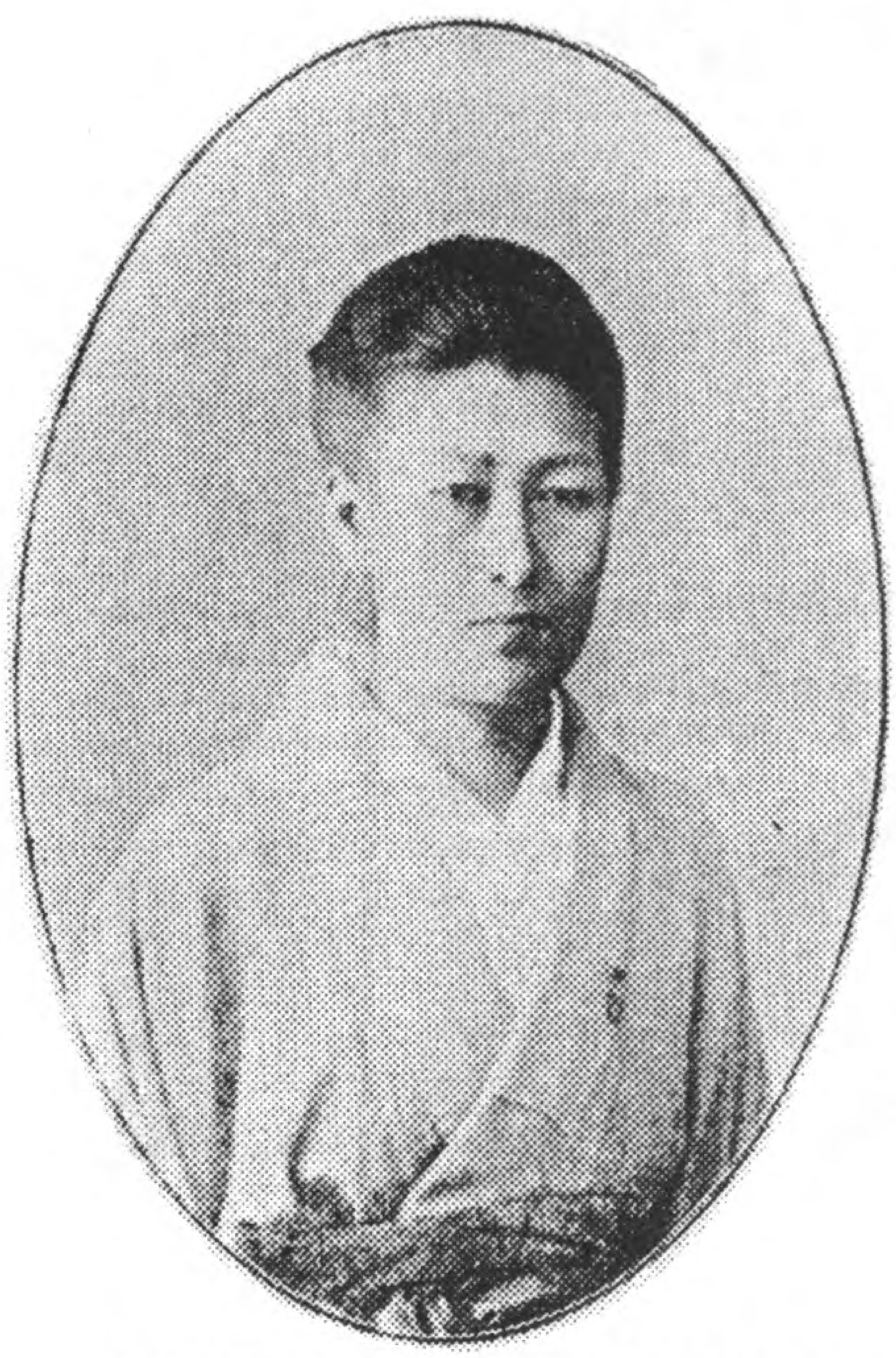
大和綴優美
定價金二十五錢
郵税金六錢
郵劵代用一割增

曩に三輪田女史我邦女子道德の頽敗に赴き日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し九版十版猶需用を充たすに足らず以て女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や時廿世紀に入り國運日に進み益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切也本社またその訂正を請ひて十一版を發行し附するに女史の肖像詠歌傳記を以てす。其完全なるは敢てこゝに云はずたゞ諸婦人達の一讀して價値を知り給はむ事を。

發行所 東京築地二丁目廿一番地 電話新橋二六九三 國光社出版部



前田侯爵夫人朗子刀自



大日本婦人衛生會副會長濱尾作子刀自



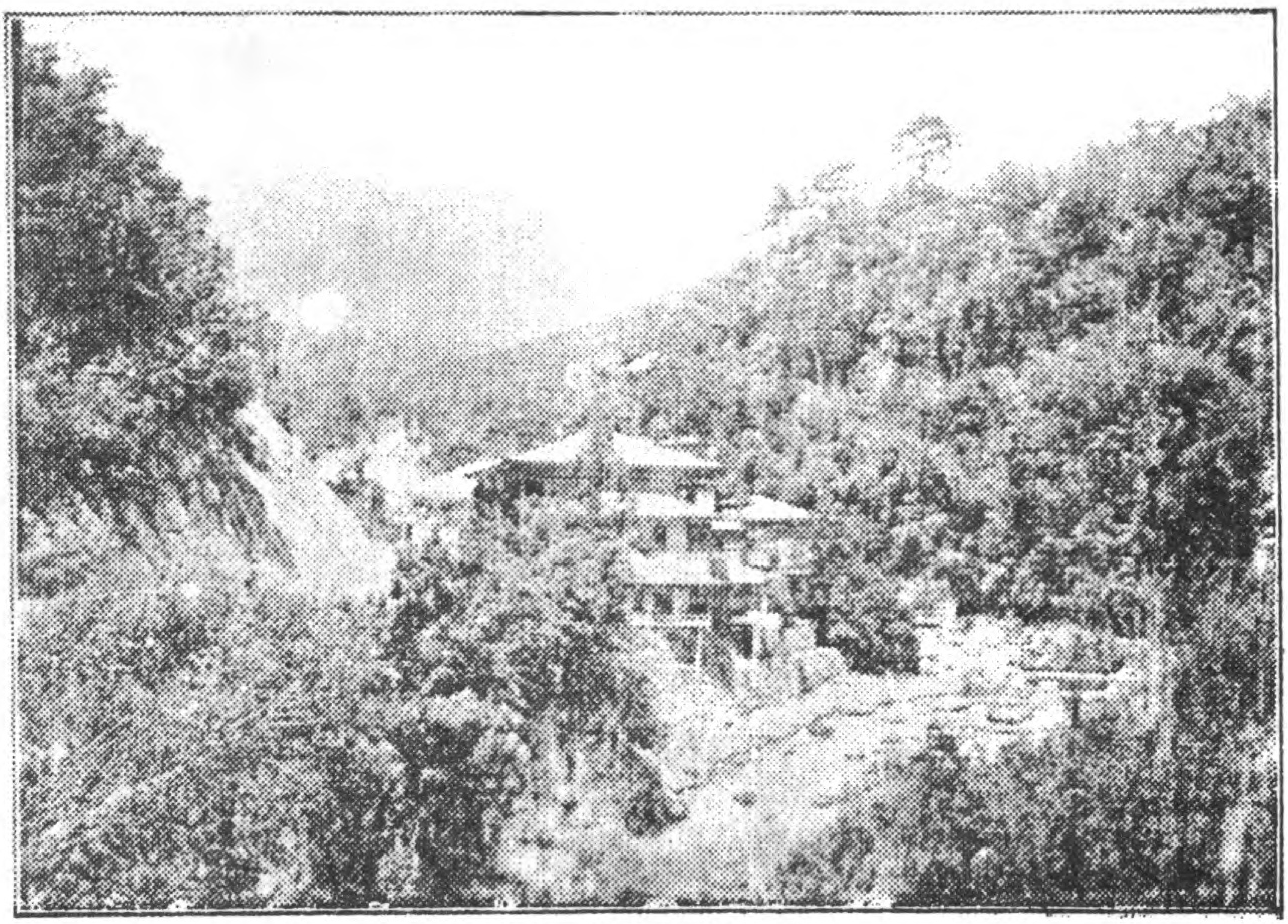
女子高等師範學校教授瓜生繁子刀自



横濱女學校卒業生及び職員



播州舞子の濱



箱根塔の澤

●●●●近刊豫告●●●●

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂

女子必讀

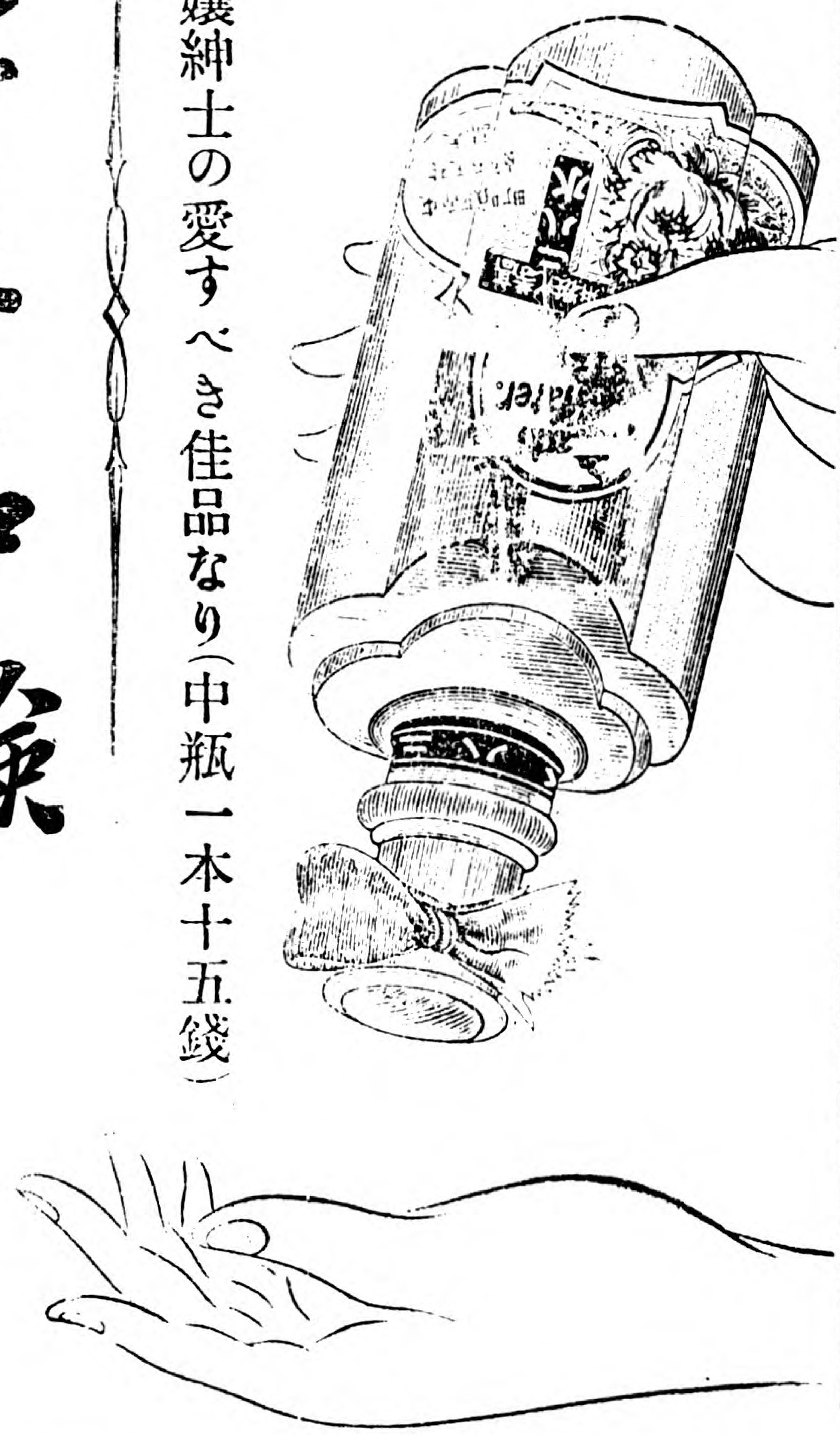
新編ひめかゞみ　全

近世女子教育の年に月に盛んなるに随ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも評すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、専ら智育を宗として重きを徳育に置かざる餘弊にや、さればかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき賤の女にも及ばぬ者多く、甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み讀せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行すること、なせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は實なり、花わり實わりてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る、傳文撰述の作家中重なる人々の姓名を左に錄す

細川潤次郎　大町桂月　三輪田眞佐子　鹽井雨江　久米幹文　山川清素　井上頼文　鹽井ふく子
青山延壽　安藤紫光　栗田寛　山本正周　磯野徳文　大槻文彦　濱田耶　指原乙子　以下數十家

發行所　東京市京橋區築地二丁目　國光社出版部

二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしい下に用ゐて尤もよし
又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）



登錄商標



本品縮圖

花王石鹸

●品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ

發賣本舗
東京日本橋區馬喰町二丁目
長瀬富郎
（電話特浪花九二二）

婦人と其の理想

青年學生が、其の理想として、常に夢みつゝあるは、未來の政治家なり、將來の事業家なり、大學者なり、大文學者なり。希望と目的とは須らく高く且つ大なるを要すべしとせば、かゝる理想を其の胸中に描きて孜々螢雪の功を積む、固より不可なしと雖も、顧みて其の理想を實行し得るものゝ、極めて落寞なるを思へば、誰か又た憮然として悲まざらんや。蓋し志望徒に大にして、行事の之に伴はざるは、失望の因なり、失敗の原なり、墮落の基なり。是れ豈に予輩の青年學生に望むところならんや。男性既に然りとせば、女流豈又た然らざるを得んや。予輩が女學の勃興を唱道して、其の隆盛漸やく今日の如くなるを悦ぶと共に、早くも將來を慮りて憂慮する所以のもの實に此にある也。

今日の女學生が、修學の上に於て、其の理想の目的とするところは、果して如何あるか。道を學び徳を修めて、良妻となり、賢母とならんとするは、普通の希望

なるべし。之より以外また希望とするところなきか。一藝に熟し、一能に達して、女流として毫も遜色なからんを求むるは、普通の目的なるべし。知らず、之より以外また目的とするところなきか。一般女學生の希望と目的とをして此の常規の外に逸せざらしめば、其の理想は貞操、慈愛、孝悌、温和等婦人特有の美德を發揚し、品質を高尙ならしむるものに止まらざるべからず。抑も斯の如きは、古來聖賢の訓ふるところ、東西學者の戒むるところ、婦人修學上理想の上乘といふべし。夫れ妻として貞操、母として慈愛、長上に事へて孝順、他人と交りて温和ならば、婦人たるの道に於て、又た何の遺すところかある。夫の內助といひ、家事の整理といひ、婦人の交際といふもの、皆な此內に含蓄せざるはなきなり。今日の女學生が其の可憐なる一片の胸中に常に夢みつゝあるものは、果して此の常規の範圍中に止りて、毫も其外に逸出せずんば則ち幸なりと雖も、彼の妙齡青春の身を以て、雲の如き束髪にリボンを結び、薔薇の簪をかざし、洋靴を穿ち、洋書を脇挾み、三五隊を成して、市街を徜徉する紅孃子の內には、猶彼の青年學生が、英雄、豪傑、大學者、大事業家を夢想するが如くに、遠く婦人の常規を逸したる理想を

懷抱するもの、全く是れなきには非ざるべし。若し果して然りとせば、個人に取りても、社會に取りても、將又た國家に取りても、その影響するところ決して鮮少ならざるべし。

多くの青年學生が、中等教育を卒り、進みて高等教育に入るの利害如何は、現下に於ける重要なる疑問に屬す。中學を卒業したる學生が、其の人生の徑路に於て、早く業務に就きて以て前途の方向を定むるは、國家教育の上より觀察して、寧ろ無害なるも、更に進むで高等學校に入り、又た大學に入りて、人生の一半を學校生活の間に經過したる學生の多くが、學校より出でゝ、始めて公私の生活に入るに當り、其の豫期したる希望計畫は、浮世の風波の爲に漂盪散逸せられ、其の嘗て學びたる學問の實行應用を試むることを得ざるが如きは、啻に其人の爲に遺憾なるのみならず、社會經濟上及び事業發達上に於て損害を與ふること少からざるは、識者の夙とに痛嘆するところなり。一定の職業に從事して、獨立の生計を營むべき天分を有する男子すら猶且つ斯の如し。況んや夫唱婦和を以て天性とせる巾幗者流たるに於てをや。斯く言へばとて、予輩は決して婦人の高等なる學藝を修むるを否

定せんとするにはあらず。唯徒らに志を高遠に馳するの結果が、婦人常規の外に出で丶、之が爲め及ぼすところの弊害を憂ふるにあるのみ。

都下幾十の女學校に收養せる幾千の女學生は、實に將來我國の婦女社會を支配すべき運命を有する人々なり。是等諸孃の理想の如何は、未來の妻として又た母として、將た品位ある自活獨立の婦人としても、直接に及ぼすところの利害は實に大ならざるを得ず。而して將來女學の盛衰消長も、亦た繫りて此に存せずんばあらざるなり。予輩は敎ふる者、學ぶ者、共に意を此に致して、萬一の悔を他日に遺さゞらんことを希望せざるを得ず。若夫れ婦人と職業及び生活の問題は、別に解決を要すべきもの、余輩他日を期して之を論議し、以て大方の敎を乞ふべし。

（靑眼子）



論説

子女監督の注意

東京府第一高等女學校長　伊藤貞勝

學校に於ては、素より子女の教育を引受けて居ることでありますけれども、何分僅かの時間を以て爲すことでありますから、私共の希望の十の二三も出來ぬやうな有樣であります。デ、生徒の教育は學校と家庭と相協力して遣らねばならぬと思ふ。故に生徒の入學の初めには、成るべく其父兄或は保護人等に來て貰いまして、此事を充分に話して置きますけれども、ドウも家庭の修養が學校の希望通り充分に行屆かぬ點があります。依つて私は何とかして、生徒の家庭の有樣を知りたいと存じて居りますが、只今私共の學校の設備では、家庭の人と接すると云ふ機會を作ることが出來ませぬ。併し嘗て斯う云ふことを遣つて見ました。生徒の家庭に於て生徒が、學校の教課以外に學んで居ります所の學課目、其學習する時間の數、或は内にて修めて居るか、他へ習ひに行くか、其から雜誌とか新聞とか云ふものは、何う云ふ物を買て見て居るか、其他家事上の手傳などは、何んな風にして居るかと云ふことまで、生徒に無記名で書かせた。ところが生徒も無記名でありますから恥づる廉もなく、遠慮なく書きました。其を見て、生徒が家庭に於て學校の教課以外に何んなことを爲て居るか、又父兄は生徒に如何なことを爲さしめて居るかの一班が判つて、大變に學校の參考になりました。尙、今後は、日曜日とか或は其他父

兄の多少閑のある時を撰びまして、一學級又は二學級位の生徒の父兄、重に母親とか、伯母さんとか、すべて、平常、生徒の仕付方に、直接當つて居る處の人に來て貰ひ、而して學校の教育法、仕付振りと云ふものを話し、且又観て貰ひ、尚、其母たり伯母たる人の希望なり、仕付振なり、又生徒の性質上の偏癖とか、或は身體の强弱とか、或は特別な病氣の有無とか、或は内に於きまして、特に注意する仕付などの點とか、ソウ云ふやうなことを、此方から進んで聽きましたならば、大に生徒の教育上に都合が宜からうと思ふが、種々事情の爲に實行は未だ致しませぬ。是迄の處は、ドウも家庭に於きまして、子女學藝の進歩を非常に急ぐ傾があると思はれる。爲めに子女の心身の强弱如何をも顧みずして、種々の學課或は技藝などを學ばしめると云ふやうな傾が往々あります。是は私共が甚だ心配する點で、只今學校あたりでは、最も注意を致して居る。是に就て私共の希望する處は、其家庭に於て子女を監督保護せらるゝ人は、一應學校へ來て、受持の教師などに就き、學校の見る所を聞合せ、其生徒は如何なる學科が長じて居るか、又は如何なる學科が短所であるかと云ふやうなことを相談せられたならば、餘程子女の爲になりはしまいか、徒らに父兄が、子女の上達をのみ希望して、餘りに種々なことを内で學ばしむることがあつては、腦力發達の上に、却て害を與へはしまいか、是等のことを父兄は宜しく本人の學校に於て受る課業を見て、尚は餘力ありと云ふことを確めて課さねばならぬのを、輕々に附する憂があるやうに思ふ。父兄に於ては子女が自宅の學習に付ては、餘程課目を撰擇して、而して課する分量を非常に注意して貰いたいものである。

又他の仕事、例へば家政科の如きは、高等女學校にては、重き學科として課してありますが、充分にこれを自習せしむることが出來ぬ。課した處が、僅かに割烹或は來客接待の實習位に止まつて、充分とは參りませぬが、是等の事は家庭に於て心得て置き、成るべく子女に爲さしめる方針を取りたい。中には子女を學校へ登げまして後は、餘計あ仕事は爲せないやうにして、お客樣風に取扱ふて遠慮するやうな風がありまして、其が爲に、折角學校で課します所の學科の効果が、幾分か減削せられはしないかとの懼がある、此等の事は大抵生徒の腦力の程を圖りまして、腦力の許す限は遠慮なく是等のことは、宅で遣らせるやうな方針を採つて與れゝば宜いと思ひます、ドウも學校へ出してあります間は、其やうな仕事は、餘り課しては往かぬと思ふて居るやうに思はれることがありますが、是は然うない方が善からうと思ひます。

其からして、服裝に就ては、東京は殆ど全國の流行物の中心とも稱すべき所でありますから、兎角、華美の風に趣きまして、學校に於ても、充分注意は爲て居りますが、其母親たる人が、時として、生徒は學校の訓諭に服する心持があつても、母親が學校の訓諭の主旨に戻りまして、美服を着せなければ、自分が滿足しないと云ふやうな風がありまして、寧ろ生徒自身は恥づる心持があるにも關はらず、親たるものが強いて着せる人があるやうです。是も學校に於て困難なる事情の一になつて居ります、尤も斯う云ふ事情のある所は一般ではなく、極めて少數ではある樣ですけれども、高等女學校生徒のやうな年若き子女の多數集まつて居る所では、二三然う云ふ家庭がありまして、其子女が着て來ると、從つて、善良の生徒

の風儀に大變な影響を及ぼしますから、誠に學校では困つて居ります、是等の事を考へて見ますと、益學校と家庭との聯絡を圖ることの必要を感じます、左れば父兄即ち多く母たる人、或は母の任務を取る所の伯母とか、姉とかは、例へ此教育の主旨を知らざるも、尚學校の希望を容れて、而して學校の主義と、家庭の仕付と一致するやうにしなければならぬ。

其から今一ッ父兄方が、子女の監督上存外冷淡ではありはせぬとかと思ふのは、只今私の學校では寄宿舍がないから、薫育の點に付ては、殆ど家庭に待たねばならぬ有樣になつて居りますが、……生徒の中、東京に兩親の居るものもありますけれども、中には自分の姉或は其他親戚の處より通學するものが澤山ある、處が此等の家には、其子女の外に書生又は下宿人等を置きます故、(尤も色々事情もありませうが)是らも監督者たるものが、子女の上に如何なる危險があるか、如何なる關係を生じはせぬかと云ふことに付て、餘り深く心を用ゐぬやうであるのは、學校に於ても誠に困つて居ります、尤も其父兄などは、自分の手許に置きますからして、一向危險のことも生じまいと思つて居るのか知れませんけれども、併し朝夕一家の内に居ることでありますからして、縦へ其間に取締が出來ると致しても、餘程、子女品性の上に、自然の感化を受くるとが多い、段々其預り居ります家庭の摸樣を聞いて見ると、中には甚だ不安心だと思ふやうな處もありますが、是等も父兄其他監督に當る人は深き注意を要するのである。どうも學校で注意する程に餘り深き注意がされてないか知らぬと思ふのです、爲に實際に於ては、別段の不都合はないでせうけれども、他から種々な揣

臆測を招きまして本人の爲めは元より、其父兄等の爲めにも、意外な迷惑を受くるものなどがあります。

其から家庭に於て一樣には言はれませぬけれども、子女の外出に關する監督を忽にして居るものが隨分有るやうです、東京のやうに、各府縣からして多くの書生、多數の青年其他無賴の徒も隨分集まつて居ります處に於きましては、餘程子女の夜中の外出に付ては、父兄が深く心を用ゐねばならぬ。然るに往々餘り注意しない父兄もあるやうに聞いて居りますが、是等も甚だ危險のことである。尤も東京は夜中の外出は一般にありますから、地方にて感ずる程には感じませぬでせうけれども、兎に角種々の誘惑物の多い處でありますから、子女を持つて居る父兄は、最も深く外出の注意を爲さなければ、誠に危險のことであります。

其から私立學校其他多くの女生徒が居ります處へ、往々見え善き子女のあるのを知りますと、之に向つて戲談半分に、種々の事物を書いて、書面を不躾にも送るやうなことが澤山あります、往々學校にも澤山ありますから、學校では嚴重の取締を致して居るけれども、隨分直接に間接に、或人の手を經て或は郵便に附して送くるとか、又匿名或は女子の名前を用ゐ、一見しては生徒の同僚から送つたもの丶やうに見えますから、恐らくは父兄も餘り心付かずして通常の郵便と見做し、父兄の疑を引かずして、子女の手に入ることがあるか知らぬと思ひます、是等に對して家庭に於ける父兄は、能く注意して疑はしき書面などがありましたならば、子女の眼に觸れしめぬやうに注意することが必要であります、父兄などから聞く所によりますと、近時は子女の間に書面の往復が頻繁で

あると云ふことであります。尤も曾て同學して居つたものとか、現に同窓のものに對して往復する處の普通の書面も多くなりましたでありませうけれども、兎に角一般の通信が餘程頻繁であると云ふことでありますから、其内には面白半分の前申したやうな書面に對して、應答爲合ふ恐があるのですから、女子の信書に付きましては、父兄たるものは、周到なる觀察を爲して、子女の取締をする必要があらうと思はれます。

禁酒禁煙に就て

靜岡縣師範學校長　大嶋　多計比古

貴婦人令孃。私は矯風事業の中で最も大切なる禁酒禁煙について、敢て諸子の援助を請ひ、その力に依りて、喫煙飲酒の惡習慣を廣く社會から排除して、大に矯風の實を擧げたいと希望するもので御座います。

私はあなた方が喫煙飲酒の頗る卑むべく、頗る惡むべき、陋習弊風であることをお認めになつて居ることを承知すると同時に、無論あなた方には自ら酒を飲み煙草を喫するやうな、野卑陋劣なる行爲がないことを固く信じて疑はぬもので御座います。そしてあなた方は世の飲酒家、喫煙家を忌み嫌ひ鄙み輕んじなさるやうなことはなくとも、少くとも彼等を憐み悲みなさることであらうと私は信ずるもので御座います。

私は婦人女子に頗る同情を表するものであります、古來我儘なる男子の跋扈の下に久しく鬱屈して伸び得なかつた婦人女子に頗る同情を表するものであります、其の義を唱へ正を叫ばんとせらる

るや一言の下に之れをナマイキと稱し、オテンバと評し、出シヤバルと罵り、猿智慧と嘲りて、無理無體に叱り飛ばされつゝありし婦人女子に頗る同情を表するもので御座います。

西洋の諺に「小兒は大人の父である」といふ事がある、又「婦人は社會の母である」とも申します。夫れ故健全なる未來の大人を得んとするには今の小兒を健全に養成せねばならぬ、而して其の養成の任に當らるゝものは重に婦人方でありますれば、私が殊更に援助を請はぬとしましても、健全なる大人を得やうといふ點から、當然此の矯風の事業にお骨折り下さらねばならぬことゝ存じます、又婦人の發達進歩は、現今社會の發達進歩を示す標準である。婦人の程度が低いのに、社會ばかりが高尙であるといふことは出來得べからざることである。婦人が鬱屈不伸の境遇に沈淪しながら、社會ばかりが發達進歩するといふことは出來ないことである。若しも夫れが出來るとすれば、夫れは眞ではない、僞なのです、實的ではない、形的なのです。精神的ではない、單に物質的なのです。

私は婦人の地位、婦人の境遇、婦人の勢力を大に高めねばならぬと思ふのであります。婦人に依りて社會の改良風俗の矯正を圖らうと思ふのであります。勿論私は女尊男卑を唱ふるやうなものではない。けれども男尊女卑は確に東洋の一弊風と認むるものであります。

社會の改良、風俗の矯正、これは頗る大問題である。この大問題の解決を貴婦人令孃に望むのは、即ち曾て沈淪したる婦人の地位、境遇、勢力を大に高めたいと思ふからである。否、今日婦人の地位、境遇、勢力等は漸次高まりつゝあるのである。ですから此の際あなた方の援助に待つことが

頗る大なる次第で御座います。

社會の改良、風俗の矯正、これは頗る大問題です。此の大問題を解決するには、廣く諸種の方面から、仔細に觀察を遂げねばならぬのである。けれども喫煙飲酒は確に風を亂り俗を壞ることの重なる原因であると私は思ひますから、先以て貴婦人令孃の力に依りて、此の惡習慣を排除し、貴婦人令孃の力に依りて、純潔なる家庭と、高尚なる社會とを構成して戴きたいと熱望するので御座います。今や輕佻風をなし、浮薄俗を爲せる時に當つて、政治家も、實業家も、學者も、軍人も、大に本氣でやらねばならぬ、眞面目でなければならぬ、莊重ならざるべからず、嚴正ならざるべからず、殊に家庭を清め、社會を正さうといふ高潔なる理想を有し、重大なる任務を帶びらるゝ貴婦人令孃方に在りては、深く考慮をめぐらして頂かねばならぬと、私は思ふので御座います。

哲人言あり曰く、人間には二個の大敵あり、其の一は心を賊する邪道にして、其の二は肉体を惱す疾病なりとす、而して酒は常に此の二大敵を煽動して、人間を襲ふものなり云々。蓋し酒とは凡て「アルコホール」を含める飲料にして、之れに醉ふとは其の毒に感ずることである。そして腦が充分麻痺せる時の有樣を酩酊といふのである。今其の毒に感ずる模樣を述ぶれば、先づ之れを飲む人の腦髓をして其の常を失はしめ、次で視力朦朧となり、喜怒其の節に中らず、言行其の宜しきに合はず、猥りに狂亂の振舞あるに至らしむるのである。思ふに人間の精神を鈍くし、身体を傷ひ、災を子孫に及ぼし、遂に國家を衰亡に陷らしむる者、酒の害より甚しきはないのでせう。

飲酒と肺病の關係如何、飲酒と癩病の關係如何、

飲酒が直ちに肺病や、癩病の原因となるのではない、けれども、飲酒家の血液は、諸種の病毒に敵する丈の抵抗力に乏しいのです。健全なる血液には殺菌力と稱する一種の力があつて、たま〳〵黴菌に侵さるゝも容易に之を殺してしまふのであるが、飲酒家の血液には其の殺菌力が消滅して居るから、飲酒家及飲酒家の子孫の身体は肺病や癩病を發生するに都合のよい組織構造となつて居るのである。

酒が血行機に及ぼす害、呼吸機に及ぼす害、消化機に及ぼす害、神經系に及ぼす害等の如きは、極めて明亮なる事實でありますが、是れは追々と申し上げることゝいたしませう。

飲酒と風俗の關係如何、飲酒と犯罪の關係如何、方今風俗の頽敗墮落言ふに忍びざるものあり、而して其の原因は多く飲酒に歸すといふことが事實である以上は、極力以て飲酒の弊風を社會から排除するやうにいたさねばならぬではありませんか？犯罪に就ても亦た然りで、酒と云ふ者は實に犯罪の原因となる者です。即ち出刄庖刀を持ち出し、刄をふるつて人を殺害し、或は强盗をなすが如き大罪を犯す者は、多く酒飲みであるといふことは明亮な事實で御座います。

さて、世間には、自分は酒量に乏しいから、別に禁酒するの必要を認めぬといふものがありますが、それはなるほどそんな考も起るでせう、風教とか人道とかいふ事を無視するならば。

そんな考で居るなら風俗改良を唱ふる必要があるまい、公徳欠乏を絶叫する必要があるまい。自分さへよければよろしい、他を顧みるに及ばぬとは、あんまり聞こえた話ではないぢやありませんか？

（未完）



近古勇婦百譚

黑金子

井上河内守の奥方（其六）

御維新以後は令夫人同伴又は夫人一個で宮中へ參内すると云ふとも敢て珍しい事ではありませんが、舊幕府時代には絶えて其例なき事で、殊に其奥方ばかり御城へ召されて將軍に御目見の上御盃御肴迄賜はりましたと云ふのは實に空前絶後と云ふてもよろしい事でござります。

井上河内守正峰殿の奥方は松平左京太夫頼純殿の息女で母上は本多能登守殿の息女でありますから正峰殿とはお從弟どうしの緣組でござります、此お方は母ごの勇氣烈しき意地を受け續がれ類ひ少なき勇婦賢女でありました。平日家中の侍共へ御自分の化粧料の内から心付をなされまして、仰せらるゝには殿が何程忠勤をと思ひ玉ふとても家來と一致しなくては何事もできぬ、一人では大功は遂げ難いから家來をば能く召仕ふべきであると厚くお手當になりました。斯く臣下を愛ませ玉ふも理はりあることで、父方は東照公の御孫なれば此奥方は公の曾孫に當り、氏と云ひ腹といひ所謂遺傳と云ふものでありませうか。

扨河内守殿との御中は至てお睦しく、いつも御登城の刻は見送りに出で退出にもお迎に出られましたが、或時河内守殿に向ひ此以後御登城の時は御見送りに出でまじきよし奥方の申されますにより、其は何故であるかと尋ねられたれば、殿には

一命を拋ちて君へ忠勤し玉ふこと勿論なるに、今泰平の時なれども不意の出來事は殿中たりとも有間敷にあらず、淺野氏堀田氏の如き其例しで、如何なる勇者も妻子に心引れて思はぬ不覺をとり耻辱を受くることなしとも申難ければ御登城の時には御目にかゝらずして御退出に御迎に出づ可き由をお答になりました、殿も感心ありて然らば其通りにせらるべしとの事に定まり退出の節には女中を數人召連れて書院の次の間迄迎に出でらるゝに奧方は脇差をさし刀は召仕に持せ手づから茶を持て出でられます。

此由世上で取沙汰しまして聽て將軍の上聞に達しますと、將軍には御機嫌よく勇氣たぐひなき面白き女なり、御目見の爲め御城に召されんとの上意でありまして其事を仰付られました。奧方は大名の妻女が登城せし先例を聞かざれども上意有難きよしの御受を申上げ、扨殿に如何致すべきかと尋ね玉ふに、苦しからず指ての事もあるまじ、定めて其方の義貞を感じ思召しての事ならん、早速登城ある樣にと申されました。扨登城の當日となりますれば規定の行列花やかに平川口より御廣敷迄は乘物、其より駕を下りて奧へ通らるゝに、格式の下髮に搔取の衣裳の下へ尋常なる脇差をさし、仕女に刀を持せらる、流石に御老中の奧方とて行儀正しく、夫々の詞も替りて役々の女中へ挨拶あり、御次の間に控へて御差圖を待ち居らるゝ處へ、表局出來りて此方へと案内されます、此時奧方は腰の物を脫て近習の女に渡し、局を先に立て將軍の御前に出兩手を突き頭を下げ、冥加なる御目見一家の面目、家の譽れ有り難き仕合せと申上る、此口上が如何にも立派でありましたから、將軍にも御感淺からず致して、天晴聞きしに違はぬ器量

骨柄口上ともに男まさりあり、其方事は東照宮の御曾孫なれば我と一家の因みありとて御盃を下され、近うとの上意の時御肴とて御藏米三千俵一生の間下さるゝ旨の御墨付を下されました、(三千俵四斗五升入として今日の相場にすれば一萬五千圓程のものであります)奥方は重々の御惠み有難き仕合と御墨付を頂戴して退出致し、夫より直に御禮として御老中へ廻られます。其行列は先づ挾箱に黒羅紗の油たん隅切角に葵の紋の内に本と云ふ字を付けたるもの、同じ袋に眞紅の中結したる長刀を持せ、歩行士六人、女乘物で御老中の門前へ乘付けますと、門番は樣子を知らず女中の此處へ來るは何事やらんと狼狽て門を明る間もなく飛出して先供に尋ねますと、是は御老中井上河内守奥方なる由を申されます、番人は大に驚き急に開門しますと端下女草履を直す、奥方は乘物より立出で刀を差し小褄取り上げ大樣に歩行めば近習の女中は供乘物より下て左右に傅づき、跡乘の家老は馬より下て先き立ちます、門番は兩手を突き低頭し居るを見て奥方は手を出して下座を受け、徐々と玄關へ近付かれると取次の侍は式臺迄下りて口上を待て居ります、其時奥方は中腰になられまして、自は井上河内守の妻なるが今日登城仰付られ有難き上意の上御藏米三千俵私へ下され重々有難く存じ奉る、御前の儀宜しく御取成願ひ奉る、右御禮として女ながら直に參上仕れり、御自分よろしく賴入ると申し置かれ、其後夫々相應に禮儀ありて立出でられ、老中殘らず廻りて屋敷へ歸られました、是こそ眞の女大名と云ふものであらうと其頃世間一般に專ら評判致しました由にござります。

グリッセル、ベーレー夫人

宮館ざだ子

「ミューレー」夫人（グリッセル孃ベーレー氏に嫁して擧げたる子）の日記に左の記事があります。

斯くも一家淪落の際に方りて、市場の買物、屋内の掃洒、食物の調理、さては家人の衣服の仕立直し等に至るまで、一に皆母刀自の手を煩はさゞるものなかりき。母は常に甲斐々々しく是等の家事に從ひ、また速に之を爲し了りたりき。當時家計上の困難は、子供等に學校教育を與ふるの餘裕なかりければ、祖父の日課、毎朝彼等に、羅典佛蘭西、英語又は其他の學課を教授するにありき。母は家事上の餘暇を以て祖父の教筵に侍することゝせり。

母は其風采の表示するが如くに、其心だても極めて優美なりき。其涼しく温和なる眼、常にさえ〴〵として薔薇のごとかりし顔色は、今猶髣髴として其在せし昔を想起さしむ。

當時同主義者の亡命して和蘭に在るもの甚だ多かりしかば、祖父の一家は、斯かる貧境に在りても、尚常に彼等を歓待することを懈らざりしが爲め、食事毎に五六の會食者絶ゆることなかりしとぞ。

孃の一家は三ケ年半に渉る長年月の間、他邦に落魄して、具さに貧苦を嘗め、亦た種々の困難に遭遇した。けれども、後年孃の「ベーレー」氏に嫁して貴族の令夫人となり、何に不足なき富有の身分になつても、尚此當時の境遇を追想して、生涯中最も樂しかりし時であつたと、常に口癖のやうに人に語つて居りました、是は別に怪むに足らぬことである。元來、高尚な徳性を具へて居る人は、

如何なる境遇に處しても、隨處に心裡の滿足を買ふ丈の餘裕があるものであるから、孃が當年の逆境に處して、猶生涯の樂園であつたと云ふことを觀じて居りましたのは、恰も淸き谷間の水の無意識に自然に流れ去るが如くに、純潔高尙な人の心の境遇と周圍とに攪亂せられ、妨害せられざることを表證して居るものであります。

單り孃自身のみが當年の逆境に滿足して居つたのみならず、孃の一家は宛然がら春風の駘蕩たるが如くに、些かも他鄕淪落の憂苦を感せぬが如くでありました。丁度此時に於ける種々の面白き話柄がある。當時孃の一家には麥酒の一樽を貯へて居つた。是は來客に供する唯一の御馳走であります。或日客來の時に、父の「サー、パトリツク、ヒユーム」氏は「アンドリユー」とて、後年巡回裁判所の判事に任命せられた孃の弟に命じて、物置內の例の樽から、麥酒の一杯を持ち來らしめましたが、まだ幼けなき小兒のことゝて、樽に栓することを打忘れ、其栓をも其儘父の前に持來つた。「サー、パトリツク」氏は、之に喫驚して、倉皇しく物置に駈付けたが、是迄大切に貯藏へて居つた一樽の麥酒＝前にも後にも只一樽の麥酒は、旣に悉く漏出でゝ仕舞つた後であつたのである。が、一家の糊口にも差支へる程の境遇であるから、新に一樽の麥酒を買入るゝことは、到底一家の經濟が許さぬ。之にはほと／＼困りましたが、小兒の無邪氣なることは却て主客の興に入り、此上なき御馳走であつたと云ふことである。

亦た當時流寓して居つた和蘭「アトリヒト」市にては、鈴を鳴らして各戸を訪ひ、貧民救助の爲に義金を募集する慣習があつた。或夜此鈴は「パトリツク」一家の門前に立止まりましたが、貧窶洗ふが

如き狀態であるから、家内中を捜しても、僅に一「オルキー」(「オルキー」は當時和蘭にて通用したる最少額の貨幣なり)より外には、一厘一毛の持合せもなかつたのである。家族の人々は餘りに其少額なるを耻ぢ、誰も戸を開て之を與ふる程の勇氣がありませぬ。それが爲に「サー、パトリック」氏は、余儀なく自身に立出で「私共の所有して居るものよりも多くを義捐することが出來ませぬ」とて、慇懃に件の小貨幣、唯一個を渡したそうである。

一家の貧困此の如きの狀態であるから、亡命の際本國蘇格蘭より持來りたる僅の食器迄も、屢々質入しなければならぬやうなことがありましたが、後年本國に歸る時には、總ての質物を受出し、亦た毫厘の負債をも殘さずして、潔く和蘭を立去つた。

本國政局の一轉した結果として、孃の一家は再び故國に歸ることが出來、「サー、パトリック、ヒユーム」氏は「ウイリヤム」及「メーレー」の新政府に、樞要の地位を占むることを得たうへに、往年官沒された財産は、國會の議を經て還付せられ、且又氏の新政府に致したる功績と、長年月の間外邦に亡命し、具さに苦辛を嘗めた勞とに酬ゆるが爲に貴族に列せられ、千六百九十六年には、更に「マルシモント」の伯爵に陞叙せられ、後二十有六年を經、天年を全ふして逝りました。

「グリッセル」孃と「ベーレー」氏とは、共に和蘭に在る時よりして、既に偕老を約したる間柄であつたが、當時は亡命の身分且は世上の風波極めて穏かならぬ場合でありましたから、唯本國政局の一變して、芽出たく歸國し、共棲の時期にてもがなと、それのみ樂みとして居りましたが、愈々其時

期は到來し、一派の亡命者相踵で歸國し、且又「ベーレー」氏の徃年官沒せられたる財產は、悉く還付せらるゝことになつたので、二人の伉儷は、千六百九十二年九月十七日を以てめでたく合巹の式を擧げました。亦孃は父の貴族たるが故に「レデー、グリッセル」夫人として、人々に推重せらるる身分になつた。

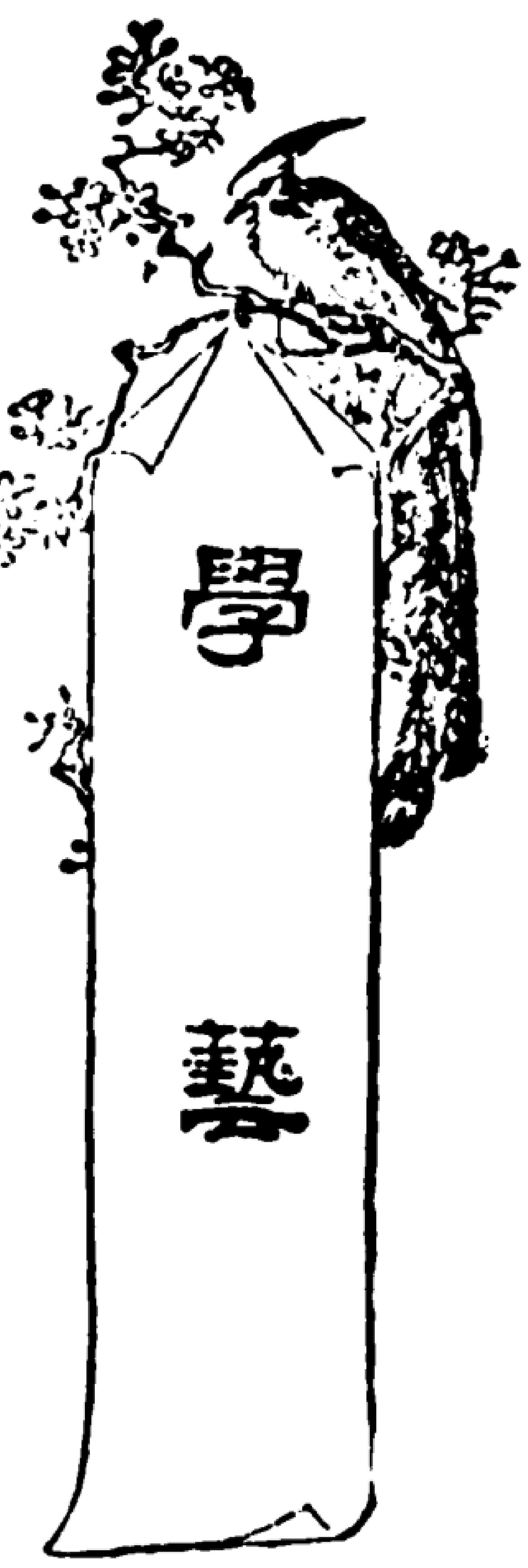
夫婦の間柄は琴瑟相和して、誠に睦しく、就中夫人は、夫に對して貞淑温順一般世人の摸範となつた。夫婦の間に二人の娘を擧げ、長は「サー、ミユーレー」氏に嫁し、次は「ハッデント」の伯爵「ビッニング」氏に嫁した。

夫人の處女時代に於ける生活の半面は、實に英雄的女丈夫的である。されども此半面の歷史のみを見て、直に其性行の一般を推定するは太甚しき憶斷である。夫人の其父に對し、良人に對し、兄弟姉妹に對する行爲は、眞個婦人の優しき心根の面影を留めてあるのみならず、自然に對する高尙優美な天禀の詩才を具へ、其名は蘇格蘭詩人の一に加へられ、其詩は今尙同地の人口に膾炙して、山高く、水淸き處に、樵夫牧童其淸韵を口吟み、屢屢旅人の耳を欹てしむることがある。

夫人は、千七百四十六年つひに逝去し、夫に先だつこと八年でありました。（完）

後白河天皇

濱千鳥ふみおく跡の積りなば
甲斐ある浦にあはざらめやは



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(三十四)

殿のきんだち、ふたところ、源少將雅通など、うちまきをなげ、のゝしり、われ、たかううちならさん、と、わらそひさわぐ。
へんちじのそうづ、ごしんに、さふらひ給ふ。かしらにも、めにも、わたるべければ、あふぎをさゝげて、わかき人にわらはる。
文よむはかせ、藏人辨ひろなり、かうらんのもとにたちて、史記の一卷をよむ。つるうち廿人、五位十人、六位十人、ふたあみにたちわたれり。

釋義

○殿のきんだち、ふたところ　道長公の御子息、二人の意、二人は、頼通、敎通なり○うちまき　散米のことなり、米をまき散らすは、惡鬼妖魔を祓はんがためなり、散米の起原は、上にいへり。○あげのゝしり　聲高にとなへごとして、米をうちゝらすをいふ○われ、たかう、うちならさん　人よりも、散米を高くなげつけて、音をさせんとなり。こは、陰陽師のするわざをまねて、わかき御子息たちが、さわがるるさまなり○ごしんに侍らひ　皇子の、御身を護らんために、御湯殿の間にて、法を修しつつ、つめて居たるなり○かしらにも、めにも　散米が、遍照寺の僧都の、頭にも、目にも當ら

たとするなり○あふぎを、さゝげて　僧都が、扇を捧げて、散米を防ぐさまなり。その樣子が可笑ければ、若き人たちに笑はれたるなり。
○文よむはかせ書を讀む役の博士といふ意なり
○藏人辨ひろなり　藏人にて、辨官を兼ねたる廣業○かうらん　高欄なり○史記一卷をよむ　史記、五帝本紀の黃帝の章なり。御產部類に引く所の敦記に、卅日乙亥、云々、藏人辨、讀二史記五帝本紀一、進レ自二本例一一二尺許、黃帝者、少典之子、姓公孫、名曰二軒轅一、生而神靈、弱而能言、幼而徇齊、長而敦敏、成而聰明、治二五氣一、藝二五種一、撫二萬民一、諸侯、咸尊二軒轅一、爲二天子一、三遍讀レ之と見えたり○つるうち　弓をひきて、弦を鳴らすことなり。これも、皇子の御身のまもりに、惡魔をはらふ儀式なり。さて、鳴弦のことは、皇子の御湯殿のみにあらず、むかしは天皇の御湯をめさすごとに、かならず、行はれしなり、禁秘御抄に、早旦供二御湯一、云々、藏人、爲二鳴弦一候二戶外一、云々、次典侍、取二河藥器一拋レ板、于レ時、藏人、鳴弦、是每日每度事也と見ゆ。
○五位十人、六位十人　鳴弦する者なり○ふたなみにたちわたれり　二列に立ち列べるなり。

譯解

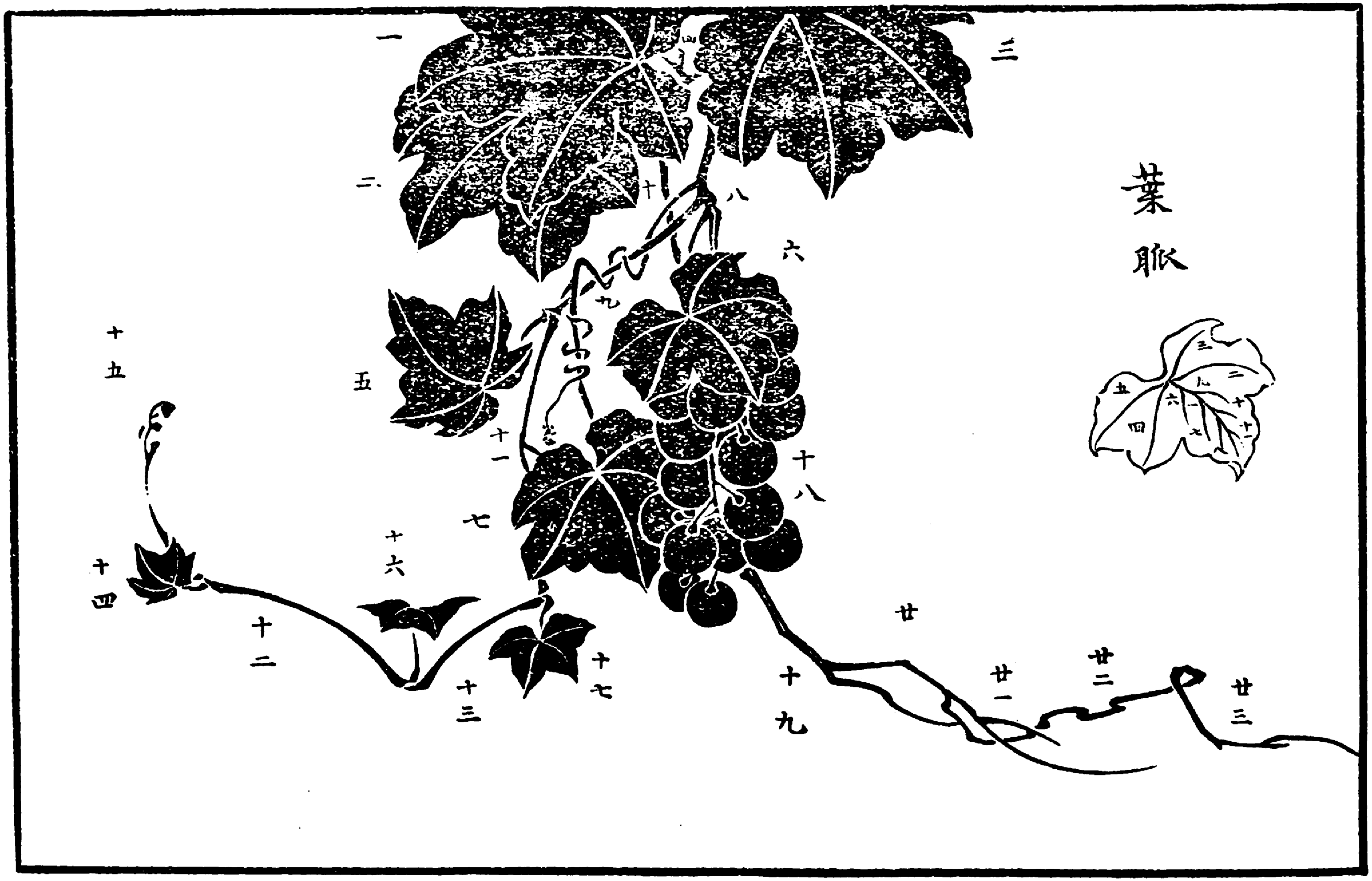
道長公の御子息、賴通、敎通の御兩人や、源の少將雅通などの若き人たちが、陰陽師のまねをなして、打ちまきの散米を擲げ、聲高に惡魔退散の、となへごとをなし、また、われがちに、散米をなげて、高く音をさせんと、たがひに、爭ひ噪ぐ。
遍照寺の僧都が、皇子の護身の修法の爲めに、御湯殿につめて居られたるが、あらそひ、きそ

ひて、われおとらじと、擲げかくる散米は、霰のごとく、頭にも、目にも當るやうなれば、こは、かなはじと、扇を捧げて、坊主あたまをおほひ、顏をしかめて防ぐ風つきの可笑しければ、これは、おもしろしと、若き人たちに笑はる。
また、御湯殿の御祝に書を讀む役の博士は藏人にて、辨官を兼ねたる廣業あり、廣業は、高欄の許に立ちて、史記の黃帝の章を讀む。
また、惡魔を祓はんため鳴弦するもの廿人、內五位のもの十人、六位のもの十人、あはせて廿人、二列に立ち列びたり。

和畫通信講義（第廿八回）

山崎彩峨

墨畫にては、葉は淡墨を含めたる筆先に濃墨を附して畫き、蔓は淡墨のみにて畫く。實は淡墨なれども、其の中、また、數色に濃淡を製して畫き、濃墨にて、果蔕、果點、葉脈を入るるなり。
彩色畫にては、其の時季によりて、寫生は勿論、意匠畫にても葉色を異にす。されど、多くは果實成熟の頃を畫くものなれば、まづ、葉色は、藍がちある深綠色か、または、藍に墨少しを和したる綠色かにて、葉綠に赭墨を用ゐるべし。蔓は、赭墨か、または、黃がち青色に赭墨を和したるものかにて畫く。實は、藍紅を混和したる紫色（濃淡ある方よし）と、淡き藍とにて畫く。（其の果實の間または、末端にある未熟の小球は、淡き青色にて畫く）果蔕は赭墨、果點は濃墨にて附し、葉脈は、藍か藍墨か濃墨かにて入るゝなり。


葉脈
一
二
三
五
五
四
三
二
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
廿
廿一
廿二
廿三

鳥類の言語

田中生

鳥類と交際して其言葉を聞き分けたり、其の眞似をしたりした話は、西洋でも日本でも御伽話には珍らしくないことであるが、玆に書くのは決して其様な話ではないので鳥類が其動作や、翼の音や、又は鳴き聲などで種々な感情、希望等を示す有様を研究して見やうと思ふのである一寸見れば鳥類は何一つ言葉を持つて居りそうでもないが、實際はそうでなくて憤怒、恐怖、怨恨、愛情、饑渇などの感情を言ひ顯はす言葉をそれ〲有つて居る、其言葉は勿論聲で云ふのもあれば羽音で暗號を通ずるのもあるし又身振りで示すのもある、併し鳥は種類によつて言語も辨舌も違ふので或る種類は澤山な言葉を知つて居つて能辨であるけれども、又或る鳥は言葉少くなで滅多には物を言はないけれども何の鳥でも魚類の様に全くの啞子は一つもないのである。元來鳥の言葉や暗號は大變古風で簡略である、則ち話す口數は少くても夫れが妙に充分な意味を以て居つて且つ對手の鳥にも能く理解されるのだ、これから一々の鳥に就て話さう。

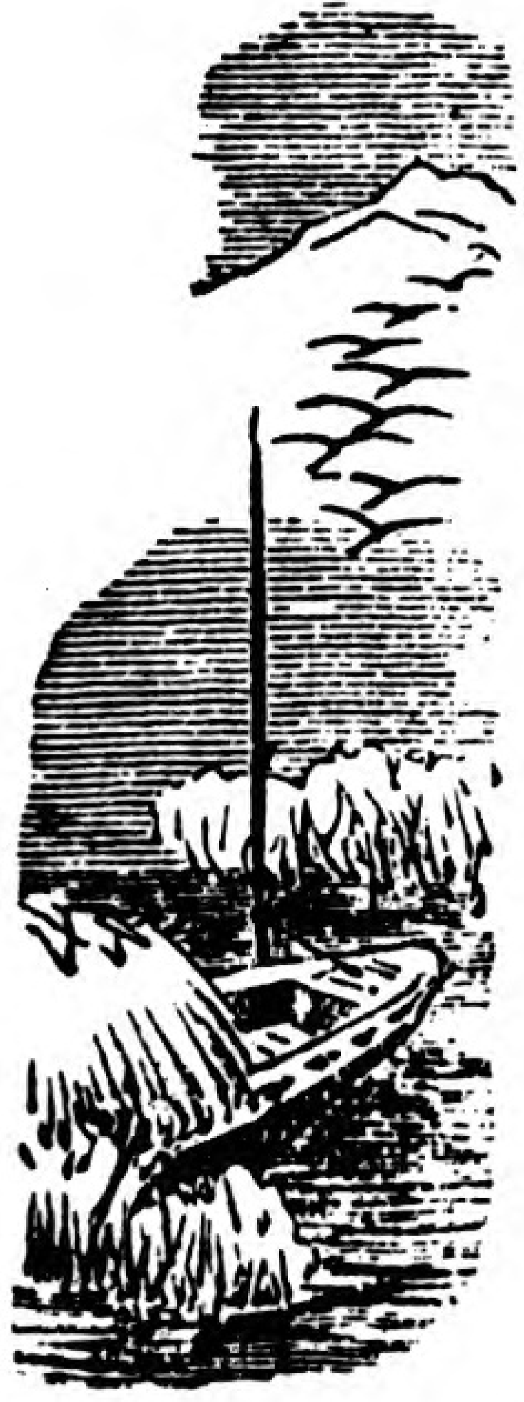
鷲の言葉や暗號は大變鋭くて丸で物を突き刺す様な聲であるけれども巣を拵へて兒を育てる頃になると不斷とは違つて柔しくなる、鷹は鷲と大同小異であるから云はない、梟類は極く感情強く鳴く鳥で恰かも人間の聲の様である時とすると音樂の響かと思はれることさへもある、雄梟の親愛の意を顯はす鳴き聲と、敵意を示す鳴き聲とは少し注意すると區別することが出來る、梟は急促な口調で鳴くこともある恐ろしい權幕で鳴くこともあ

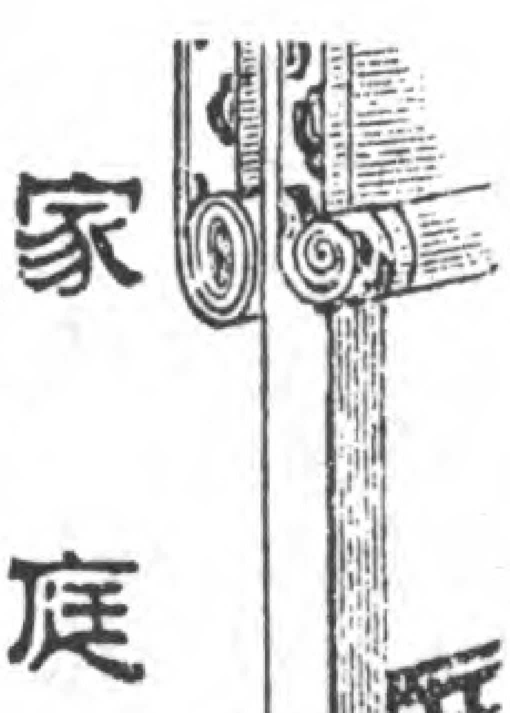
る、それに又鼾聲をも立てるから面白い他の鳥を驚嚇する時には啾々と叱聲を揚げるのである、嘴太鳥と云ふて通常の鳥よりは稍大きな種類は高い聲でガア〳〵鳴く外に、莊重で悚然とする樣な聲を立てるが其聲は森の中に反響して凄じいものだ、通常の鳥の含情的な鳴き聲は一風異つて滑稽らしいのは誰でも知つて居る、偖て又白嘴鳥は子が生れると此上もなく喜んで歌はうと務めるのであるが元來口不調法であるから巧く歌ひ得ないのが面白い、鸚鵡がよく人の聲を眞似ることは讀者も夙に知つて居ることだから云はないとして、鳩の鳴き聲は又別だ何となく情に富んで居つて悲しい樣な口調である丁度失戀者の話でも聞く思ひがする、啄木鳥は高笑ひでもするかの樣に鳴く、蚊母鳥は黄昏から拂曉まで夜一夜𪀚𪀚とした四竹でも扣く樣に群がつて鳴くが恰かも戸外の夜樂でも聞く樣だ、凡べて調子よく歌ふ鳥は大抵友鳥に挨拶しながらに和樂の情をお互に通ずるのである、燕は餘程鋭敏なもので鷹鷲などの猛鳥が見えたら直ぐ仲間に警報を傳へる、鶴だの鴨だの雁だのと云ふ薄暗い所に巣を造つて居て晝は水中に群游する鳥や夜中に食物を探す鳥は、大變大きな騒がしい聲を出して鳴くが之れには譯があるのでつまり友鳥を見失つて獨りにならない爲めである。

野外に居る鳥に就いては此位にして置いて次には人家に飼養する家禽の鳴聲を述べやう、最初に先づ孔雀、孔雀は非常に美麗であるので吾々の注意を惹くが凡べて外觀の美しい鳥の常として其音聲は荒い羽磨りの音で、一寸怖しい、人によつては猫の聲や驢馬の嘶きよりか之を嫌ふのである、又鵞の聲は丸で喇叭の樣に大響がする昔し鵞の鳴聲で羅馬城の圍が解けたことがあると今でも

歴史家が云ふて居る、雄雞の聲は他を恐嚇す風があつて何となく恐ろしく聞えるが、それは自分の子供を保護しやうと思ふて他の鳥を寄せ付けまいと思ふからである、鴨は雄と雌とに依つて大變其聲が違つて居るが面白い、雌の方は高く朗かであるけれども雄の聲は低くて濁つて居つて聞き取り難い程弱い、七面鳥の雄は無作法な風體をして雌の方に揚歩しながら貪食するが敵が來ると粗暴な意地惡い暗號を傳へる、雌は子持ちの時になると油斷なく子鳥の保護をするが若し肉食禽でも近づいたら非常に心配して熱心に高い叫び聲を立てゝ小鳥に危險を知らせる、生れて七八日ばかりの雛雛を蠅の澤山居る所に連れて行くと直ぐ馳々とした喜び音を揚げて蠅を取つて食ふが、それが蜂ででもあつたら氣に食はぬ聲を立てゝ危險の來たことを訴へる樣子である、産卵期になると喜びの聲を立てゝそれを知らせる元來産卵は雞の一大事で卵を産み終へると直樣喧噪な聲を出して巣から飛んで下りる、さうすると雄雞も仲間鳥もそれと悟つて一所に喜び鳴く、其鳴き聲を聞き付けて他の雞も鳴き出し終にはそこらあたりの雞は皆んな一所に鳴き出す、子が育つと母雞は熱心に其子雞に言葉を敎へながら連れ立つて食物を探して歩るく、又雄雞とても言葉も澤山知つて居る若し甘い食物でも見付け出したら一番氣に入つた雌雞を呼び寄せてそれを遣る、そして犬でも猫でも蛇でも來たら直ぐ鳴音を立てゝ警報を仲間の雞に告げ知らせる、美麗な雄雞は情語をも話すのであるが人が一番氣付き易いのは例の早朝夜明けを知らせる聲である、昔時時計のなかつた時代には何處でも雞が時計の代りに夜明けを知らせて居つた今でも田舍に行くと時計の代用に養雞して居る家が段

段ある樣である。
勿論鳥の鳴聲で鳥の思ふて居ることが吾々人間に通ずる譯のものではないけれども不斷注意して研究したなら其大體の意味は解る樣になる、鳥類を愛することは優美な高尙な事で自分の樂しみにも大變になる、格別鷄家鴨小鳥など飼ふ人は注意して研究したら此上もない面白い事と思ふ、山や野に行つても研究することが出來る、動物園に行けば尙更ら都合よく研究が出來る、讀者の方々に研究を勸めて置いて筆を擱く。





産所式

東京女學館講師 有住常子

産衣たゝみやうの事

うぶぎぬを疊むには、下がへを上になして背の通りより背の方へをりてよし、さて、すその方三分ひとつほどをうらの方へ折返しおくべし、さて是をつゝむには、袖を上がへの上へ折かへしてよし

うぶぞりの事

うぶぞりは、小兒の身の火氣つよくして小瘡など出來る事ある故、火氣を外へもらす爲に髮の毛をそるなり、よくかみそりをつかふひとにそらするなり、

産夜祝の事

初夜は誕生の日なり、當日には内々にて祝の盃事あり、吉日をはかりて別に表向に初夜の御祝とて行ふなり

三日めの祝は三夜の祝とて、右の初夜にならひて別段の日をえらびて行ふべし

色直しの事

色直しは誕生日より、百日の間は産婦も小兒も仕ふる女も皆白衣を以て正装とす。百日すぎて色の衣をきかゆるなり、是を色直しといふなり。

女禮心得草（八）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

一同の禮

普通の致し方は

幾人でも一同に出まして、一人の貴人を拜します時には初め出ます者が静に出まして、あとについて出ます者が、段々に早く出ますので、これは續いて歩み出ます時の心得で、初めの者が静に出ませんとあと〳〵の者が順序よく進む事が出來ません、それゆゑに静かに進みます、それから順序よく歩みいでて、ならびたちまして、左がはへ向きます時は、一同に向なほりましてならびたちますのです、右がはも是にならつて知られましやう。上座のひざからつきまして、下座のひざをつきます、それから、上座のひざをあとへ引ながらつまだちたるかゝとをおろしまして、下座もひざを引いてかゝとをおろします、さうして、通常のとほりで禮をいたしますのです。かへりやうは、下座のひざより三ひざひきまして下座のかたのひざかしらをうかめまして左のかたへひねるやうにいたしまして、下座

の者より段々にたちてかへるのです
右の仕方が普通のであります、實用にかなひました仕方は少しちがひますが、今こゝでは御はなしができません、
たやすいやうに仕方を御はなしいたしますと普通の仕方で敎へて居る人々や、普通の仕方はどにも出來ぬ人々や、又人の敎へ方をすぐにぬすみまして小笠原流などと舊弊な敎へ方に取りませて敎へながら自分で發明したるやうにする者が多くありまして、正しい實用の禮法をまた、無用な禮法に混交してひときわあやしい敎授法がたちまして修學の人々が迷ふやうになりますから、こゝには御話しいたしませぬ事にいたしました
御執心の方は、あやしい禮法の敎授者に習ふ事の益もないと云ふ事に御注意なさいまし

禮節談片（續）

石井泰次郎

包結の栞（三）

（上の卷の包物の部）

この包物の部は、第一の熨斗包眞より、卷尾の水引結の胡蝶に至るまで、一冊として、某家の所藏に見る事を得て居るから、著者の知る所で無いものと思はれるが、其包形の可否については、可とずべき物は一ツもなく全卷皆否とすべき物のみである、其否とすべき證跡は、此包形を習はない人々にもわかる解釋を下して云へば左の通りである
折形としての名稱、折形につきての原料の紙取法がある、其紙取法が、俗用の小笠原流でも傳授物になつて居る、はじめ習ふ者には敎へないで、紙を敎師の方で裁ておいて、一つの雛形をあてがつて其たつておいた紙で折らせるのである

是を紙取の仕方として折形の教授法を一通り習了した上でなければ傳へないのである、それであるから今でも、古く習つた人で紙取の仕方をしらないで教へて居る人があるが、其教へる所は紙取法がしてないのである、紙取法のしてない紙で折たのは、形狀がとゝのはないので、實用にはならないのである、此包物の部は即ちこの傳授をうけぬ人の記したもので、うけぬ人の引うつしたものである、と云ひたいのであるがさうではない、うけた人の元形があつたのを、うけぬ人が紙にうつしたのであるといはねばならぬ、其證として見るべきものは、なは某家所藏本と同一の證として動かすべからざる證として見る事を得る點でそれは形狀の横長なる紙を四角にたゝないで、かりに其一端を折つて四角なる紙としてつくつてある扇子包別法の圖である、これは元の包形を習つた人が假に折ておいたのを、ひらいてうつした人が其まゝに寫したのであやまちの折形の標本となつたのであります、のし包の眞は名稱をちがへて草と行とは折形を習つた人がをりちがへておいたのを寫したのである、共に著者の知る所であるまいと思はれるからいふまい

もしこれを清水廣長氏より教へられた者とすれば其原書を清水氏が標本として教へられて居るのかも知れないが、清水氏の傳統のものではないとは清水氏の兄でしの某が余にかたられて居る、もし編輯者の教授をうけたる所にして必ず古來の一書籍よりとつたのでないとすれば、世上新刊の禮節書中において第一に見るべきものとして差支がない

包物にも傳への統があつて容易に何なものでも教

授用にするといふわけにはまゐらないのである

挿花の話

小畑いく子

私は今日より挿花の事に付きまして少し御話を致しませうと思ひます。近來この活花も非常に流行致しますに付ては、種々委しい書物なども出來て居るやうです。また新聞に雜誌にさま〳〵掲載してもありますから事新しく申す程でもないやうですが、まだ少しと思ふ所もあり、また片腹いたく思ふこともあり、かた〳〵少しく考へ置きました事柄もありますから、初學の方の御參考ともなりましたら幸ひです。

活花の傳來とか起源とかに付きましては、各流各派さま〳〵にいひ傳へもありますれど、大體が甲よりは乙、乙よりは丙と互に少しにても古きを名譽の如く思ひまして、各自後世の者の構造説ですから、いかにも信じられませぬ。兎に角植物を神佛に供するとか、或はやさしき一本の花を瓶などにさして賞でたといふやうな事は、隨分古くよりあるやうです。しかし今日の如き技術的になりましたのは、確に徳川時代に於て、いちじるしき進歩を致したものであります。其進歩に隨ては種々の弊害も始りましたが、これは活花にかぎりませぬ、何にでも到底まぬかれぬ現象です。が、まづ今日私が申しませうと思ひますのは、其傳來や起原或は沿革などに付ての事ではなく、現に今日盛に行れつゝある事柄につきまして、大體の心得方とも申すべき事より御話し致して、追々と挿方の注意とか、水揚の方法とか或は各流各派に於て秘傳と申して、むやみに大切がりて猥りに人

に敎へない樣にして居るものがあります。これは實に大なまちがひです。かういふ垣をこしらへるから、挿花の進步は大に妨げられて居ります。さやうな事など、いさゝか經驗上より心づきました限りを追々と御話しする積りであります。

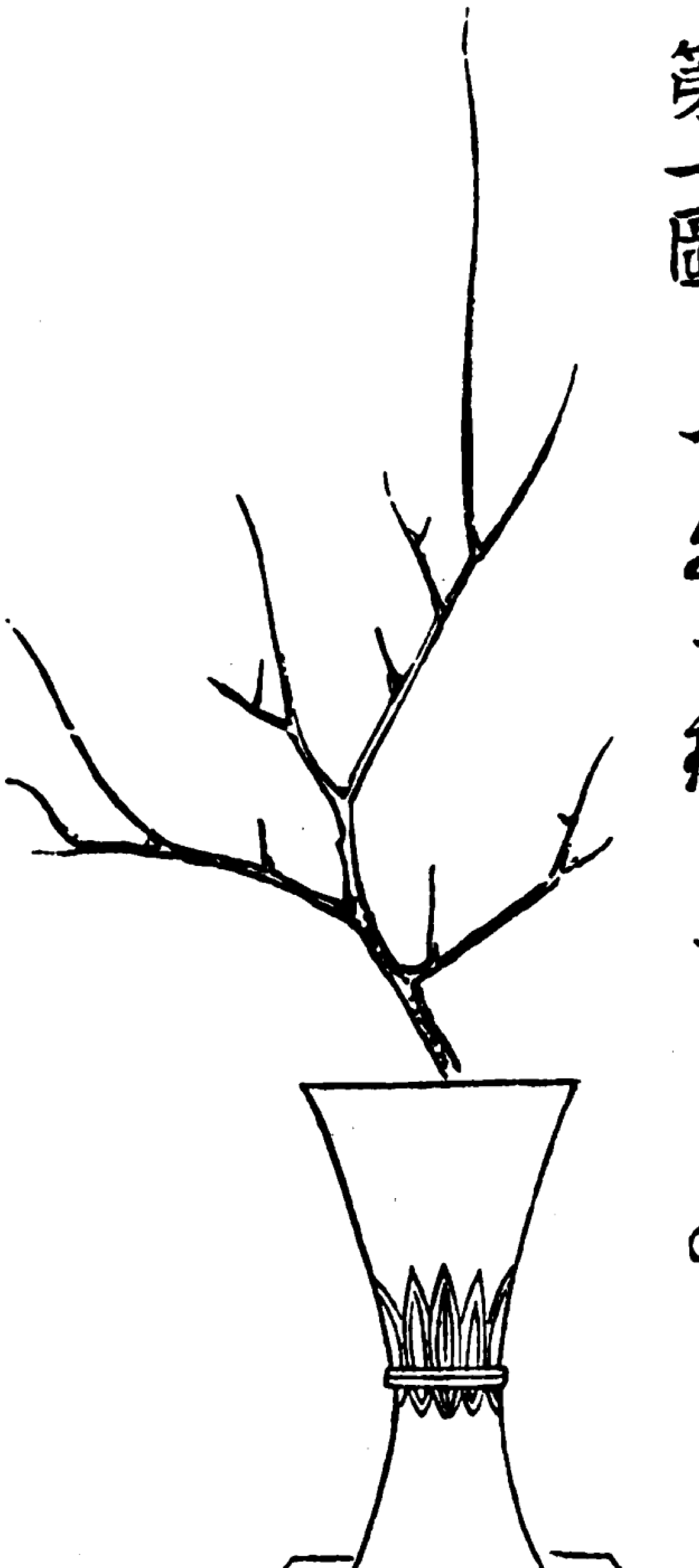
全体挿花といふものは、何の爲にするかといふ事が大主眼で、それは勿論人に美的快感を與ふるが目的であります。一口に申せば何でもないやうですが、人に快感を與ふると申す事は、中々容易な事ではありませぬ。それが即ち美術の美術たる所でありませう。

それは僅の小枝を以て苔むす大木の地上に繁茂する狀を現し、または個々の花莖を以ちましていかにも籬によりてやさしく咲き出た一本とも見ゆるやうに挿すのが肝要であります。それには此天然といふ事をよく〳〵心にとめて置かねばありませぬ。草にもせよ木にもせよ皆それ〳〵の性質を以て居りますから、花の終てから葉の出るのもあり葉よりまづ出るのもあり、花の高さがあり、葉が高さがあり、梢より咲きはじめるもあれば、幹より咲き上るもあり、種々さま〴〵にある其性質を失はねば、自然、天然に叶ふやうに出來ます。それを啻に其流義〳〵によりまして定められたる花形以外には出來ぬものといふやうな、窮屈な敎へを守り、無意識に挿て行くものですから、不自然なものばかりが出來て人に快感を與る事が出來ぬやうになります。

然し此流義に依て定められてある花形と申すものは、いづれも出來上りました一瓶の花に付て、全體の力の平均といふ事には、大ていよく注意がしてあるやうです。勿論、その注意が屆かないならば、倒れそうな花ばかり出來て仕舞ますから。

同じ美術の内に置きましても書畫などは、よく人を感動させるものであります。書などは別に彩色を施すものでもありませんが、巧手の書た字はいかにも生て居るなど俗にも申しますが、皆これ筆法の正しく精神よりかくのと、筆先ばかりで形をなすのとのちがひであります。書畫一筆で、畫もまた其通り紙上に現れて居る物の外に人を感動さする、一種いふべからざるもののあるのが名畫であります。挿花もやはり少しも其理にかはりはありませぬ。

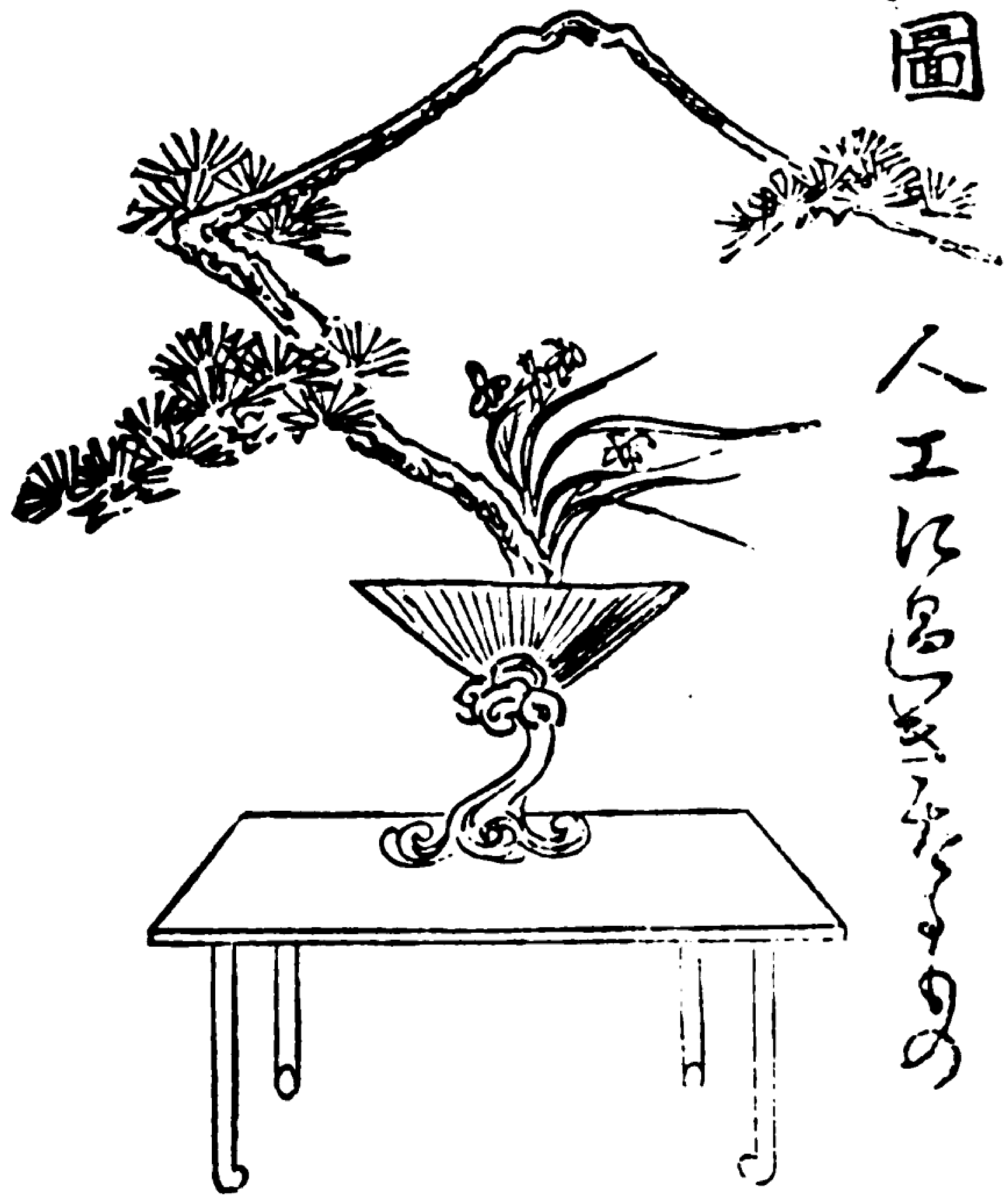
また畫に寫生畫と理想畫のあるやうに、花にも自然そういふやうなかたぶきがあります。前にも申た通り、活花は、人工を以て自然の體を助けて參るものでありますから、いつしか自然派に人工派といふやうな工合に分れて參りまして、自然派の方では全く人工を加へない、人工派の方ではあくまで人工を加へやうと致しまする。其邊からして自然流派といふものが出來て參りましたのでありませう、當時の遠州流のうちのある一派などは人工があまり多きに過ぎて、殆んど天然を失はんとして居ります。また池の坊は天然に過て變化に乏しく、實に中庸と申すものは生花に限りませ



第一圖　天然を現したるもの

んがむづかしいものであります。から申て參りますと、ます〳〵むづかしくなりますが、つゞまる所、自然のゆるすかぎりは人工の技を加へ、技術を以てよく天然の意をもたせるといふ事を忘れねばよろしいのであります。

第二圖



人工に過ぎたるもの

一室内、他の裝飾品と挿花との關係に付きましては別に項くはしく申します。此に掲げました第一圖第二圖の書は、よく天然の意を助けて寫生的の僻に陥らざると、人工を加へ過て花の神聖を失つたものとの二種であります。

[illegible] 男子には美術上の力を非常に具備するもの、往々にして之れあり。然れども總体より之れを評する時は、此力なきもの多しとす。之れに反し女子には、美術上非常の力を具備するは稀れなり。然れども總体より之を評するときは、何人も大抵皆な此力を有するが如し。

（コレリッヂエ）

だいどころ

割烹學校講師　石井湧太郎

一　酢物

たゝみ鰯の遣ひかた

用意の品は、黄瓜に、酢、白味りん、食鹽、たで等です、たゝみ鰯を一寸美味に食するには酢のものか茶碗でせう、先づ一日間位水に浸して置いて用ゐるのがよろしいので、夏は一二度水を取りかへて漬けて置くと、まるで生の樣に成るますから夫れを笊に揚げて能くほぐして水氣をなり丈けよく切りまして夫れを鹽酢に浸して置きます、鹽酢と言ふのは酢と食鹽の合せたものです次に黄瓜の皮を薄く剝いて、竪に二ツに切り中の種子を取りのけて、小口から極く薄く切りますので、之れを薄く切るには薄刃庖丁を用ゐないと見事には切れません、其所で薄くうちましたのを鹽水に取つて置いて、其の次は酢と味淋を合せて一度煮返し冷して置く之れは甘酢です、是れで一ト通りは出來上りであります、之れを盛るには酢の物は皿の向ふへ黄瓜の水を絞り箸の先にて一旦之れを崩して程よく見計ひ盛ります前盛りには鹽酢の鰯との二品を盛り合せて甘酢をかけます、たでは穗先迄上置にするであります、又鰯は水に浸さずに直に火に燒いて少し焦がす位にしたのを、湯に浸し夫れをほぐして用ゐてもよろしいのです、

一　よせもの

いちごくわん

用意の品は、いちご、白角天、砂糖、味りん、食鹽、

○手順

一、いちでは二十個ばかり疵のなきものを撰びて水にて洗ひうてなを取りて置くべし。

二、湯に砂糖を百匁入れて水一合五勺を以て之れを火にかけ溶かし、よく解けたる時之れを絹篩にて漉し塵と砂とを取り去りて、別器に入れて置く。

三、白角天を三本之れは水に浸して置き、よく水の通りし頃、絞り揚げて、小口より至極細かに刻みて、水五合を鍋に入れ其の中へと取りて煮浴かし之れは馬尾篩にて、漉すをよしとす。

四、角天の溶かしたるものと砂糖の解けたるものとを合せ、倘味淋五勺、食鹽二匁程を入れてよく攪拌し文火にかけ少時間煮詰め、ブリキ様の器に流し込むなり。

五、右流したる角天の上部に、少し薄皮を生じた頃を見計ひ、洗ひ置きたるいちでの果を入れて位置よく並べ、此の如くして一時間餘も冷し置けば凝固するなり、斯くて中央も固まりたる時形より拔きて庖丁すべし。



東京府伊豆新島の女

理學士　福地信世

大陸と島とは開化の進歩する模様、風俗の移り行く狀態が大に其趣を異にして居る。大陸にては事物日に日に新にして開化の進歩は引き續き徐々に進み行くのであるが、島に於ては決してさういふ事がない。即ち、一度大陸より開化と風俗とが

移り來る時は其後數十年乃至數百年も依然として其風を固守して居る、そうして再び或る事情により大陸から新開化の風が入り來るに及んで驚いて急に其風俗等を改めるのが普通である。是れは島が海水を以て大陸から分たれその鋭き刺激を受くる事なく別に海中に一小天地をなして居るからである。

其故に今日にては大陸にして少しも見る事の出來ぬ古代の風俗習慣を、島國に於て立派に見る事が出來る場合がある。ヨーロッパ大陸にて見られぬ古代の封建制度時代の遺風が多少英國の島だけには殘つて居る、印度本國にては佛教が亡びて居るにセーロン島にはいま尚ほ佛教が存して居る、又支那大陸では今日は古代の習慣が全く亡び蒙古風になつて居るに却て日本の島に唐宋時代の遺風が多少存して居る、是れ實に島の開化が大陸の開化と趣を異にするからであります。

島は開化の爲めに日々移り行く風俗の最後の隱れ場であるとは學者の定說であるが誠に然る可しと思はれる。

偖島と大陸との關係は斯の如きものであるが、それと同じく大なる島と其の附近にある小なる島との關係も亦同じである。日本の本島の風俗習慣が時代を追ふて移り行くと其の附近にある小なる島の風俗は依然として舊形を保存して居る事は多く見らるゝ事實である。

地圖を繙き關東平原の南方を見れば幾多の小島嶼は列をなして海中に散在するを見るであらう、此れを伊豆七島と名づけて、東京府の管轄に屬して居る。

源頼朝が府を相模の鎌倉に開きてより以來關東の開化は日々に進み德川の代となり明治の代とな

るに及んで遂に關東は日本開化の中心とまであつた。伊豆七島は此の關東に甚だ近く存在して居る島であつて、特に新島の如きは伊豆の下田港より僅に十里餘の所にあるにも拘らず。關東開化の大進歩の影響を受くる事少く今日尚は舊時の遺風の存するのは甚だ面白い事實である、是れ伊豆七島の島たる所以であらう。然らば伊豆の新島には如何なる風俗が存して居るか?。これより私が見聞したる事の一端を述べやう。然し男子の事は本紙を讀まるゝ方々には興味が渺い故特に女子の風俗のみを述べやうと思ふ。

◎◎◎◎◎髪と衣服等　先づ髪の事より云はん。女の髪の毛は皆漆の如く黒くして濃く生へ且つ極めて長い最も長いのは身長ほどあると云ふ話で、現に私が宿泊つて居た家の婦人などは立つて己れの髪を櫛で解くに甚だ困難である程長い、髪の毛の美はしく長いのは一つは天性であらうが主たる原因は髪の結び方が實に簡單なる爲め髪の毛が虐待を受けぬ爲であらう。


(一)


(二)


(三)

髪の結び方は色々あるけれど大抵圖に掲げた三種である。凡て髷は頭の中央にはなくて左の方に偏して居る、此れは新島の婦人は物を頭上に載せて

運搬する風がある爲め必要上斯く左に偏して結ぶ様になつたのです。又髪を結ぶには元結を用ゐず唯束ねた所を假に紙にて〆めて置くのみである、故に髪を結ぶ事が頗る簡單であつて島の婦人は毎朝必ず結び直す、時には日に二三度も結び直す事がある。髪に用ゐる油は皆純粹の椿の油だけである、この椿の油は島の名産で毎戸皆自家用料を製して貯へてある。

圖に掲げたる第一は少女の風である、髪を揃へ其の先を唯輪にして束ねたのみで其れを束ぬるには半紙を細く疊みたるものか又は美はしき紐を用ゐるのである、髪の飾りには簪も櫛も用ゐる事なく、其の代りに中形を染め出した木綿の手拭を以て鉢巻をします鉢巻の仕方は大抵第二圖に示す様に後方にて一度結び右の端を高くピンと立させて置く、然し少女にありては前にて結ぶものが多い。此れは子守りをなす時の便利から來た風俗でありませう。

第二圖は若い女の髪で處女でも結婚後の婦人でも變りはない。髪を揃へ「ズルコカシ」と俗に稱する紐の結び方の様に結び其の結び目を白紙にて〆めて置くのみである、矢張飾りには簪も櫛も用ゐず木綿の鉢巻をするのみである。始めて此れを見た時は異様に感じたが、三十日も五十日も居て目に慣れて來ると、遂には私も其風に染み、左方に垂らしたる漆黒の髪に右方に立てたる清らかなる手拭の相照應して見え、何となく古風の優美なる點を認める様になつた。

第三圖は老媼の髪の風である、髷の形は島田湯皮の如くにして中央を白紙で束ねてある木綿の鉢巻をする事は矢張同様である。

偖此の木綿の鉢巻は内地の人が仕事をする時にや

る向ふ鉢卷とは大に趣を異にするのである、彼の鉢卷は仕事の便利より考へ出したものではなく全く一つの髮の飾りとして用ゐるのである。それ故に彼等は、決して他人の前でも其鉢卷を脱しない、寧ろ他人の前で鉢卷を取り去るのは失禮として居る。此の鉢卷は通常の時は中形を染出したる木綿であるが大禮の時又は寺詣、神社參り等には必ず五尺の長さなる赤色の布を用ゐるのである。此れを「ヒシユ」と云ふ。(第三圖は老媼の寺詣りの姿なり)赤き布は富者は縮緬を用ゐ賤しきものは木綿を用ふ、又甚だしき老女にして如何にも赤は耻しいと思ふものは深紫色の布を以て代用する事もある。職人歌合其他足利時代の繪卷物を見ると頭に赤又は他の色の鉢卷をした女の形を屢々見るが、これはその前の鎌倉時代から中流以下の婦人が「スベラカシ」にして垂れ下げたる髮の毛の亂れかゝるを忌みて鉢卷をなす風が起り遂に足利時代には別に髮の亂れを防ぐ爲めともなく鉢卷をなす樣になりたる風俗で、誠に一つの奇妙なる風俗である。今日にては都は日々開化の進歩の爲めに斯の如き風俗は其の跡を絶つたけれども、尙は京都の片邊なる桂の女には鉢卷の遺風が存して居る。島は風俗の最後の隱れ場所でありとは宜で、此の新島の鉢卷も誠に中古の風俗の遺物であらう。

(未完)

皇祖皇宗の御德（續き）

日本女學校講師　下田義天類

先年「シイボルド」と云ふ男が、南洋を歩いて來て、日本の名物を取調べに來たことがある、其れが南洋の事柄を報告した書物がある、其内に南洋諸島

の風俗を書いたことがある、彼の國々は、何れも火の効用を知らぬと書いてある、稍々開らけて居る國で、火と云ふものを知つて居りましても、何れ鍋釜の發明がない、況して竈がない、(國名は今悉く記憶して居らぬ)其等の人民は、山に行つて鹿を獵つて來て食ひ、海から魚を漁つて來て食ふ、併し生で食ふと云ふと病氣を生すと云ふことを知つて居つて、火を貴んで居る、併し鍋釜が無いから、火の使方が六ツケ敷い、大方は海岸に來て、美しい石を取つて來て、其上で數時間、火を焚く、所謂燒石にして、其上へ持て行つたお肴を載せます。善い工合に燒けると、其者を鹽水に漬けて、手でムシつて食ふ、併し燒石でありますから、只表面ばかり燒けることゆゑ、又石の上へ載せて燒くのです、斯うして、生活をして居る、………此事は近來彼地に行きました人も見て來て居るのであります、………「シイボルド」は、モー一段、最も開けない國へ行くと、目新らしく、耳新らしきものがあると曰ふて居る、其は、南洋諸島に於て、邑長と云ふものは、多くは、火の保護者である、然う云ふ火を貴びますけれども、火を作ると云ふことを知りませぬ、故に、絶えず火の保護と云ふことが、大變必要で、邑長は、常に火の保護をして居る、人民は、其邑長へお使物を持つて行つて、火種を貰つて來るのです、大概、邑長のある所は、邑長が、其火を保護して居つて、人民に火を與へると云ふことが役目である、邑長のない國に行くと、火の保護と云ふことを知らぬ、其所に至つては、全く、火の効用を知らぬ國で、………餘り馬鹿氣たことであるが………南洋諸島ばかりでない、亞米利加邊の內地に於いても、斯う云ふのが、能く有つたと云ふことが書いてある

其は、火の効用を知りませぬので、而して、此所等の人民の頭には、火と云ふものは、動物であるか、植物であるかと云ふことが、判断の附かないものがある、甚しいのは、一の動物であると思ふて居るのがある、其人民の語り傳へて、火と云ふものは、一種異様の動物である、食物に由て、其身體の形が變はつて行くものである、山林に、此動物が繁殖すると、立木の姿に成つて形を現はす、(これは山火事のことである)大きな木を食ふて居る奴は、大きな形になる、而して、其動物は、最も、恐ろしき毒を有つて居る、人あつて手を觸るれば、忽ち、其毒に感じて、手を爛らす、繁殖は、頗る早いけれども、壽命も甚だ短きものにて、食物を、食ふて仕舞ふと、直ぐに死んで終ふ、斯う云ふやうな考を持つて居る人民は、今尙、南洋諸島には、多少あると云ふことで、是は、「シイボルド」の報告を信用して、お話をするのである、今日も尙は、然う云ふ國がある、然う云ふ國の人民と成つて御覽なさい、ドンなに不自由を感じて、……不自由とは思はないかも知らぬが、是に一朝、火の効用を敎へたら、何の位、喜ぶであらう、然るに、開國以來、此日本の始まつて以來、火の効用と云ふのを敎へられて、祖先以來、父母も、子孫も、其効用に與かつて居る、自身も、今尙與かりつゝある、慣れ切つて居りますから、火と云ふもの丶効用を、少しも思はない、所謂、水中の魚が、水を知らないと云ふものと同じ有樣である、現に然う云う國があるとすれば、此樣に、火を自由に使う國は、幸福であると思はなければならぬ、此幸福を何うして得たか、世界中にて、日本は、一番早く、火の効用を知つて居る、其は、日本の神代の古書を披見すれば、中には、火結神

と云ふのが、火の根源となつて居る、……全身が火であつたとありますが、然らしく見えます、……何にゝせよ、火の神でありまして、火の効用を敎へ賜はつた御方と云つて間違は御座いますまい、而して、其と同時に、沖津彦、沖津姫と云ふ神は、竈と云ふものを作り始められました、夫から、鍋とか、釜とか云ふものにありますと、是は、物部氏の祖先、石凝戸女命、其命から、釜と云ふものを鑄た、(今日日本人の食物を煮るに都合が宜い樣にしてある)是は日本ばかりであります、外ではない、此石凝戸女命の神樣が作られたと云ふことは、今に鍋屋の神として、河内に、石凝戸女の血統が殘つて居る、其一族が、日本國中に散亂致しまして、鍋屋と云ふものが出來で居る、何れの鍋屋でも河内の鍋屋を本家として居る、然う云ふ工合に、總てのものが調うて居る、其原を尋ねて見れば、是等の發明をして、皆樣に、今日の益を與へられたと云ふことは、容易ならぬ御德である、然るに、其御德を、誰れも、思はずして居る、是等の神樣は、皆、伊諾冊、伊諾美の神樣の御事業を分掌して施されたるのである、伊諾冊、伊諾美の神樣は、其人を見立てゝ分掌させられたのである、皇祖が、子孫人民の爲めに御心を用ゐさせられたことは、此の如く、深遠で、國を肇めらると云ふことに付て、最も、宏遠なる御考を持つて入らつしやッたのである、然るに、此御德は、普通になつて慣れて居りますから、何とも思はずに居ります、又世の中に、戰ほど恐ろしいことはないのである、然るに、日本では、爭ふべき主權と云ふ所の中心に、神の子と云ふものが据つて居る、何處からも、神の子を突き除けることが出來ない、然うしてあるから、外國に較べて、

戰と云ふものは少ない、其れで、此君と云ふものと、臣といふものと、所謂、君臣の分を定めたるものは、大變な　皇祖の御高德である、然るに世人は、是等の御高德と云ふことを稱せずして、小さなる御德、小さなる御力を稱揚して、彼是申して居りますのは、所謂、解釋が、大體の効を次にして、小さな所へ眼を付けます罪である、餘り長くなりまして面白味も薄くなりますから、是で終ひます、

（完）

百夜譚

林恒山

第壹回　曆の事

〜〜今日は、今日は明治卅五年六月廿日である。

此明治卅五年六月廿日といふのは、誰が定めたのであらう、天から定めたのではあるまい、人間が定めたのであらう、人間が定めたのとすれば、何いふ所から定めたのであらう、其れは曆といふもので定めたのである。それだから先づ曆の話をしやう。

さてコヨミとは、何いふ名であらう、何故コヨミと名づけたのであらう、本居宣長の眞曆考といふ書にコヨミとつけたるも來經數にて一日一日とつぎ〳〵に來經るを數へゆく由の名ありとある。是で其意味は分からう。

我邦太古及び上古の初め頃は曆といふものがあつたらうか、是も眞曆考を見ると、古は太陽曆だとある。又同書に據つて見ると、太古神代の頃から寒暑の一めぐりを一年とし、又四時の分ちも、春夏秋冬の名も古くよりあつて、古事記や書紀の歌の詞に見えて居る。又此春夏秋冬共に始、中、末

の三つにきざまれて居る、併し一月、二月、三月といふ樣に月の定めもなく、固より一日、二日、三日といふ樣に日次といふものもなかつた、けれども天の月の一めぐりを月といふことはあつて、其月の中を月立、望月、月隱の三つに分けて、後世の上旬、中旬、下旬といふ樣なものにしてあつた、即ち月立は空に月の見え初める頃より十日許をいつて、後世の朔とは大に違ふ、望も滿月の前後五日づゝをいつて、後世の望月即滿月とは違ふ。月隱も亦其後の十日許をいふので、後世の晦とは違ふのである、斯いふ有樣で四季といふも、月次も日次も、何れも確然たることはなかつたが、寒暑の一めぐり即ち太陽の一めぐりを一年としたることは明であれば、上古は太陽曆であつたといふことは、疑ないのである。併し是は曆であるといふ樣な、書物の無かつたことも亦明である。

處が支那の書物が追々傳はつて來て、其れから一年を十二ヶ月と定め、月次を四季に割りつけて、睦月、衣更着といふ樣な月々の名も出來たが、まだ一ヶ月の日次は定まらなかつた。此月次の定まつたのは、何時頃かは確と分からぬが、難波の高津宮の頃もやとあれば、仁德天皇の頃でもあらう。其後伊波禮の若櫻宮即ち履仲天皇の御宇に、國國に史を置いて事を記せしめられたことは、書紀などにもあれば、此頃より甲子を日に配して用ゐられたものであらうと思はれる。

其れから幾代も經て、磯城島の金刺宮即ち欽明天皇の十四年に百濟國に勅して、曆博士及び曆本を奉らしめ、翌十五年に曆博士王保孫といふものが來朝したとあれば、朝廷にては此時に曆を用ゐられしならんが、未下々には行はれなかつた。其後小治田宮即ち推古天皇の十年に百濟の僧で觀勒

といふものが來朝し、此僧は種々の學問が出來て、曆にも詳かつたから、陽胡史の祖の玉陳といふ人が、之に從つて曆法を受けたとある。此時曆を世に行はしめられたといふことは古事記などには見えぬが、政事要略といふ書に、推古天皇の十三年正月朔より始めて曆日を用ゐたりとあつて、本居宣長も之をさもあるべしと是認した。上古より今日の曆といふものは無かつたのが、此時に始めて月次も日次も確と定まつて、此十三年正月より用ゐられたので、此十三年までは、神武天皇の御即位元年より千貳百六十五年を經たのである。併し此時用ゐられた曆は、太陽曆ではなくて、所謂太陰曆である。是れより明治五年太陰曆を廢して、太陽曆を行はるゝまでは、千貳百六十四年を經た。太陰曆の我邦に行はれたことは、斯く千二百六十四年間であるが、其間一ツ曆ではなく、數々改正

された、推古天皇の十三年正月から行はれたのは、前にも云つた通り、百濟から獻じたもので、宋の元嘉曆であつたといふことである。卽ち支那の五代の初に宋といふがあつて、其宋の文帝の元嘉二十二年に何承天といふ人が撰んだので、建寅月卽ち太陰曆の正月を歲の首としたものである。其後八十五年を經て、持統天皇の四年十一月に、再度元嘉曆を用ゐられた、是は同じ元嘉曆であるが、支那から傳はつので是迄のは何か間違つて居からであらうと思はれる、此曆も僅に二年で、同天皇の六年に唐の儀鳳曆といふのを用ゐられた。此曆は唐の高宗の麟德二年に李淳風といふ人が撰んだ、甲子の歲を元としたもので、麟德曆といはなければならぬ、それを儀鳳曆といつたのは、唐の高宗の儀鳳年間に我邦に傳はつたからか、又儀鳳年間に出板したのを用ゐられたからで、儀鳳年間は

我邦の天武天皇の時で、此時より十五六年前の事である。此暦は七十二年間行はれて。淳仁天皇の天平寳字七年に唐の大衍暦といふを用ゐられた。此暦は唐の玄宗の開元十六年に僧一行の撰んだもので、開元大衍暦といふのである。是は九十二年行はれて、文德天皇の齊衡三年に至つて、唐の五紀暦を用ゐられた。此暦は唐の代宗が寳應元年に司天臺の官屬たる郭獻之といふ人に命じて、撰ましめたので、五紀といふのは歲、日、月、星、辰の五つの事で、此五つによりて算出したのである。併し此時前の大衍暦を廢したのではなく、兩暦を幷用せしめたのであるが、六年で兩暦共廢せられた、淸和天皇の貞觀三年に、唐の宣明暦といふのを用ゐられた、此暦は唐の穆宗の長慶二年に徐昂といふ人の撰んだので、貞觀元年に來聘した渤海の大使の馬孝愼といふものが持つて來たのである。此暦は一番長く我邦に行はれて、其年數は八百二十三年間であつた。何故此暦が斯く永く行はれたかといふに、此後餘り間もなく宇多院天皇の時に遣唐使が廢せられて、支那との交通は、僅に僧の宗敎を學ぶものが往來した位で、從つて新暦が傳はらなくなり、且我邦にても、王政が漸く衰へて藤原氏の世となり、尋いで平氏、源氏、北條氏、足利氏と、何れも暦日の樣なものは之を考究するものがなかつたからである。

處が德川氏に至つて文運が大に興つて、靈元院天皇の貞享二年即ち五代將軍綱吉の時に、貞享甲子暦といふものを用ゐられた、此暦は安井春海即算哲といつた人が撰んだので、此算哲といつた人は優れた數學者であつた、宣明暦の久しく改められなかつたから、最早推步の間違が多いのを知つて、元の至元十七年に郭守敬が撰んだ授明暦と、明の

洪武年中に元統が撰んだ大統暦とを折衷して、甲子の歳を始めとして撰んだので、綱吉は之を朝廷に奉り、朝廷にては陰陽頭安部泰福に下され、泰福と春海と評議の上、再び朝廷に上り、天皇より貞享甲子暦といふ名を賜はりて、全國に頒行せられたのである、此時迄即ち宣明暦迄は支那で撰んだ暦を用ゐられたのであるが、此貞享暦は始めて我邦人の手に成つたので以降は邦人の手に成れる暦を用ゐることゝなつた。此暦の行はるゝこと六十九年で、桃園院天皇の寶暦四年即ち九代將軍家重の時に寶暦甲戌元暦といふのを用ゐられて、是より先に八代將軍吉宗が大に天文學を好まれて、司天臺などを建て、是迄西洋の書籍は一切輸入を禁せられて居たのを、吉宗は耶蘇教以外の書は輸入することを許し、天文書、暦書などを取寄せ、西洋の暦學の大に進歩して居るのを見て、之を我國に行はんとまで考へられたが、急に大陽暦に變更したならば、百姓共の却つて不便を感ずるであらうと察したから、形は大陰暦と爲て置いて、大に改正を加へ樣としたが、其志を果たさずして寶暦元年に薨去となつた。併し其遺志が此に行はれたので、澁川光洪が陰陽頭安部泰邦と評議の上、朝廷に奉りたのである。此暦は四十四年で廢せられ、光格天皇の寛政九年即十一代將軍家齊の時、寛政暦といふのを用ゐられた。此暦は高橋至時、吉田秀升、山路德風、間重富等が陰陽頭安部安榮と評議の上奉りたので、清の康熙年間に出來た暦象考成や崇禎暦書といふ頗る精密なるものによつて選んだものである。是亦四十四年間で、仁孝天皇の天保十三年即ち十二代將軍家慶の時、天保壬寅元暦を用ゐられた、此暦は澁川景佐、足立信顯等が陰陽頭安部時親と評議の上奉つたので、益々

暦學の進歩と共に、暦も改正せられたのであるが、此暦は三十一年間行はれて、太陰暦の最終のものである。今上天皇の明治五年十一月九日に太陰暦を廢して、太陽を用ゐる詔書を下された。是は我朝廷の大英斷であつて、其時の詔書の改暦の理由をも示されてある。今其れを讀んで見やう。

朕惟ふに我邦通行の暦たる、太陰の朔望を以て月を立て、太陽の纏度に合す、故に二三年の間必らず閏月を置かざるを得ず、置閏の前後時に季候の早晩あり、終に推歩の差を生ずるに至る。殊に中下段に掲ぐる所の如きは、率ね妄誕無稽に屬し、人智の開達を妨ぐるもの少しとせず、蓋太陽暦は太陽の纏度に從て月を立つ、日子多少の異ありと雖も、季候早晩の變なく、四歳毎に一日の閏を置き、七千年の後僅に一日の差を生ずるに過ぎず、之を太陰暦に比すれば、最も精密にして、其便不便も固より論を俟たざるなり、依て自今舊暦を廢し、太陽暦を用ゐ、天下永世之を遵行せしめん、百官有司其斯旨を體せよ。

其後に

今般太陰暦を廢して、太陽暦を御頒布相成候に付き十二月三日を以て明治六年一月一日と被定候事

とある。是で太陽暦を用ゐられたる理由は至つて明白である。且此太陽暦は今日行はれて居る暦で、尚永世に行はるゝ暦であるといふことも分るが、尚是から此暦に就き、又新舊暦の關係に就き、其他暦に就きていふべき事も多いが、其れは次回に讓らう。

（未完）

女子服飾の沿革

椎園信成

●服料● 此當時の衣服は大体如何なる物を用ゐて作つたものであるかと云ひますに、よくは分りませぬが重に絁と云ひまして、太き糸を以て織つた處の極粗末な絹を一般に用ゐて居ました、前回既に申しました通り上古は楮布、麻布を最も上等なものとし、晴の服に用ゐ、平日には葛布苧布等を專ら用ゐて居りましたが、此當時は前申ました通雄畧天皇の御時世に養蠶機織の術を奬勵されました結果、次第〳〵に立派の絹布や織物などが出來る樣になりまして自然世の中の人も華奢に流れて來ましたから中流以上の人は大抵絹布か、それでなくば絁を用ゐ、麻布、穀布などは、下等社會の物となつてしまひました、其他の織物中殊に奇麗な羅、縠、綾、錦、氈、罽(毛織物也)と云ふ類の物は皆舶來品と稱へて、大に珍重し、僅に裝飾品のみに用ゐて居りました處が、元明天皇の朝、挑文師と云ふものを伊勢、近江、越前、丹波、播磨、阿波以下二十余國に遣はされて、國々の人民に、錦や綾を織る方法を敎へしめられた、此以來は、段段機織の術も進歩して年々に各地よりの產出も多くなつた、加ふるに、壬申の爭亂以後世は太平で居ること久しくあつたから、自然と都人は安逸になれて、華奢の風を競ふ樣になりました、此當時より以前舶來品と云ふて重寶した錦繍綾羅の類を用ゐてぼつ〳〵衣服の類を作り初めた、處が華奢の方へは流れ易いと見えて、間もなく朝廷の官人などは羅、彩綾等の袖、錦繍の衣を作り、これを以て制服となす樣になりました、此以來と云ふものは絹さへも只の絹は下等なものとなし、

種々の意匠を以て、草木或は花鳥などの摸樣を染出したものばかりを用ゐる樣に成て、奈良時代は咲く花の匂ふが如く、益々華奢を競ふ樣になりました。

●服色　衣服の色は其位の高い低いに依て紫、緋、綠、縹、の等級が在て、何れにも深い淺いの別ちの在つたことは、上に記した度々の制に依て明かであるが、無位の官人及び庶民に就ては別段に條文がないから不明である、併し舊記に依て見ますれば無位の官人及び庶人は黄色の衣をつけ、家人とか奴婢とかの如き賤民は黑の衣をつけて居た樣に考へられる、

●染色　染色は此時代外國傳來の染め方を以て、巧に作りたる紫、茜、蘇芳、橡、桑、摺衣、榛、柴等いろ〳〵あります、尚は此時代には糸を以て絹を縛つて染めた處のしぼり染と云ふものが大に流行して、中々精巧なものが澤山出來ました、其中にも今日迄傳はつて、尤も弘く用ゐられて居るものは纐纈、夾纈、臘纈の三纈である、この纐纈と云ふものは、今日云ふしぼり染のことで在つて、これに鹿子絞、きさで絞、たゝみ絞など云ふ種類がありまず今は鳴海しぼり有松絞など稱へて居る、又夾纈と申すは今日云ふ處の板じめ染のことで在つて、花鳥草木を彫みたる二枚の板に夾んで、染たものである、これにも二重染、三重染の種類がある、又臘纈と申すは、今云ふらふ形のことで在つて、布帛に臘を以て花文を畫き、染めたる後臘を洗ひ落したものである。以上の三品は、推古天皇の時代より流行したもので、當時は專ら供御の用に調製して居りましたが、元明天皇以後衣服の料に錦綾を用ゐる樣に成てしぼり染も大に流行して遂には絹ばかりでなく綾、羅、穀織も此法

第一図



第二図



に依て染むる様になり、漸次、其術も進み益々巧に、益々美麗な品を作り出す様になつて、上下共一般に好んで用ゐる様になりました、これが丁度今から千三百餘年前の事であるが此當時の破片は今に南都の正倉院には保存してあります、其模形は美術畫譜其他の模様鑑などに出て居るからこゝには省くことゝいたします、

此二圖は共に當時代の御物で在つて今は帝室の御寶物となり一は京都東寺の寶物となつて居る極貴重なものであります、これは共に當時の風俗を寫したものですが、何分惜しいことには數多の年數を經過した故、處々磨滅して滿足に觀察することが出來ない、併し以上述た事と照し合せて見たならば、大に參考にもなりますから拜寫して掲載した次第です、

扨て第一圖は奈良の東大寺正倉院に傳つて居る

樹下美人屏風の繪であります、これは奈良朝の盛時に畫いたもので、當時中流以上の美人相である第二百五十一號垂頸着用の圖はこれに依て想像したものであります、頭髪も此圖では異樣に感じられるが今一つ此時代のもので同院に鳥毛立女屏風と云ふがある、此屏風の繪に依て見ますれば、其結樣も明瞭である、これは次回髪頭の條に記すことゝいたします、

第二圖は京都教王護國寺(東寺)に秘藏してある唐櫃の四面に畫いてある女少年鞠あそびの圖であります、寺傳には延喜唐櫃と稱し、圖は散樂の體であると云へども、これは誤りで疑もなき奈良朝初期に畫いたものである、其服裝の筒袖、細袴の體はこれによりて想像が出來ます、又被髪に紐の如きものは赤く色どつて在る、これは額髪を結びて居た紐である、萬葉集の歌に額髪結染木綿とある、染木綿こそ此紐であります、此事は次の頭髪の部に記しませう。

閑窗茶話(二)

YT散人

◎施す者は潔くせよ

潔く與へらるゝときは、受くる人亦た快く之を謝す、法苑珠林に曰く、

釋迦如來城下に入つて乞食し給ふ、婆羅埵逝と云へる長者あり、佛のたび〳〵來つて食を乞ひ給ふを見て、何故に斯くは度々來るや、借たるものを戻せとの催促に似たりと罵りたるに佛徐に

時雨數々墮つれば五穀數々成る

數々福業を修すれば數々果報を受く

と八句の偈をのたまひければ長者之を聞きて佛我が心中を知つて斯る偈を説きて辱しむるなれ、いでや吝むにあらぬとの心中を知らせん者をと、大に美食を盛りならべて、佛の前に差し出す、佛之を見給ふて

信施にあらず不淨施なり故に受けず

とのたまひ固く之を拒まれたり、長者の曰く、然らば此食は誰れに與ふべき、佛答へて人間にも天上にも施すべき所なし、蟲の水の中に捨てて見よとのたまへければ、長者其の通り之を水中に投げて試みたるに、水忽ち火となりて沸かへる、長者之を見て、清淨の信施にあらずして佛をのゝしりたる不淨施の、空しく滅することを知り、是より出家受戒して、まことの佛弟子となりたりけり

嗚呼、速に潔く與ふるは、信じて之を與る也、然らざる者は僞善なり、僞善の施は恩にあらず、愛にあらず、受くる者之を徳とせず、授くる者爲めに光を發せず、深く鑑みざるべけん哉

◎屏風に就て一言す

屏風のへりは、色の取り合せに心得あり、

大緣青ならば小緣は赤
大緣赤ならば小緣は黄
大緣黄なれば小緣は白
大緣白なれば小緣は黒
大緣鼠色なれば小緣は黒
大緣柿色なれば小緣は黒

を用ゐるを法とす、蓋し色の相生に基くなり、而して其の寸法は、

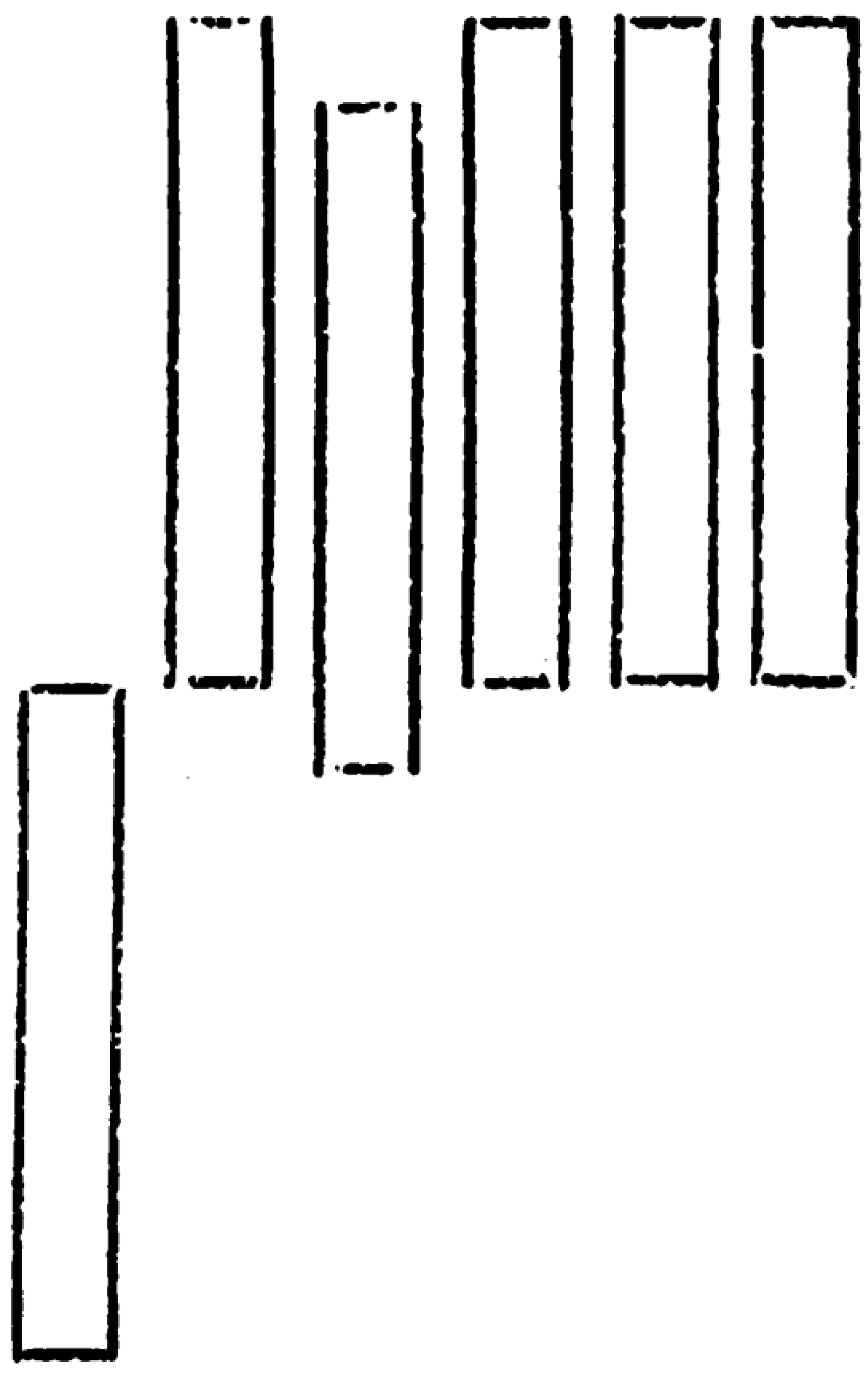
大緣二寸
小緣二分

を以て定法とし、又た短冊を押すには

○丁

○半

○角



とする者の由、注意すべし

◎詩の書法につきて

詩を揮毫する亦た法あり、普通は

八九八三と四行に

又た

九九九一と四行に

書するを以て、古法の正となせりと云ふ

◎膝行膝退の禮に付

膝行或は膝退とて、膝で行き、膝で退くと云ふてと有り、其は起立しつゝ參りて奉る事のならぬ

場合の事のみ、然れども膝を疊に摺りつゝ行く事にはあらず、頭と膝とを少し上げつゝ行き、或は退くことゝ知るべし

◎善功惡過日記の事

江州上善提院なる正覺院僧正の功過錄中、其の功の方に記せる事柄は

親を勸めて善人とならしめ○子を敎へて慈悲をあさしめ○家内を睦じくし○物を拾ひても其の主をたづねてかへし○老たるを敬ひ○孤兒を憐れみ○人の善事をなすことを共に喜び○人の善き事は我が善き事に思ひ○人の惡きを語らず○辱められて恨みず○恩をかけて禮を受くる事を求めず○物の命を取らず○虫けらもいたはり○人を妬まず○己を高ぶらず○乞食に施し○人の知らぬ善事をなし○善とあれば近づき○惡とあれば遠かりて好き友には從ひ○惡き友には交

らず○神佛を敬ひ○人の短を譏らず○仁を施し○義を守る

等にして、又た其の過に屬する方には

兩親を輕しめ疎んじ妻子を親しみ○人の難儀をいたはらず○面は和ぎて心は險しく○人を欺き利を求め○我に劣れるを見下し○義にあらざるを行ひ○道理に稱はざるを與みし○愚ある者をたぶらかし○無慈悲にて、心強く○威勢を以て弱者を攻め付け○上を敬はず○下を憐まず○神佛を疎忽にし○惡と知りながら改めず○己が罪を人に歸せんとし○物の命を取り○虫の穴を塞ぎ○善事を妨げ○惡事を取り持ち○人の過を見て蔭にて笑ひ○科なき人を譏り傷ひ○人の惰を感心せず○秤の罪○升の罪○尺の罪○僞物を賣る罪○非義の財を貪る

等の目を設け、雛僧の時より、毎日〱の功を記し、過を記し、以て過の功に勝つ日を歎き、功の過に勝つ日を喜び、彼是照合、過を愼み功を勸めしが故に、後終に過の方には記す者なく功の方數かさなれるを樂しみしとなん、古聖一日三省の工夫僧正深く體せりと謂ふべし

◎濫に譏るべからず

沙石集に云へることあり、曰く

人をそしるは、法をそしるにある、法みづからひろまらず、人の弘通による、失を求むれば、いづれの學者にもこれあり、得を考ふれば、いづれの行人にも空しからず

又た人ごとに、我が好む事には失を忘れ愛し、我うけぬ事には、失を求めて譏る、然れば我好むことには、失ありて人のそしる事を顧み、我うけぬ事には、得あらんことを考へて、譏るべからず

此れ是れ處世の眞訣にあらずや

◎獨自慢當にならず

愈愚隨筆に云へるあり、其の要に曰く

池の岸にある叢の中に、蛙の多くあつまり居りけるを見るに、大なる蛇わだかまりて、其の蛙を食ふに聲をも出さず、動きもせざりけるは蛇にみいられて、唯だ喰はるゝを待つのみなる風情なるは、蛙の業因の窮まれる時節ならんか又た蜈の蛇を追ふこと急なる時、遂に追ひつめられ、蛇動くことをせず、唯だ口を開きて待つ其の時蜈蛇の口に入り、腹に至るの頃、蛇遂に死す、蜈は蛇の腹を破りて出たり、其の後日を過ぎて、其の蛇は腐り、小さき蜈多く生じて其の蛇を喰へり思ふに蛇の腹に蜈の卵を産みたるならん、又た蜘の蜈を追ふこと急なるに、蜈にげて腐れたる垣竹の中に入る、蜘は入ること能はずして、唯だ其の竹に跨りて、腹を動すこと數度にして去りぬ、蜈久しく出でざるが故に、其の竹を割つて見るに、蜈の體すじ〳〵皆切れ離れて、爛れたるが如し、是は蜘竹に跨りてイバりをそゝぎて蜈を殺したる者ならんか、

夫れ擅に蛙を捕り喰ふ蛇は、我こそ倔強の威力者と思へども、一旦蜈に逢ふときは、斯くまで脆く身を果さるゝを知らず、而して其の蜈とても、亦た他に恐るべき蜘あるを知らず、愚なる哉、彼等の者たるや、然れど人間亦た之に類するなからず、豈に獨り蛇と蜈とを笑はん哉

御所こと葉

うはぢ生

「物の名も所によりて變るなり難波の芦も伊勢で

濱荻」と云ふは、よく世人の引合に出す歌であるが、いかにも所に依ていろ〳〵に異なつた名がある、夫れは今更記さないでも御承知でせうが、此以外に我邦には御所詞、殿中詞と云ふて、一種異なつた詞がある。これは禁中の女房達及び幕府の大奥に仕へて居る局達の詞である、勿論これは殿中のみの通用語で在て、他の方面には通用しないものである、元來此詞は何れの時代から、如何なる必要が在つて作つたものであるかと云ふに就ては段々說もありますが私の考へでは別段意味はない、只女房達の好奇心より起つたもので其始とも云ふべきは足利時代



である、併し、此時は未だ御所詞と稱する程の事もなく、只一つ二つ異なつた詞を用ゐるのみで在つたが、段々好奇の人々に依て此類の詞も製作せられ時々此詞を用ゐて居たが、後には女房中のお轉婆連が何でも人の知らない詞を使用するのを上品と心得、昔通の使用語は町人詞で賤しい者であるから、御所中にては用ゐられぬなどと妙な了簡から、これを遠けたのがもとで遂には御所中全く奇語を以て見たされる樣になつた、而して女房達自ら御所詞であるなど誇稱する

樣になつたのである、これは德川の初世でありませう、換言しますれば、御所詞は足利時代に起り生意氣な女房達に養成されて德川の初世に一定し遂に今日迄御所中の通用語となつて、盛に百敷の大宮女達の口の葉に上つて居ると云ふことであります、今其重なものを記して、つれ〲の御伽に供しませう。

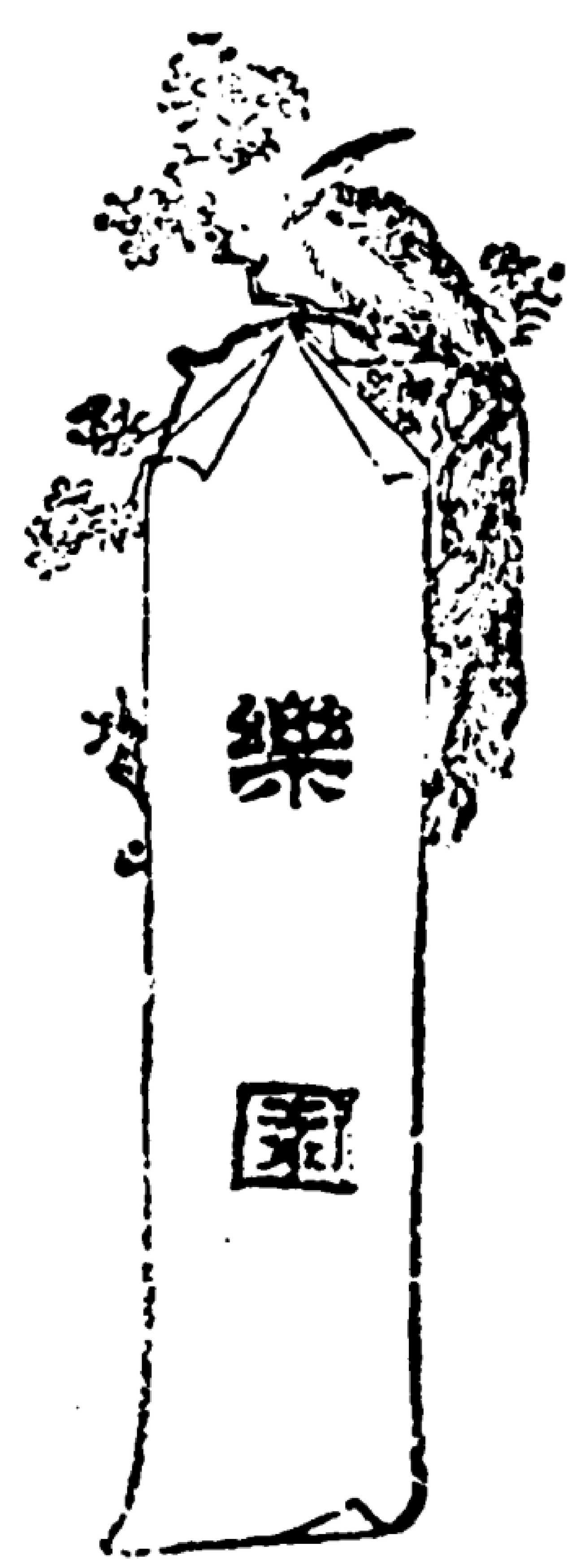
烏賊……いもじ　干瓜……はり〲
干菜……ひば　牡丹餅……やは〲
紅……おいろ　豆腐かす……おかべら
豆腐……おかへ　ちまき……まき
帶……おもじ　綿……おなか
蚊帳……かちやう　香物……かう〲
鰹魚……かゝ　髮剃……おけたれ
かづのこ……かづ〲　夜着……夜のもの
團子……ひし〲　大根……からもの

たこ……たもじ　竹子……たけ
そば粥……うすゞみ　茄子……なす
菜飯……はのぐご　糊……のもじ
鯨……おさぐり　松蕈……まつ
燒飯……おみなめし　午旁……ごん
小鯛……こひら　ごまめ……ことのばろ
蒟にやく……にやく　米……うちまき
小袖……ごふ〲　五斗味噌……さゝじん
小糠……まちかね　海老……ゑもじ
田樂……おでん　甘酒……あまくこん
朝漬……あさ〲　さゝげ……さゝ
素麪……ぞろ　酒……九こん
金一分……百ひき　飯……ぐご
杓子……しやもじ　汁……おつけ
醬油……おしたし　しんこ……しらいと
白箸……ねもじ　せつかい……うぐひす

餅………かちん　赤飯………こはぐで
すりこ木…こがらし　するめ……する〳〵
酢………すもじ
以上は只其一端である、今日も大抵これと同じ様
である只少し異なつて居るのは
酒………おつてん　鰯………おむら
干鰯………ひらさぎ
などである尚は此事に就ては他日號をかへて詳
しく記すことにいたします。

のなかを知れや
鏡のうら表
才丸





名殘の一夜

樗　夫

（一）

悲しさうに綱子の顔を眺めて居た玉子は、そつと眼の縁を手巾の先で拭ひながら、

『是からはもう兩人で、恁うやつて、散歩するなんて事も出來なくなるのね、私絶望いわ本當に、お花さんやお春さんは、私を仲間外れにしてお居でだし、お夏さんは那樣ことでもう此村にはお在でがないし、私何も恁うも唯一人、昨夜なんか其れを思ふともう堪らなく悲しくつて、一時々分ま

で、溜息ばかり吐いてたのよ、可笑いでせうけども、私、氣が弱いんだから仕方がないわ。』

綱子も引入れられた氣味に草を摘つて、

『其れや貴孃ばかしぢやあなくつてよ、私だつて、知らない處へ行つて、知らない人達と交際つて、朝から晩まで淋しい思ひをしなくちやならないんですもの、些も嬉しいなんて事はなくつてよ玉子さん。』

『だつて貴孃は直きお友達も出來やうし、御勉强だつて、段々容易なるに違ひないから、淋しい事も悲しいことも、當座だけで濟了つて、あとはもう、面白いことや、可笑いことだらけになるんですもの、本當に私、羨ましくつて仕樣がないわ。』

少し考へて肩を揺つて、

『私も家で承知して呉れたなら貴孃と一緒に、明日の一番汽車で、意勢よく東京へ出掛了ふのですけども、家の父樣や母樣は、女に學問は毒になるつて、毎時々々左樣云つてばかしお在だから、今度だつて、猶且頑固に不賛成を唱へるのよ、まるきし貴孃の家の阿母さんや兄さんや姉さんのお考へとは反對なんだから仕方がないわ。』

『兄さんも猶且左樣なの。』

『はあ、兄も必要がないつて左樣いふのよ、自分は、小學も卒業して、今度は何處かの專門學校へ入るんだつて一心に勉强をして居ながら、私にはもう學校は澤山だ、女の小生意氣と男の靑瓢簞は胸糞が惡くなるつて、口穢くつけ〳〵左樣いつちやわ反對するのよ、何を學問をしさへすれば、生意氣になるつて極つてる譯でもないでせうに、二言目には屹度もう、生意氣々々々々つて云ひまくつて、私の言ふ事なんかは、頭から貶しつけ了ふんだから本當に酷いわ。』

『男つてものは、手前勝手な者なんですから、其れで貴孃許の兄さんも、其樣無茶な事を仰有のよ、左樣いふ時は、此方も負けずに、強くお出なすつた方が可かわなくつて。』

『私も左樣思ふから、隨分強く出るんですけども貴孃も知つてる通り兄は口達者の性質ですから、毎時終いは私しの負で、其上强情を張通すと、直ぐ腕力に訴へるから、仕方なし、泣寢入了ふのが落なんですわ。』

悄然と俯目になつて、玉子は情なさゝうに溜息を吐く。綱子はいぢらしい玉子の樣子を視ると、何か胸が一杯になつて我知らず眼頭から、涙を押絞らずには居られなかつた。同じ級でも、勉强家の評判を取つた玉子の身になつたら、さぞ〳〵自分の東京行を羨ましくもまた心憎も思ふであらう、不斷能く、兩人で話しあつた將來の希望は、屹度大學者になつて、有髯男子を後へに瞠着させやうといつた樣な事で持切つて居たのであるから、昨夜一夜さ泣明したといふものも、決して〳〵無理ではない、自分と地位を顚到したなら、猶且私も其通りに、枕許をびつしよりさせて、母さんや姉さんやに當つて〳〵、當り散らすに極つて居る、お氣の毒な事だ、私の口からお願ひ申して、貴方の御兩親や兄さまが、諾と云つて下さるやうなら、幾らでも〳〵骨を惜むなんて、其樣不人情な眞似はしないのだけども、玉子さん許の皆さんは、私の家の人達の樣に、譯の解つた人が少ないから、云ふだけ野暮くさいのも知れきつて居る、左樣して見ると、何うしても、玉子さんは、私と一緒に東京へ出て勉强することは出來ないのだらうか……出來ないとすれば是から後、面白い事も無くなつて、屹度淋しがつて……あゝお氣の毒

な事だ本當に人事とばかしは思へないと、倩々親しい友の心の中を推諒つて、慰むべき自分が、つひ泣かされずには居られなくなる。

此處は鎮守の杜の裏手に當つて、眞青な柔かい美しい芝草が、厚くおし撫でる樣に繁茂して、兩人の座つて居る直ぐ足の下を、藍を溶かして流した樣な小川の水が、漣を立てゝ意勢よく、驀地に流れて居る。春も大分暮れ近くなつた、蒲公英や菫草の盛も昨日の夢も儚く消えた今日此頃、見渡す限り新綠でもつて掩はれて野邊山邊のたゞずまいが、唯もう、一面の青毛氈を敷詰めた樣、眼が覺めるといつてよからうか、晴々するといつて可からうか、兎に角、風はゆるく吹いて寒くはなし、空氣は輕く浮んで濁つては居ず、まことにのんびりとして和ぎ切つてとろ〳〵と我知らず、眠り轉げてしまひさうな寂寞境、直ぐ頭の上で囀り散らす雲雀の聲も場所が場所だけに長閑に聞える。

併し其れは普通一般の人々から、客觀的に見た景色なので、綱子と玉子の兩人の眼から眺めた日には、青い色は毒々しい樣にも見え、輕く澄んだ空氣の味は酸ばい樣にも思はれやう、此優しい囁を絶えず空林の寂寞に傳へて流れて息まぬ小川の水も、明日からは誰と共に聞くのであらう、獨法師の儚夢を、淋しい閨の衾に結ばねばならぬであらうか、生籬一重隔てたばかりで、朝夕顏を見合せた親しい友を都へ遣つて、何の樂しみが其處に殘らう、面白くない〳〵寧そ死んで了つた方が増しかも知れぬと、恁う思ひながら芝草を摘つては、邪慳に押揉んで、癪だといふ風に叩きつけて居るのは玉子の方で、明日の一番汽車で故郷を後に見捨てしまふと、もう此なつかしい小川の囁きも聞く事が出來なくなり、同胞同樣に親しんだ玉

子さんと話しをするとも出來なくなる、あゝもう後一晝夜をば經ぬうちに懷しい阿父樣にも阿母さんにも姉さんにも別れて、此平和な樂しい村を後にして、恐しげな都の空に淋しいお月さまを見ねばならぬのかと思ひ廻すと、不思議に一週間ばかり前まで勇みに勇んで居た功名心が、しづ／＼と悄げ初めて、我ながら腐甲斐ないとまで思はれる程心細い考へばかりに、閉されて茫然して居るのは綱子の方で、互ひに口を噤んだまゝ、毎時までも／＼同じやうに差伏向いて肩を窄めて、折々思出し氣味に瞬を續けて居た。

（二）

『いふまでもないけれど、東京へ出たら食物の注意てね、青い物や生煮な物は、一切食べてはなりませんよ、是からはもう追々暑くなるばかしで、流行病もそろ／＼其處らあたりに出來て來やうといふ險呑な時候だから、注意の上にも注意してね、よう／＼氣を引緊て掛らないと、飛んだ失敗を招かうからね、ね綱子、阿父樣や阿母樣に安全させやうとお思ひなら、何より恁より、身體を壯健にするが一番ですよ。』

阿母さんは綱子を膝近く座らせて置いて、出京後の身だしなみや心の持方を敎訓して居る。

『はい。』といつて綱子は可愛らしい顏を阿母さんの方へ振向けながら、熱心に其溫かい言葉の端を聽取つて居る。

『彼方へ行けば、叔父さんもあり叔母さんもお在だけれど、決して馴れ過ぎちやあ不可ませんよ、叔父さんは阿父さんも同樣叔母さんは私と同じ、彼方に勉强して居る間はとりわけお兩人の御氣分に障らぬ樣、素直に何事もはい／＼云つて、かりにも忌な顏なんかしてはなりませんよ、此ちやん

は未小さいから、面倒を見てやつてね、本當の妹だと思つて可愛がらなくちや不可ませんよ。』
『はい。』
『其れから手紙は月に一度位宛端書でもなんでもい丶から屹度寄越すこと丶極めて置いて、學校の成績や、東京の樣子お友達の善惡、何によらずちよい〳〵筆にまかせて書いてお寄越し、左樣すると、作文の練修にもなるだらうし、筆使ひの助けにもならうからね。』
『はい。』
『入學試驗だつてまだ海とも山とも付かないのだから、屹度巣鴨の明治女學校へ入れるものと考へてるのは間違いだけれど、併しまあ十に八九は首尾よく入れるものと假定めておいてゞすね、叔父さんの家から通學するのに、何うしても三四十分は掛るんだつて此間末雄の話しで知つたんだが、雨や風の日は隨分苛いに相違ないし、倩々遠くつて忌な日なぞもあらうけれどね、其處を昵と辛抱して、五年の間撓まずに勉强する樣でなかつた日には、阿父さんはもとより、私だつて兄さんだつて、決して容赦はしませんから、今からよく〳〵覺悟してお置でないと、後で後悔する樣な事が出來ますよ、姉さんも去年までは那の學校に居て、叔父さん所から毎日毎日缺かしつこなしに通學して居たのだからね、お前のだつて出來ないことは決してないね、綱子や、出來ないといへば其れまでゞ直ぐ退校させて呼戻す分の事なんだから、よく〳〵工夫してお置きなさいよ。』
『はい。』
綱子はもう鈴を張つた樣な眼に涙を一杯溢らせて返事するさへ濕み聲の、片手を疊に片手を膝に、小さくなつて座つて居る。

宵の口は大分過ぎた十時近く、風の音植込の梢に添はつて、思切つて高くなつた、十三四日頃の月の光がまるで晝間の樣に其處へ一面殘る隈なく照らし出して、好く拭磨かれた岩盤の椽側へ、戸箱の傍の大明竹の婆娑たる影を、墨畵を見るやうに投落して居る、寂寞と、何も彼も眠り轉げてるやうに靜かな夜だつた、親子は暫し無言で居た。

綱子は今年十四である、高等小學を卒業して、是から東京へ出て一勉强しやうといふ矢先、東京の叔父（父親の弟で幼少な時國を飛出し、種々雜多の經歴を額の皺に疊み込んだ後、遂に破籠空しからずといふ格で二三萬の金を引摑み本鄕邊の靜かなわたりへ、和洋折衷の邸宅を構へ、某銀行の重役を勸め、何不足なく裕かな生活に昔の苦勞を茶話にする）廣瀨丹藏から修業に出す氣があるなら姉娘同樣自宅へ置いて、面倒を見て遣らうといふ深切過ぎる程の手紙が來たので、渡りに舟と父親も母親も、姉娘の花子も惣領の末雄も皆一同に喜び勇んで扨當人への申渡し首尾よく濟み、來る何月の何日出京、同行者は兄の末雄と恁う極つたのはつい後月の十六日、さあ其れからは何やら恁やら、男と違つて細かい準備にこれ日も足らぬ有樣だつたのも眼を刮る間、明日の朝の一番滊車は、懷育の綱子を載せて、一飛直ちに百何哩、泣いても笑つても猶豫はないといふ無情な場合、世間知らずの少女の身には、悲しいのも無理はなく情けないのも無理はないのだ。

一刻々々に刻み進む時計の針は、宛然身を削り取つちまふ程に苛いのである、此まゝ此處にこびり付いて了いたい樣な氣持もする、忌な／＼淋しい／＼、なんともいへない忌な思ひに、頭の中がぐら／＼と鳴りはためいて、胸の中へ兩方の手を

ぐッと差込み、無茶苦茶に掻廻されでもするやうに苦しくなつて、寧そ東京へ行く事は廢めにして了はうかといふ樣な氣持もして、譯もなく悲しくなり、果はお隣の玉子さんの境遇が羨ましくなつて慕はしくあつて、何で私は東京へ行きたい、東京へ行きたいと阿父さんや阿母さんに強請だつたらう、私は餘程馬鹿だつた、よせばよかつた、忌といつて、頭さへ横に振つたら、這樣切ない、這樣苦しい、這樣悲い思ひをせずとも濟ンだらうもの、何うしたらば……何うしたらば此苦痛から…………あゝもう後十時間はありあしない、明日の朝は兄さんと一緒に……あゝ明日の朝は一番滊車で兄さんと………。

取留もなく這樣事を考へて居る、大明竹の影法師は、段々右の方へ辷つて行く、夜は大分更けたのである。

（未完）

少音樂家（承前）

文學士　藤澤古雪

はとり近きなにがしの貴族が家の從者一張の提琴を持ちたりき。夕ぐれの空のしめやかなるに、從者の奴婢等嬉ばさんとて奏づることもありき。ヤンコー提琴見んとて穀倉の戸口につゞける野菜植ゑたる畑の中に匍ひ行きぬ。提琴は常に入口のあなたの壁の上に掛けられたり。ヤンコーが魂はその眼よりぬけ出づる如く、瞬きもせで、その方をながめぬ。まことや、その樂器こそは彼に在つては觸るゝに難く、得るに易からで、しかも最も愛せしものなりき。彼はそを得んと思ひぬ。よし暫時にてもあれ、それに近寄りそを手にしたらんにはとの念起りしとき、哀れなる兒の胸は、言ひ知らぬ感を以て打ちふるへり。

或夜、穀倉には誰も居らざりき。その主人は暫時外國に旅立ちて、家の内には人影絶え、從者は奴婢等と共に他に在りき。ヤンコーは野菜畑の中に身を隱くして、暫時その最も愛せるものを入口越しにながめぬ。

大空には明月一輪かゝり、窓越しに冴ゆる光りは、あなたの壁の上に四角形を畫き出す。ながむるまに、その四角なる形は次第に提琴の方に近づきて、やがてはその樂器の上を隈なく照らせり。その時、暗き方に當りて白銀色なせる光りは、提琴より迸り出づる如く見えぬ。――その胴側、絃、曲りたる柄、さては螢火の如く輝く譜柱など、手に取る如く、又その側には提琴の弓懸けられて、銀もて造られし枝の如く見ゆ。見ゆるもの皆美はしく、心を奪ふの種ならぬはなし。ヤンコーは熱心に打ちまもり、打ちまもりぬ。

彼は野菜畑の中に蹲踞りて、瘦せたる腰の上に臂をつきて眼をつぶらに開き、しげ〲と眺め入る。或る打ち勝ち難き慾望は、絶えず迫まり來る。心を迷はす怪しのものゝ業か。月の光に輝ける提琴は、或時は浮び出でたるやうにて、兒の方に近寄り來る。又或時はあたりしばし暗うなりて、やがてそのかみにもまして輝き勝る。たしかに怪しのものゝすなる業よ。この時、軟風輕く渡りて、木々の梢はさや〲と音を立つ。折りから野菜畑の中に聲あり。ヤンコーの耳には確かに聞かる。

『ゆけ、ヤンコー、倉の中には人のあるなし、ゆけや、ヤンコー！』

夜はしめやかに、あきらかなり。花園の中には、野鶯の囀るが聞ゆ。或時は低き聞にて嘯くやうに、或時は聲高く、

『ゆけ、ゆけ、それを得よ。』

正直なる梟は、ヤンコーが頭の上を飛び廻りて叫ぶ。

『ヤンコーよ、そをすな、そをする勿れ。』

梟は飛び去りゆく、野鶯と野菜とは、一しはあきらかにつぶやく。

『倉の中には、人のあるなし。』

提琴は再び輝きそめつ、

哀れに小さき屈みたる人影は、徐に進み、ゆくゆくわたりを憚る。その時、野鶯は又もや歌ふ、いと低き聲にて、

『ゆけ、ゆけ、そを得よ。』

白き衣は、次第に倉へと近づく、黒き野菜の葉はもはやそを被はず。倉の入口なる兒の胸よりはげしき皷動の音聞かれぬ。梟の再度飛び來りて『否否』と叫びしも益なかりき。ヤンコーその時すでに倉の中に在りしなり。

花園なる池の中よりは、大なる蛙の宛然驚けるが如くけたゝましく鳴き立て、暫時して靜まりぬ。野鶯は歌ふをやめ、野菜も亦つぶやくをとゞめつ。ヤンコーはあたりを憚りて匐ひゆく、呼吸づかひせはしげに。

あたりは暗うなりゆきぬ。靜なる夏の日の雷光は東の方より西の方へと閃めきて、再び倉の内部を照せり。ヤンコーは四つ這ひになりたるまゝ、頭をもたげぬ。電光はたちまち消え微なる雲は月の表を蔽ひて、何事の見るべくも、聞くべくもあらず。

暫時して、暗中よりは或者の提琴の絃に觸れたる如き音す。この時、突然荒々しき睡氣なる聲は、倉の隅の方より腹立し氣に聞えぬ。

『誰ぞ、そこに居るは。』

ヤンコーははつと片唾を呑みつ、荒々しき聲は再

び問ふ。
『誰ぞ、そこなるは。』燐寸は照らされぬ。そこに火あり、その時、——あゝ命なるかな、呪ひ、打擲、小兒の泣號、あはれに『ゆるして』と叫ぶ聲、——犬の吠ゆる聲、窓のあなたに動めく火影、全家擧つて立ち騷ぐもの音!
次の日、ヤンコーは村ある知事が裁判所にひかれぬ。彼は犯罪者として吟味さるべかりしか。勿論!知事及議員等は、例の指の端を口にして突立たる兒を、その前に引き据ゑぬ。小さき飢ゑたる彼は、打擲を



うけつも、驚かされたる眼もて見視めつゝ、その身は何所より此所に運ばれしか、何事を彼等は彼に向つて求らるゝかを、知らぬ樣にて突立てり。如何なる判決は未だ十才に滿たぬ兒が上に下されしぞ。囚屋に送られんか、——如何でぞを耐え得べき、小兒が上に若干の恩典を與へられんこと必要なりき。巡査をして牽てゆかしめ、再び盜む能はざるまでに、笞打たしめん。これぞの判決なりき。彼等はスターと呼べる巡査を呼びて命じぬ。『この兒を連れゆけ、再び惡しきことせぬやう、

思ひ入れ笞打て、以後の見せしめに。』

スターは、鈍き兇惡なる頭を頷かせて、彼を小猫などの如くに引つ掴み、小脇にかゝへて、厩の方へつれ行きぬ。彼はそは何故なりしを解し得ざりしか、或は恐れたりしか、――一言の詞さへ出すべくもあらじ。

ヤンコーは小鳥などの如く瞪視するのみ。スターの彼を地に下ろして、襯衣をかゝげて一と笞打ちしとき、僅に叫びぬ『カアさま』

スターが笞打てる間は、『カアさま』『カアさま』と低くくるしげに叫びしが、やがてその『カアさま』も聞えずなりぬ。

あゝ哀れなる提琴彈きよ。蒙昧なる意地惡しきスターは、常にかく小兒等を打ち懲しけるか。この小さき弱き兒は、辛うじて生を保てるものなるを。

母は來りて、兒を取りて家に連れゆきぬ。次の日ヤンコーは臥床より起き能はざりき。三日目の夕つ方、靜に死につきぬ、苧もて織られたる薦の下かたき臥床の中にて。

小屋近き櫻の梢には、群雀の囀りゆたかに、日の光りは硝子越しにさし入りて、兒が亂れたる額髪、血の氣だに無き顏の面を黄金色に色彩りぬ。その光線は、ヤンコーが魂の屍を見捨てゝ、神の御國へいたる一導の通路の如く思はれぬ。

やがて自由に解放されし胸は、前と異りたる如き呼吸を以て、再び動きはじめぬ。ヤンコーが面は開け放したる窓より、入り來る村のひゞきに耳傾くるやうに見ゆ。折りしも夕暮の枯れ艸作業終へて、野邊より歸り來れる女の一と群は、聲はりあげて歌ふ、

『あな、あはれ、緑りの野邊に、』

小流れよりは、幽かに管絃の樂起る。ヤンコーは今を最後と村のひゞきに耳傾く、彼がほとり近く例の板片にて造られし提琴横へられて。

直ちに死したる兒の顔は、輝きはじめ、その蒼白き唇よりは『かアさま』と私語く聲す。

『我が子よ、何事にか。』涙ながらに母は答ふ。

『天國にては、神は眞の提琴を授けさせ給ふか。』

母は答ふ、

『必ず授け給はん。御身に善き一つを。』

彼女ははや話すこと能はざりき。その堅き胸の中には耐え耐えし悲みの一時に破れて、啻『ジイサスよジイサスよ』と呻き、掌もて面を蔽ひ、正氣も無くて泣き仆れぬ。

彼女はその兒が魂を返す能はざりき。彼女の再び立ちあがりしとき、少音樂家が兩の眼は開らかれたるまゝにて、その瞳はすはり、その面は犯すべからざるまでに威嚴をましぬ、しかもうら淋しげに。日の光りは薄れゆく。

噫ヤンコーよ、汝に平和あれ。

* * * * *

その後、貴族夫婦は以太利よりその住居に歸り來ぬ。娘ならびにそが氣に入りの騎士を伴ひて。

『以太利は如何に美しき國なるよ』

と騎士は佛蘭西語にて言ひぬ。娘も同じ語にて答へぬ。

『おはれめでたき藝術家よ。天才ある者を低きより起して保護を彼等に與ふることの如何に幸福なる業なる。』

非情なる樺の木はヤンコーが爲めにつぶやきぬ。

（をはり）

村岡勤王談（承前）

森林黒猿

村岡は同志の面々と同じく、死刑に處せらるべしと覺悟せしに、押込仰せつけられて、我ながら呆れ果て、松平丹波守の邸へ引取られましたが、適れすぐれし人と云ひ、特に大御臺所に由縁の老女なれば、丹波守の邸に於ても、饗應等閑ならず、萬事心を用ゐて介抱致しました、二ケ月ばかりも經て、同じ安政六年の十一月に放免の御沙汰がありました、例稀なる事と人々皆云ひ合ひます、今は身に掛る雲霧晴れて、心の長閑けさ言はん方なく、供人美々しく付けられて歸洛の途に上りましたが、富士の芝山を間近く見て嬉しさの餘り

嬉しさを何にたとへん駿河なる
富士の高嶺をちかく見つれば

と詠じました、村岡放免して歸洛の事京都へ聞えますると、由縁ある人々も夢ではないかと思ふばかり、皆打揃つて草津の宿まで出迎ひ致しますれば、こは如何に、乘物嚴めしく、供人數多引具し、老女の格式にて到着致し、村岡の面更に衰へし樣なく、氣力以前に變らぬを見て、人々意外の喜び涙に咽びました。

村岡は大津に着したる時、人を近衞家へ參らしめ

「直ちに參殿して然るべく厶いまするや」

と伺はせたるに、左の如き命が下りました

「今度關東に、御召下しに相成候一件、容易ならざる義に付、仰付られ方も有レ之候へ共、先、里方へ御預け、嚴重に愼罷在候樣、仰付られ候事、但し、他行は勿論、御家中奥表、幷に他所之輩、面會文通等とゞめられ候事、且つ御殿へ、無レ據用事有レ之候節は、津崎縫殿より、

御用人方まで、可ㇾ申出ㇾ候事、巳未十一月」

と申渡して參殿を拒まれましたが、是は全く近衞公の御眞意にあらずして、諸太夫の人々が、幕府の役人を恐るゝの餘り、公の思召しをも伺はず、斯の如く命じたものでムいます、村岡も亦是を知るが故に、毫しも憂ふる色なく、莞爾に笑ふて、直ちに嵯峨へ引取りました、程なく右の愼を解きて、隨意勤めと云ふ身になりましたれば、嵯峨野の片邊なる、直指菴に入つて、老を養ふ事になりました、此の直指菴は、隱元禪師の開基にして、津崎家祖先に由縁の菴なるが、中頃住荒らしたるを、村岡が再興して、姪なる壽仙尼をして、此所に住ませましたから、今は村岡も此の菴に入りて、老を養ふのであります、或日村岡は、山住の心安さに、壽仙尼と、召使のお久米とを連れ、菴を空しうして立出で、野山の景色に心を奪はれつゝ、そゞろ歩行して居りますと、其の留守の間に、一人の武士、編笠に面を包みたるが訪ひ來り、枝折戸ほと〳〵と打叩き

「菴の中に物申さん、某は西國の武士なるが、村岡殿お在ば御意得たし」

と幾度か云ひ入れたれども、人なき菴に、何の應へもありませんゆゑ

「さては不在と覺えたり……殘念至極」

と、彼の武士は、本意なげに、暫時門邊に佇立して居りましたが、良あつて打點頭き、小刀を拔いて、門邊の榎樹を削り、腰なる墨斗を取出して何やらん書認めて、何處ともなく立去りました。

程なく村岡、壽仙尼、お久米共々、手に〳〵草枝など折取りて、歸り來ましたが、不圖榎樹の白げたるを怪しみ、立寄り見て、村岡は痛く打驚きたる樣子でありますが、

「さても不思議や、此の榎樹を白らげて、大島三左衛門と記したる水茎の跡は、紛れもなき彼人の筆跡」

と訝かるを壽仙尼は傍より

「シテ其は誰人で厶りまするか」

村岡「サア、餘人にあらず、薩摩の西郷吉之助殿が、前年より數度送りたる書狀の手跡と寸分違はぬ筆の跡」

壽仙尼「ナニ、薩摩の西郷氏とな、彼人は去ぬる午年、清水の上人と、都を落ちて故鄉に歸り、上人諸共に薩摩の瀬戸に身を沈めしと聞きしに、怎麼して其人が此處へ」

村岡「サア、妾もいと不審に思へど、斯まで似たる筆の跡、もしや存命居て、訪ね來しにはあらぬか」

と話す折しも、再び取て返せし彼の武士は、それと見るより、つか〱と進み寄りて

「めづらしや村岡殿、御健勝にて祝着至極」

と云ひつゝ笠脫ぎ棄てしを見れば、此なん西郷吉之助であります、村岡は夢かとばかり驚きながら

「ヤ、御身は西郷ぬし、唯今も此の手跡を見て、もしやと疑ひ申せしが、案に違はず好くこそ御入來下されました」

と喜び一方ならず、枝折戸を開きて菴の中に請ずれば、西郷續いて座に入りました、サア之から如何なる事を語り出すや、今一回にて結局になりますが、本篇の精神は次回の結局に在ります（未完）

附記前回に完とありましたのは、未完のあやまりでありました。



文林

禁苑新樹　徳大寺實則

此殿のはなのうたけのあとゝへは
　わか葉の露そかせにちりくる

女學校　鍋島直大

をしへ草こゝろしてつめゆく末は
　人のはゝともならむ身なれは

丹塗の鳥居いくつもたてり　竹屋光昭

たつ杉の奥はみえねといなりやま
　朱のとりゐのさやかなるかな

自轉車　前田利鬯

わか足のゆくにまかするをくるまは
　人のひくよりとくはしりけり

小扇撲螢　宮地嚴夫

をとめ子かうつや扇のかせさきに
　螢はたかくとひてけるかな

松下夏月　阪正臣

舟よせてまつの葉こしの月もみむ
　夜かせ涼しきいけのなかしま

夏寺　千葉胤明

夕立のあまやとりせしやまてらの
　のき端の松に日くらしのなく

夏池　遠山英一

なかしまの夕日もたちて池とのゝ
　おはしま涼しかせはなけれと

百合　加藤義清

なつくさのしけみか中に交れとも
　目につきやすし姫百合のはな

雨夜螢　岩崎勝従

降る雨はいふせけれとも竹の葉の
つゆさへみせて飛はたるかな

古戦場　下田春興

矢さらひのそれかわらぬか梓弓
いしはし山のまつかせのおと

山寺子規　近衛貞子

ふる雨にぬれて宿かるやまてらの
軒はまちかくなくほとゝきす

竹径通幽處　柳原愛子

一むらのたけの下みちわけゆけは
また世にしらぬ庵もありける

藤原藤房卿　西四辻茂子

かさきやまさしても露に袖ぬれし
木の下かけをおもひこそやれ

加茂真淵　小池道子

古にかへしはしめしあらをたを
かりをさめけむわかた居の里

夏夜雨　南郷柳子

有明のつきやとさむとゝこあつの
ちりをあらふか宵のむらさめ

遠村早苗　岩崎寧子

ふく風にこゑにきはしく聞ゆなり
遠の田のもやさなへとるらむ

夜子規　三宅龍子

月夜にはまたせ待せてぬはたまの
やみにもなくか初ほとゝきす

雨後早苗　中村禮子

雨はれておとろくはかり茂りけり
きのふか植ゑしかとのわか苗

夏山　服部磯子

松かけの岩かねしみつわきかへり

なつは山こそすゝしかりけれ

辨内侍　　土井榮子

頼みてしくすのわか葉の枯しより
かはく間そなき墨そめのそて

・・・・・・・

雨いたくふりける夜ものにゆきて歸るさよみける長歌一首　　下田春興

五月雨の日をふりくらし　晝またにさひしき物を
さよ中と夜のふけぬれは　さやきつる都大路も
小車のゆきゝとたえて　其ひさゝ聲たにあきに
よもすから巷に立ちて　市人の保護とならし
このふるに笠たにとらす　この降にみのたに持す
まるよりの木太刀た握り　角かたの燈火さけて
たゝひとり立ちあかす覧　人は誰か子そ

子守歌　　『女界』記者　清水橘村

4/4 | 5——5 5 | 5 6 5 5 | 04 5 6 56 | 5——0

よーいこ　かわいこ　かぎりのない　こ——
はーとも　あいてくる　いぬもく　る——
せんねん　まんねん　うつくし　く——

3——3 3 | 3 4 5 5 | 03 3 4 3 | 3——0

ばーやの　おもりは　かごのと　り——
はーなも　ひらいて　もゝもな　る——
ばーやは　おいへの　はるとあ　れ——

よい子可愛い子限りのない兒
　坊やのお守は籠の鳥
鳩も鳴いてくる犬も來る
　花もひらいて桃もなる
千年萬年うつくしく
　坊やはお家の春となれ



六月廿日兼題

閑居水鷄

天　横須賀中里山田方　上田雪子

我いほの木かけなかるゝいさゝかは
　つきすむみつにくひななくなり

評、閑居の題には少しいひたらぬこゝちすれど、歌がらすぐれたればすてがたし。

地　東京市本郷區本郷二丁目八番地　大木光子

ゆふされはわきて靜けきわかやとの
　かとの小かはにくひななくなり

評、實景よみいたりといふべし。

人　和泉國和泉郡深井　福原菫子

人訪はぬくさのいほりを小夜ふけて
　うちおとろかしくひななくなり

評、すぐれたりとにはあられども、よく題意にかなへり

甲之部

東京　近澤和子

まつかせの音しつかにも小夜ふけて
　つきすむにはにくひななくなり

伊豫　小田操子

とはれぬをこゝろとすめる隱れかの
　ゆめおとろかす夜半のくひなか

大阪　原田芳子

われあらてくむ人もなきやりみつの
あたりしつかにくひななくなり
長崎 日高かず子

をちこちに聲はすれとも世にうとき
やとはくひなもたゝかさりけり
山口 田村道子

ひととはぬわかかくれ家を尋ね來て
たゝくくひなのこゝろにくさよ
肥後 田代艶子

靜けさをこゝろとすめるいほなから
たゝくくひなそうれしかりける
大隅 宇都良子

世をすてし我かくれかをおとつれて
こゝろありけにくひな鳴くなり
肥後 佐々有郷子

世にうとき柴のをり戸をしはしはも
たゝくくひなのこゑそたのしき
大隅 山田よね子

みちもなくあれたる庭のくさむらに
こゑもつゆけくくひなゝくなり
神奈川 森田はな子

よのちりをはなれてすめる柴のとに
こゑおもしろくくひあなくなり

乙之部

こかくれてしろひともなきしは門を
よことよことにとふくひなかな
伊勢 岡田いの子

おとつるゝひとたにもなきしは折戸
夜半にたゝくはくひななりけり
松山 梯たけ子

八重しけるむくらの門におとたてゝ
こととひかほにくひなゝくなり
東京 椎野秀子

かとたゝく水鷄のほかにともゝなし
うきよへたつるくさのいほりは
東京 椎野清子

さひしさを問ふ人もなきしはの戸の
そとものさわにくひな鳴くなり
東京 太田やへ子

人とはてさひしきやとは夜もすから
たゝくゝひなのこゑそうれしき
東京 田中秀子

草のとをとふひともかなよたゝなく
和歌山 長尾 小ゑい子

くひななきゝてうだかたりせん　東京　笹川ふき子

よろことにたゝく水鷄そまたれけろ
なすわさもなくひとりすむ身は　東京　秋元きよ子

世のなかをはなれて住めろわか庵に
來てはくひなのたゝくころかな　東京　小川たき子

とふ人もまれなろいほはよなく\に
たゝくゝひなもうれしかりけり　肥後　鶴田春香子

山ふかきくさのいほりをよひく\に
おとなふものはくひなゝりけり　長崎　內藤美興子

松かせのおとにはなれししはの戸も
たゝくゝひなにおとろかれけり　東京　林　常子

こぬひとをまつのした庵さ夜ふけて
にくやくひなのかとたゝくなり　山口　田村多豆子

花にたにとふひともなきやとの戸を
たゝくは夜半のくひなゝりけり　山口　田村米子

とふ人のなきわかやとはまきの戸を
たゝくゝひなもうれしかりけり　松山　上原のふ子

はかられてうれしきものは人とはぬ
ねやの戸たゝくゝひなゝりけり　東京　長尾菊枝子

やま里のまつかせそよくたにかはの
きよきなかれにくひなゝくなり　秋田　古瀬りく子

ありとしもひとにしられぬ草のとを
よたゝくひなのなにたゝくらん　茨城　荒野たに子

さと遠みひとこそとはれむらさめの
かゝろいほにもくひなゝくなり　大阪　桝田登子

なかゝきにうき世へたてゝすむ庵の
しつけきつきにくひなゝくなり

ひろたにもとふ人もなきかくれかを
夜たゝたゝくはくひななりけり　岐阜　吉村しい子

よにうとき住ひなれともくひなゝく
よはゝともにもしらせてしかな　東京　三好珍子

みやこひとゝひ來し折はおともせて
ふけてくひなのなにたゝくらん　大阪　中舘やう子

とふひともたへし夜ころの柴の戸を
たゝくゝひなのにくからぬかな　栃木　青木たま子

たまく\に門のとたゝくゝひなこそ
ひとりすむみはうれしかりけり　東京　牛山業子

八重しけるむくらの門をあけかたに
たゝくゝひなやれさめとふらん　埼玉　前野ふさ子

しはの戸を叩くゝひなにはかられて
おもはすつきをなかめつろかな　東京　名木山勝子

柴の戸をあくれはひとのかけもなく
とほさかりつゝくひなゝくなり　東京　佐藤成子

さ夜ふけてとふ人もなきしはのとを
たゝくゝひなのおとそしつけき　相州　岩橋花子

のかれ住むこゝろも知らて柴の戸を
よたゝくひなのなにたゝくらむ　大隅　久留さや子

世をすてゝかくれ住む身の門の戸を
ふけてたゝくはくひなゝりけり　大隅　宇都常子

とはれしと世にかくれすむ柴の戸を
夜たゝくひなのなにたゝくらん　肥後　小池頼子

ひとりすむむくらの宿はよもすから
たゝくゝひなをあはれときく　肥後　德永廣子

世をすてしむくらの門としりなから　肥後　德永萬壽子

よろ／＼たゝくゝひななになり

川そひのしはのなり戸のあけくれに　とひくるものはくひななりけり　肥後　野口静子

里ひともおとつれまれのわひすみは　くひなのこゑなひとりきくかな　肥後　佐々小峯子

人とはぬわかかくれ家はよひ／＼に　ところもかへすくひななくなり　大隅　山田いれ子

友もなきわかかくれかのさひしさな　なくさめかほにくひななくなり　筑後　鏡山増代子

ともすれは叩くゝひなにはかられて　しはのなり戸を明けぬ夜もなし　東京　北島操子

世はなれしまきの板戸も夕へ／＼　くひなにのみはおとなはれけり　東京　北島功子

柴の戸なたゝくくひなにはかられて　みしかきなつのゆめもさめけり　大阪　谷信子

とはれしと世ないとふ身の柴の戸な　たゝくくひなもかひなかるらん　三河　永井さい子

とふひともなきになれたる槇の戸な　なににくひなのたゝくなるらん　東京　新海わか子

八重むくらいふせき門ななにしかも　たつれてたゝくくひななるらん　東京　片山ふみ子

こゝろからうき世な遠くすむやとは　くひなのこゑもなれてきくかな　東京　戸塚てつ子

くひなとはかれてもしろし世の中の　ひとにとはれむすみ家なられは　東京　吾妻ちか子

丙之部

しつかなるわかかくれかの柴の戸な　たゝくはよはのくひななるらん　伊豫　黒川重子

思ひわひよなおくやまにさけし身の　あはれなとふはくひななりけり　伊豫　水木友子

かくれ家としらてや門なたゝくらん　あけてくひなのゆきかたもなし　東京　矢野やす子

ひとり住む宿のあはれなとひかほに　さとのくひなのたえすおとなふ　東京　川村松子

おもほえすたゝくくひなに明てけり　よひにさしたるあまのなり戸な　東京　片山おや子

すみわふる宿としりてか小夜更けて　くゐなはかとなたゝくなるらん　東京　平尾あさ子

とふ人も絶えてさひしきまきのとな　たゝくおとこそくひななるらめ　東京　椎野薫子

よもすから戸さゝぬ門ないかなれは　あけよとたゝくくひななるらん　京東　椎野ぬき子

かたらはんともなまつまの門の戸に　おとつれそめてくひななくなり　東京　椎野鉄子

柴の戸なたゝくとみしはひとならて　あけくれまちしくひななりけり　廣島　春野静子

おもひわきふせやの夢もくひななく　こゑにしは／＼さましけるかな　大阪　原田照子

ねさむれは月のみひとりかけすみて　くひな鳴くなりかとの小川はに　大阪　林常子

淋しさにたゝくはくひなと知りつゝも　とものとふかといてゝ見しかな　東京　松村あさ子

訪ふひともあらしと思ふおくやまの　いほりなたゝくはくひななるらん　東京　芳賀あい子

とはれしとひろさへとさす柴の戸な　肥後　鶴田貞子

なにとてたたくくひななるらん

まれにとふ友かときけはしはのとを
よすからたゝくくひななりけり　長崎　八尾いへ子

人とはぬくさのいほりのしはのとを
たかためたゝくくひななるらん　京都　石原よし枝子

あかたもるみはうらやすき明くれに
ともとくひなのおとつれをきく　東京　山本梓子

柴の戸をあけてとひくるともなし
ひとりくひなのこゑはかりして　岩手　佐藤たい子

人とはぬわかまきの戸はさ夜ふけて
たゝくくひなにはかられもせす　山口　村上操子

いまさらにとふひともなき柴の戸を
たゝくは夜はのくひなゝりけり　東京　長尾文子

ひとゝはぬ柴のあみ戸を小夜ふけて
なにあけよとてたゝくしひなそ　東京　内藤操子

ちりの世をのかれてすめるいほの戸を
くひなはなにゝたゝくなるらん　上總　高石登代子

よのうさをきかぬ庵におとつれて
けさもたゝくはくひなゝりけり　秋田　早川のふ子

ことしけき浮世をよそのかくれ家は
こゑもすゝしくなくくひなかな　埼玉　前野蕊賀子

あさいするねやの板とをあけよとや
けふもくゐなのきてたゝくなり　京都　坪内りき子

とふ人もなきやとなからこのころは
くひなのこゑにおとろかれぬる　東京　野口しま子

まちわふるともとはなしに柴の戸を
たゝくくひなのこゑそきこゆる　大阪　中圓館子

ひとりねのゆめも見はてぬみしかよを
なとかくひなのおとろかすらん　東京　安居京子

よもすからねさめの友とたのむかな
むくらのかとをたゝくくひなは　東京　安居あや子

世をすてし宿ともしらてよな／＼に
きつゝたゝくはくひなゝりけり　肥後　田代綾子

柴の戸もたねすくひなにたゝかれて
ひとりすむともおもはさりけり　播磨　本多宜子

柴の戸をたゝくゝひなにゆめさめて
まつとしもなきつきをみるかな　和歌山　池田松枝子

つま琴のしらへゆかしきしはのとを
かいまみをれはくひなゝくなり　東京　佐藤央子

山さとはさひしかりけりよひ／＼に
おとなふものはくひなのみにて　備後　河村春子

世のなかのうきこと聞かぬ柴の戸を
たゝくは夜半のくひなゝりけり　大隅　上原歌子

かくれ住む宿のつま戸をあけよとて
よたゝくひなのたゝくなりけり　大隅　前田花子

くひなさへともなき宿と知りぬらん
こゝろありけにねさめをそとふ　大隅　池上村子

柴の戸をあくれはひとのかけもなし
たゝくはゝかろくひなゝりけん　肥後　千知波橘子

夢のうちにいた戸あけよのおとつれを
さめておもへはくひなゝりけり　肥後　服部倫子

世にわひてひとりしつけくすむ宿を
しらてくひなの夜たゝなくらん　岐阜　佐藤そう子

世をいとふむくらのやとを短かよに　肥後　徳永[illegible]子

こゝろみちかくたゝくゝひなか　肥後　徳永多瑶子

世をいとふ柴のかりほはかりそめに
たゝくゝひなのこゑもはかなし　肥後　徳永純子

柴の戸をたゝくゝひなにねさむれば
はやくもつきはかたふきにけり　埼玉　横田音羽子

世をいとふすまひも夏はやりみつの
ほそきなかれにくひな鳴くなり　廣島　衣笠澄子

世はなれし柴のいほりにたゝすめは
くひなのこゑもちかくきこゆる　大隅　稲垣政子

世のうさはきこえぬ宿のねやの戸を
たゝくはよはのくひなゝりけり　東京　林環子

雨そゝく夜半にひもまつわかいほは
たゝくゝひなのこゑはかりして　筑後　武田龜子

かくれかに人のとひくとみしゆめは
よはのくひなのたゝくなりけり　茨城　小沼かの子

とふひとのなきをつれなる柴のとも
くひなのみにはたゝかれにけり　大阪　伊勢村花子

世の外とおもひしめたるまきの戸を
おとつれかほにくひななくなり　大阪　伊勢村春子

さひしさに人まつよひはしはの戸を
たゝくゝひなにはかられにけり　埼玉　横田秋子

やへむくらしけきわたりのほそ流れ
ねさめてきけはくひなゝくなり　三河　服部萬子

ひるたにもしつけき宿に小夜更けて
くひなのこゑはものにまきれす　三河　服部正子

はしゐしてひとり月みるかとの戸を
たゝくゝひなはこゝろありけり

やまかけは人こそとはれあさよひに
のきは間ちかくくひなゝくなり　三河　本多きさ子

ゆふ月夜いてゝみよとやかくれすむ
わかゝとのとをたゝくゝひなは　三河　河合鮭子

六月廿日兼題

不幸の人を慰むる文

天　東京下谷區長者町貳丁目參番地　名木山勝子

降りみ降らずみ定めそなしといひけんつゆの雨の窓のほとり音づれそめ候てより、何となう淋しさ覺ゆる殊に夜半などは御許様の御上のみ忍びまつりてはすぎし日の事ども、くりかへし、袖をぬらし居申候。うき世のならひとは申乍ら、さては、あまりに神のみしわざにも恨み申されて候よ。さり乍らまた、御許様の、御母君への御孝心厚くおはしますことをのみ、いつも〳〵感じまつりては、あはれど朝夕御噂のみ致し居申候。優しき御母君を失はせ給ふてより、今の御方に事へ給ふことに、

いとゞみ心遣ひせさせ給ふ由の、御姿にもおのづからあらはれ給ふて、げに御いとしき事やと、花賢る翁は、私見る度に申され候。いかで天つみ神も、たゞにやは見給ふ、必ず〳〵物など悲しませ給ふ事なく、御身體御大切に、益々御孝養せさせ給へ、さ候へば今の御方とても御許様の御孝心を深く感じ給ひて、必ずめで給ふこととの御座候はむまた花咲く春も、遠きにはあるまじとぞんじ候。御なぐさめ申上げたくて、たび〳〵筆をとり候へども心の儘に認めえで、なか〳〵に悲しさのみ、まし奉り、何とも申わけも御座なく候。先は右拙き筆もて。あなかしこ。

評、世の継母継子の爲めよき誡しめなり。かきぶりも他にまされり。

地

東京四谷右京町二十八番地　山本梓子

時すぎぬるや、郭公も、音せずなりにし此比のつれづれにも、先御あたりのしのはれてなむ。住なし給ふまなびやのうちには、かたみにいひかはし給ふ友どちも、おはしますらめと、あした夕への空ながめに、などて、昔を思ひ出て給ふことのおはさじやはと、いと、いとはしうなむ。されど今はくり返してもかひなきこととおはしけちたまへ、さらぬ、別は、誰ものがれがたう侍るものを谷の埋木などかこち、給ひし、御口つきの、御心よはくもおはする哉、なき父君母君のみたまも、たゞ君が、御身のすか〳〵と、御いたはりもなく。て、志し給ふ、みちの一すぢ、奥まで、きはめ心の鏡みがきなし給はむを、あけくれの御ねぎごとにおはすらめ。憂き時はたのしきことを思ひうかべたのしき時は、うきことを思ひて、おのれと心をなぐさめ、はた、いましめば、遂には玉の光の世にいでゝ、つゝめどもなどてかくれむや、御心のどかにて、いそしみ給へ。かゝるごと聞ゆるは、いとさかしらたちて、人の思はむもかゞやかしけれど、樫のみのひとり、のみ、ものし給ふ御上の、いと心にかゝりてあん。をこのものやとと

がめたまひそ。まきこめし撫子は、諸共にふりわけがみの昔わかやどに土かひ侍りしが今もかくにはひいでたるなれば、いかで、君にも見せ奉らばやとてなん。はかなき花の一ふさも、折につけたる御心やりに、御らんぜさせ給へき、こえまほしきなにはの事も、多かれど、拙きふてのよしわしぐさもわきかたければ、又のどかならむ日にとおなかしこや。

評、父母の心を心として其子を慰めたる能く人に告ぐるの体を得たり。

人

長崎市西山七十一番戸　日高かず子

御國の爲と思ひ起し給ひし業もいすかのはしとなり、よしあき人にはかられて數多の黄金を亡ひ、祖先の代より住みなれ給ひつる家さへ人のものとなりぬるを、いたみなやませたまひて重き御病ともなり給へるを、夜晝わかず厚きみとりも藥師の力もかあはず、歸らぬ旅にかしまたちたまひし脊の君の御恨は更なれど、殘されたまひし人々の御歎き一日〳〵にまさりぬべく、萬承るにつけても身をさかるゝ様覺え侍りぬ。若き老たる定めなきも家の榮え衰ふるも世の習ひ人の常にて、咲けば散り滿れば欠くるとわりのためしも侍れば、しづのをだまきくりかへし給はんもさることながら、おはさぬ御方のみたまをねもころに弔ひたまはんことをこそ。聞えんも嗚呼なれとなげきには心もみだるゝならひに侍り。世の波風しのぎ給はんこと御心一つに侍れば、行く舟の棹梶とも頼み侍るなり。幼き子達をはぐゝみ給ふかたはら、文の道はた裁縫の道の敎子たちも數多おはせば、年月の過ぎ行くうちには、うゑ給へる撫子も花咲き匂ひ出でうるはしき實を結び、五月暗の御物思ひもかき月夜の御物語となり侍らんに、かまへて〳〵御心な落したまひそ。なめげながら御子達の學資はこゝよりまゐらすべかんめれは、さる方には心安め給ひねかし。なほ近にまうのぼり、萬は對面の折になむ、かしこ。

評、資產と良人とを失へる不幸の人を慰めんとて、其遺子の上に就き將來の模樣を說き、意匠結構の巧みな

ろを見るべし。

（以下原稿到着順）

東京　島飼とみ子

黄金にも玉にも勝る寶ぞと、子をいつくしむは人の親の常ながら、ましても御情深くましませし父の君には、はや君が物學せらるゝ程になりたまひたる頃には、折にふれ事につけつゝ、其御器量の世の凡ならぬに深くも御心を注がせられ、實に人多き人の中なる人となれかしと、朝な夕ないつくしみたまひ、折節には御心をもらしたまひし言の葉の、今なほ耳に殘れるを、月に村雲花に風のたとへにもれず、かゝる希望を懐きながら、時をもまたで、父君もまた母君さへ打續きて世を去りたまひたれば、君が不幸何にたとへん、方もあらぬに、その後は仇し人の手にかゝりて、苦しき月日を送り居らるゝとか。實に大空をも翔らん御心は在りながら、翼折られし鳥の如く、黒雲掩ふみ空の月の光りも失せて、いかにいぶせき年月を過したまふらん。父母君のましまさんにはいかに幸多かるべき御身にて、かゝる境遇に苦しまるゝを推し計りては、おぼえず袖をしぼる事、そも幾度なるか。さはいへ、なげきにのみ打沈みて、心もくもり勝に暮されんには、いつの世にか眞如の月をみらるべき。つとめて御心をはげましたまひ、むらがる雲をも打はらひて、御身を潔よくせられんには、やがても出る月影の光りと倶に、其功もあらはれて、亡き父母の君にも、草葉の陰よりさこそは悦ばれたまふらんかし。されば今の不幸はなか〳〵に後の爲ともならん事もあるべければ、如何なる辛き悲しき事に出逢ふとも、必ず耐へ忍びたまへれ。偏に御身を立てられんことを祈りまゐらすになん。かしこ。

神田　田中貞子

日頃の雨天おのづから心もくもり勝に相成候處、御許様には如何渡らせ給ふらん、御様子伺ひ上候去年せの君にわかれ給ひし御なげきも、御かゝみの御子たちになぐさめられしものを、先頃またもや、御愛子様常なきかぜにさそはれ給ひし御悲しみ、今更何と御悔申上様もこれなく、重々の御不幸御察申上候。常の女子ならんには病の床にもふすべきに萬のことわりにさとき御許様の御事とて、平然と御家の事さはかれ候雄々しさ、一同感佩いたし候。言はぬは言にまさるとか。御心のうちの悲しさ一人と推量りまゐら候。高きいやしきなべて一生をたのしくすこす人々稀にて、まゝならぬが浮世の常に候へば、兎角正しき道をふむよりいたし方これなくと存候。たらはぬ身には候へとも、ふさはしき事も御座候はゞ、御心おきなく仰せ下され度先は御様子御伺まで。不順の時候に候へば、折角御大切に御保養被遊度祈入候。

かしこ。

長崎　八尾いへ子

いさゝかの御恙とのみ思ひ給ひつゝるに太郎の君にはとみに二葉のまゝに、枯はて給ひつと承るなん、こよなう驚かれ侍る。げに御心の内おしはかり參らせては、申も中々なる御事に候。先つ年東の都へ出立せ給はるをうらやましう思ひ玉ひしに、ほどなう背の君には海ゆく道を數へ子らに梶とり、みちびかせ給ひつゝ、伊豆の沖邊にて、おもひかけ給はぬ風吹きてたちまさる荒濱にともなはれ、御行方もわかずなりはて給へば、なげきに沈ませ給ふ、涙のかはくまもなふ、千代迄もと、ちゝのみの殘させ給ひし一人の御子をさへ、失ひ給へば、同じ道にとなげかせらるゝもことはりなる御ことにて、げにわりなき世のならひ、さることには侍れど、御自から恙なういたはせ給ひてよ。世には此上の不幸も澤山侍れば、御心男々敷もたせ給ひ、ゆめ御力な落し玉ひぞ。背の君

とて氷だいづらとも分ち難う侍れば、うれ數消息も見給はん折も侍らんかし。そなせめてもの御心やりに行末なまたせ玉ひねかし。なきに侍らば、みありさまも見たてまつらまほしう侍れど心にまかせ侍られば、筆してかくなむ。なめげなるは中垣のへだてぬゆゑとゆるし給ひなむ。あなかしこ。

長崎　内藤美與子

撫子の花ちりはてゝ、またなき御なげきにしずませ給ひしより日頃愛で給ひし文も手にし給はず、玉の緒琴の音なたゝて、淋しき園に、たれこめてのみ、あかし暮らさせ給ふにつけても、人の御ひざにまつはらせ給ふことなど思すらんと、御心おしはかりまゐらせ候。されど流るゝ水は去りて歸らず、花も散り、月も缺るは、うつせみの世の習に侍れば、御たまどこの御あかしかきたて玉ひ、折々の手向の花に御心なつませ給へば、かしこのおんよろこびも見参るこゝちなんするを、わりなく御嘆にのみ、わづらはせ給はゞ、さるかた/\のいかに御心苦しく思すらめ。あはれすこやかなる方に御心をいれさせ給はゞ、いまよりいくらの玉の男の御子も、あれまし給ふべかんめれば、そのかたに念じかへさせ給ひねかし。こは名聞ゆたる大人の物されし文どもかい集めたりとて、人のもて來しなよみ侍るに、面白き節も多かめれば、しばしの御うさなも慰め侍らばとて、たいまつるになん。聞ゆまほしきことのさわに侍れど、かふこのわざにいとまなく暮し侍れば拙きふでにいはせ侍る。猶はお目もじの折に殘し侍るになん。かしこ。

大阪　桝田錢子

かきくらし、日をふる五月雨のいぶせくも侍る哉。愛にもつれづれを慰め侍る折しも給はりしみ文よ。初郭公も物かはと、嬉しくもふんじおし開けば、思ひきや死出の田長の音信ならんとは。打驚されてむねつぶ/\となり侍りにけり。稚なき君には、風の御心地とは承り侍りつれど、程なく癒え給ふらんと思ひ給へりしを常なき風に楢の花と共に誘はれ給ひしとよ。老少不定ときゝ侍る物から、今更のやうにて、夢とも現とも此頃の空なす心もかきくれ侍り。まして人の親のと承り侍れば、ひとつ道にもと歎かひ給ひて、さ月のやみに迷ひ給ふらんとこそ、さしまぐれ侍れ。されど行水の歸らぬ理りとのどめ給ひて、涙川にもしがらみかけ給へ。あまりに思ひしづみ給ひて、ひたやごもりにたれこめ給はゞ御身のいたづきにもなり侍らんかし。こなたにも常に親しき御中らひに侍れば、おなじ水のもとにて露けくは侍れど、庭のむぐらかきわけ給へ。少しはみ心のはるけき御物語りもきこゆ侍らん。くしのみゐ給ふらんは、九品の上にも障りありぬとか承り侍ればなん。あなかなしとも悲し。

肥後　佐々有鄰子

巾がきゆはれわが君よ、朝夕すなきまつれる君の御身にふりかゝる村雨の雲ならで、うき霧のみ立おほひ給ひて、県の庭にしあしわけ小舟さはりおほみ、しづ山がつがなげきのみこもりたまひしものから、今日よりゆくさきは、級長戸の風のふきはらふことのごとく、不幸といふ罪は、青海原しほの八百路の八汐路に、身そぎはらひたまひて、立かへる秋のはつ雁の、いとすが/\しく山幸海幸を得たまひて、はたのひろやの心ひろやかに、毛のにごものすがたにこやかに、いよ/\ます/\ほゝそ葉の母のみこともちゝのみの父のみことも、もろともに今しも幸福多き御身の行末、鏡にてらして明かに立榮ますらん。あなめでた。いとたのしき御事にこそ。見参の日、熟々祝言きこえまゐらせん。あなかしこ。

雜報

●皇后陛下の御仁徳　今更申すも畏けれど皇后陛下の御仁徳は、萬人共に感涙に咽ぶ處あり。曩に二十七八年の役に、負傷者一同へ義手義足を下し賜はりしが、今はそれより六七ヶ年の星霜を經たれば、肥瘠屈曲の變更によりて、已に其等の不適となりし輩もあるべく、又は破損に歸して用ゐ難きに至れるもあるべきを思召され、巨細に取調べたる上、其不適なるものは之を新にし、破損せしものは宜しく修補して取らしむべしとの仰ありて、此程已に陸軍大臣迄御達しあらせられ、諸

費用は、特に御手元より下し賜はる事なりとぞ。戰爭の當時より既に數年の後なる今日、猶負傷者の上を御心に掛させ給ふ事、まことに有難きことなりかし。

●皇后陛下の御沙汰　皇后陛下は過日教育品展覽會へ行啓あらせられ、難有御沙汰ありし趣なるが、千家東京府知事は、當日の御沙汰を一書にして同展覽會へ傳達せり。即ち左の如しと。

一、圖書習字等は、毎郡區の陳列場に於て少くも一綴分を開かせ、御覽遊ばされたり。

一、裁縫品陳列の場所に於て、知事より同一のもののみ多數ある旨申上たるに、品物は一樣なるも裁縫したる兒童は異なれば、能く見ねばならぬとの御沙汰あらせられたり。

一、當所の陳列場に於て、知事より小笠原、八丈、大島其他の教育の模樣を申上けゝるに深く御

目を留めさせられ、當所の教育も斯くまで進歩せしや、誠に喜ばしき事なりとの御沙汰あらせられたり。

一、雨中多數の生徒奉迎せるを御覽遊ばされ、此の雨中にかわいさうなりとの御沙汰、知事にまであらせられたり。

一、御覽後斯く兒童の學藝進歩する樣、教授する教員の苦心甚く容易の事にあらざるべしとの御沙汰あらせられたり

●篤志看護婦人會　去る六日飯田町赤十字本社に於て開會、出席者は會長鍋島侯爵夫人、幹事毛利公、田中子、平松子、松平男各夫人以下會員四十餘名にして、梨本宮妃殿下の台臨あり。講師山上兼善氏の「人身各部の名稱に就て」の講義終りて、繃帶術の練習を爲し、四時過ぎ散會し、次會は本日午後二時より、澁谷の本社病院に於いて開會の筈なりといふ。

●老媼の受賞　德島縣なる西野嘉右衛門の祖母ハル(八十一)は、其篤行郷閭の模範たるに足るべしとて内務省より地方廳を經て、勅定の綠綬褒章を賜はることゝなりしよし。

●感ずべき乳母　東京麻布區鳥居坂なる大島男爵家の乳母に、中西てつと呼べる老婆あり。もとは可なりの酒商なれども、やう〳〵不幸のことのみ打續きて家政紊亂し、遂には夫に先立たれたゞ一人の娘をたのみて朝夕の細き烟にはかなく世を送りけるが、かくてあるべきにあらざれば、やがて乳母奉公に出でむものと心を定めぬ。その時大島夫人の初産にて、すぐれぬがちの身なりしかば、人の世話にて、てつがこゝに住みこみたるは今を去る四十二年即ち文久元年の事なりけり。か

くて慶應三年鳥羽伏見の戰より奥羽各地の戰爭となり、主人大鳥男は、死士を率ゐて東北の山野に轉戰せしが、世の勢には敵ひがたく、遂に歸順の身となりぬ。その間一家悉く下總に隱れ、具さ艱難を嘗めたるも、てつはさらに變りたる心なく、令孃はもとより、兄弟數人おのが手塩にかけて、忠勤をさ〳〵怠りなかりき。其後世も太平となり、男もいよ〳〵顯職に居らるゝに至りてはその孫數人をもはぐくみ、永年さながら一日の如くなりしかば、みな其感化を受けて、てつに懷くこと夫人に異ならざれば、家庭常に圓滿なりと。てつ性質篤實伶俐にして而も讀書の素養あれば常に子女養育に意をそゝぎ、夫人の手助をなし、家庭を整理して、七十五歲の今に及びしかば、同家に出入するもの、みな其忠勤を賞めぬはなしとぞ。されば、同家にては、てつを愛すること一方ならず既にその娘には婿を配せて、商業を營ませしに、不幸にも一人の娘を殘して夫婦世を去りしかば、その娘をも小間使の列に入れ、てつ一家の事は、一切世話することゝなれりとか。てつの精勤はさることなるが、この老女を出したる大鳥家の家法もまた他に比ぶるものなく、夫人自ら炊事に從ひ、毫も苛酷の取扱をせず、奴婢決して不平を起すことなし。一旦召使ひし女は結婚の外暇を取りし者なく、男も事情已を得ざる事ならでは暇を取りしものなしといふ。實にこの家にしてこの老婆あり、主從の道の廢たる今の世に、さても珍らしき美譚といふべし。

●●●●●●●

●篤志なる女生徒　島根縣八束郡忌部村尋常高等小學校高等科三年級なる永瀨さんといふは、同村永瀨熊五郎の娘にて、性質至つて怜悧にて、操行も正しく學業も亦優れ、七箇年の間未だ一日の

缺席なく通學しつゝある由なるが、家内には老衰病にかゝりたる祖父あり。家計裕かならざれば兩親は一日も早く退學させて、家事の手傳をなさしめんとすれども、きんは學校を卒業せんとの意いと切にして、一向勉學に餘念なければ、親々も之を止めんに由なく、矢張學校に出しやれば、きんは此上なく喜び、家に歸りては兒童には隨分無理なる仕事も父母の命ずるまゝ、些の不服もなく、やさしく辨じ、其隙もて學科の復習をなすなど、中々殊勝の行爲多かり。殊に先頃新教科書數部を整ふるに當り、父母は其費用の多きを口實として、愈々退學させんとしたるに、若竹のいよ〳〵節堅く同人は校長の許可を得て教科書を筆寫し了り、それにて、授業を受けつゝありとは實に感ずるに餘りといふべし。されば、朋友もいと氣の毒に思ひて、快く書籍を貸し與ふるのみか、邑智郡君谷小學校長某は傳へ聞きて大に感じ、筆墨料を寄贈せしに、生松學校長は、之を全校生徒の中に於てきんに傳達し、大に他生徒を奬勵したる由。又同村教育會よりも、その美行を表彰する筈にて、不日父兄會の席上に於て、授與式を行ふと云ふ。鄙珍らしき香り草とこそいふべけれ。

●學生の視力　學校衞生上、最も世人の注意すべき遠近視眼者の文部省各直轄學校に於ける最近調査の百分比例を聞くに、兩眼正視者の多くは、男に在りては附屬職工徒弟學校生徒の九十六人六分、最も少きは京都帝國大學の五十一人四分、女に在りては、高師附屬女學校八十七人五分、最も少きは、東京音樂學校の七十一人五分にして、近來學生生徒の年齒の長ずると、且學科課程の階級の進むに從ひ、直轄學校のみならず、全國各地方學生とも、悉く兩眼正視者の數を減じ、年

を逐ひて、遠近視眼者を増加するの傾向を來し、到る處眼鏡屋のみ繁昌の現況なるが故、當局者これが豫防法を講ぜんとて、學校衛生會に於ては、三島主事專ら取調中なりとぞ。

●●●●●●

●女子留學生の來朝　今般八名の女子、清國江蘇省より留學の爲め來朝したるが、右は何れも自費留學生にて、經蓮珊といふ人監督として、隨伴せり。一行中四名は、下田歌子女史監督の下に華族女學校に、他の四名は小學校より漸次師範學校に入る目的なりと。年長者は廿四歳にして、年少者は僅に九歳也といふ。



●●●●●流行の髮飾　近頃は世の人々概して優美高尚なる者を愛るに至り、少女の花簪も、成るべくごちたくうるさからぬを好み、和洋の草花に擬らへたるもの丶如きは、色合の淡きを喜べり。製造の材料は縮緬羽二重布目の取合せものにて、色氣は重に白と藤のぼかし、薄紅、藤色、時色又は水色を用ゐ、また絽地に金銀

モールの蕋を取合せなどし涼しう見えたるもの一般に流行し、價は廿錢より三十錢位、又根掛類は、銀簾、螢掛などゝいへるもの新形として行はれ、之に續いては絽、縮緬又は羽二重地に薄鼠、白茶、藤、桃、鶯茶等の山水花卉模樣の紐にて平ぐけ丸ぐけの二種あり、三錢以上六七錢止りの處賣行よしと、又年たけたる婦人の櫛は、鼈甲に龍田模樣の鳥貝彫込み、又は菊に雉子、左らずば源氏模樣などを現はせり。平形を好み、また黑鼈甲に金銀にて露芝、桐に鳳凰、山水を蒔繪にせしもの例によつて賣行よく、後差は細形にて翡翠、キヤツパ孔雀石、紫水晶、更紗玉等を附し金銀製松葉形の脚をなせしもの流行し居れりといふ。

●●●●●●

●佛國の自活婦人　佛國の一婦人が、某雜誌に揭載したる「婦人の仕事」と題する一文に依れば、佛國婦人にして、有形無形の勞働により、其日々の生活を送れる者總計六百三十萬人あり、內三百萬人は旣婚者なるが、此等多數の勞働者中二百七十萬人以上は農業上、二百萬人は商工業上の勞働者にして、尙十二萬人は僧尼、一萬二千人は俳優十三萬八千五百六十人は醫師敎師の如き種類の職業に從事せる者なりと。

●●●●●●●●

●婦人服の裾と黴菌の數　英國某雜誌に古き紙幣中には驚く可き多くの黴菌を含み居れるが、婦人服の裾には、更に多くの黴菌を含めり。或る人の檢したる所に據れば、裾の捌きの一片に二萬六千八百個の黴菌を含み居り、又は幅六吋長さ其五倍なる裾の二片には、千〇六十七萬二千個の黴菌を含み居たりと。而して婦人が裾を地に引裾る際裾に附着せずして地上に亂れ動き人の呼吸するもの若しくは裾に附着して家に歸りたる後

振ひ落さるゝ黴菌は、數限りも無しと記せりと。

●英國の早婚者　英國には、丁年未滿にして結婚するもの少なからず、倫敦には二十歲以下にて結婚したるもの一萬三千人あり。中には十三歲の女子にて結婚したるものあり。十五歲にて人の妻若しくは寡婦二十三人、十七歲の妻若しくは寡婦百六十四人、十八歲のもの九百七十一人、十九歲のもの二千七百十二人、二十歲のもの六千六百七十二人あり。又年少の夫は割合に少なきも、尚十六歲より十九歲までの夫七百八十七人、二十歲の夫二千〇二十二人あり。而して此等は勞働社會のものに多しと。地方には昨年の統計に據るに、丁年未滿の結婚者五萬六千三百九十八人。即ち千人の既婚男子中五十人の未丁年者あり。千人の既婚女子中、百六十五人の未丁年者ある割合なり。然も此割合は、往時に比して大に減少せしなりと。

●落葉籠　紙面の都合により休載す。

口繪に就て

●前田侯爵夫人　花將に盛んならんとして風雨之を侵し、月漸く圓かならんとして浮雲之を遮る禍福常なく悲歡互に至る世の有樣こそ是非なけれ前田侯爵夫人の如き身は五十餘萬石の家に生れて百廿萬石の家に嫁ぎ、才色相逢ふて關雎德を頌し琴瑟和諧して子女膝を繞る、富貴榮爵何の足らざるなく唯是れ天上の歡樂人間の幸福を身一つに集め玉へるに似たれば、眼に見ぬ天魔破旬の流石に妬ましくや思ひけむ、忽然良人を白玉樓上に誘ひ去り、夫人をして長く離鸞孤鳳の嘆きに沈ましめぬ。傷ましと謂はんも中々に愚かなり。夫人名は朗子と申す、侯爵鍋島直大君の長女にして母は梅溪氏名は胤子、子爵通善君の息女なり

夫人明治三年六月を以て生れ幼き時より聰明の才おはせしが長じて淑徳の名高かりければ十七年七月元の加能越三ヶ國の大守侯爵前田利嗣君に配し玉へり、元來其性の穎敏なる上に家庭の敎も嚴なりしかば普通の學科は言ふ迄もなく和歌に堪能にして筆蹟麗はしく、其外挿花彈琴聞香抹茶の諸道皆明めざるはなく、良人に仕へて貞順に、婢僕に對して恩意深かりしかば一家能く治まりて上下皆萬歳を歌ひける。二十二年二月夫君に伴はれて歐洲巡遊に赴かれ、大都通邑の繁華文明日進の狀況を視察して翌年四月歸朝し玉ふ、旅を物憂しとは云へど、鴛鴦翼を並べて海外の新天地を翺翔せる其樂しみや如何ならむされど歡樂極まつて哀情多く、三十三年六月夫君侯爵不圖病の床に就かれしかば夫人の驚き大方ならず、召仕の男女あまたしるにも拘はらず晝夜寢食を忘れて看護の手を盡し其身の生命を犧牲として平癒を神佛に祈しが中外名醫の技にも定命は如何ともなし難く遂に薨去ありしかば哀傷悲泣の御ありさま筆にも言葉にも盡されず見聞く者感傷せざるはなかりしと云ふ。此より後は堅く貞操を守りて亡人の尊靈に事へまつるの外子女の敎養怠りなく、其傍らあらゆる慈善事業公共の事業へ金員を義捐して其成立を扶助するを樂みとなし、時としては三十一文字に其竹の如く堅き節や雪の如く潔き心を寫して聊か胸中限りなきの愁を遣りいと靜粛に月日を送り玉ふと聞く、今左に夫人が金品を各事業の爲め義捐せられしあらましを記して其如何に慈仁の性に富ませ玉へるかを知らしむ。

明治十九年十一月報國恤兵に從事せんとするの誠意を嘉みせられ博愛社總長より社員狀を贈らる、廿年三月日本音樂會名譽會員に推薦さる、五月東京慈惠醫院へ向五ヶ年間毎年金拾圓つゝ寄附、廿一年一月篤志婦人看護會に加盟、廿三年六月

大日本婦人教育會員囑托、六月東京慈惠醫院幹事被仰付、十月同院へ向五ヶ年間毎年金八拾圓宛寄附、廿四年四月石川縣女子手藝共進會へ金參拾圓寄附、廿五年五月婦人共立育兒會へ加入、廿六年十月婦人衛生會へ入會、廿七年二月先是愛知岐阜兩縣下震災被害者救助として金百五拾圓施與したる賞として木盃壹組下賜、三月大婚二十五年祝典の章を授與せらる八年遣外陸海軍隊慰勞貸金五百圓寄附、廿八年十一月婦人共立育兒會基本金三拾圓寄附、廿九年五月東京慈惠醫院常置幹事被仰付、七月三陸大海嘯に付大日本婦人衛生會救恤の旨趣を賛成し金參圓寄附仝月赤十字社特別社員に列す、十一月三陸海嘯遭難の孤兒救養費中へ金拾圓寄附せしに因り福田會より謝狀を贈らる、三十年六月二十七八年戰役の際軍用品を獻納せしにより銀杯壹個賞賜、十二月大日本女學會へ金拾圓寄附し名譽會員に推さる、三十二年六月東京感化院へ金參拾圓寄附、八月沖繩幼稚園へ金參拾圓寄附、十一月大日本婦人衛生會員特別會員に推薦、十一月月曜會へ入會、三十三年六月保育藥去七月婦人共立育兒會へ金五百圓、本鄕區教育會附屬尋常小學校へ金參百圓東京慈惠醫院、東京市養育院、金澤市共立愛育會へ各金三百圓宛、福田會育兒院、東京感化院、瀧の川孤女學院、出獄人保護會へ各金貳百圓宛寄附、三十四年四月愛國婦人會へ金百圓寄附、

又夫人が此程或人に書與へられし首夏蝶と題せる歌に云ふ

木かくれに飛かふてふの羽袖さへ
かろけにみゆる夏はきにけり

●濱尾作子刀自　敢て名聲を求めず、徒に時流を逐はず、而も身をさゝげて諄々婦人事業に從ふと刀自の如きは、近代稀に見るところなり。

刀自は、前の文部大臣濱尾新氏の令夫人にして、舊幕旗下の士中根氏の家臣久保田政專氏の長女也。安政六年東京に生る。當時學校の設けなかりしかば、幼き時家庭の教育を受け、其後、諸氏に就いて廣く百科の學藝を修められぬ。二妹は、長谷川曾根兩工學博士に嫁ぎて共に令名高く舍弟久政氏又内務書記官として錚々の聞えあり。以てその家庭教養の素を想像するを得べし。嘗て大日本婦人衛生會の創設せらるゝに際し、率先して之に力を致し、會務の擴張を圖りければ、全國の婦人翕然として之に賛同するに至れり。現に推されて副會長となり、上會長を助け、下幾萬の會員を統べ、有益なる機關雜誌を發行し、そ

盛なること他に類なきは、實に刀自の力與つて多きに居る也。且愛國婦人會の評議員となり、其他關係せる婦人會甚だ多し。蓋し內にありて圓滿なる家庭をつくり、外に出でゝは獻身的事業に從ふ。世、刀自を稱して、現今婦人社會の和璧といふも、こゝまた偶然にあらざる也。

●瓜生繁子刀自　刀自は、海軍少將瓜生外吉氏の令夫人なり。女子師範科を卒業せし後、政府より外國留學を命ぜられ、其非凡なる眼光を以てよく新事物を視察研究し、歸朝するに及んで、女子高等師範學校敎授に任ぜられ、ついで從六位に叙せらる、爾來孜々として生徒を薰育し、今なほ外國語及び音樂科を擔任せられつゝありといふ。

●卒業生　橫濱女學校は、同市日出町貳丁目四拾壹番地にあり。校長は伊藤麻吉氏にして、創設以來日なほ淺けれども、諸般の設備ゆきとゞきて、益盛況に趣けり。卷首に揭げたる寫眞は、即ち第一回卒業生及び職員の撮影したるもの、その人名左の如し。

青木　セイ　　大山　キヨ　　●沖木彌兵衞
石田　千代　　村上　セイ　　渡邊ツル
枳殼八代野　　佐竹　ハル　　鹽田マス
山本　久代　　宮尾　光代　　林玉井
伊藤　ユキ　　吉濱　サト　　●三角錫
川田　チツ　　奧田　クラ　　●岩本カツ
宮川　キヨ　　葉山　キヨ　　●明藤枝
岡宮　ミ子　　田邊　マキ　　●伊藤麻吉
山本　フク　　淀田　ワカ　　●林繁
田川　ツヤ　　水口　千里　　●宇部宮タカ
●清原桃
●齋藤セイ
●川部ノブ
●今井イチ
●吉永カツ
●中村キヤツ

（但寫眞順●印は職員）

●播州舞子　夕陽半ば播州洋に沈みて暮雲六甲摩耶の諸峯を遶る時節を此の松靑沙白一帶の地に曳かば、千鳥啼く淡路島山の景色は更なり、一谷、鵯越さては明石の浦などの名所舊跡を眼前に控

えて、其の輿快得も言はれず、されど松風村雨の風流は其跡を訪ふに由なく、處々に高廈層樓の魏々として聳ゆるさへあるに、碧瞳紅毛の人の醜陋婦人を携へて、三々五々隊を爲して徜徉するは殺風景なりと惜む人もあるべし。避暑銷夏の地、又た好海水浴場として今日此頃はやうやく遊客の集ひ來るなるべし。

●箱根塔の澤●●●　是れまた銷夏の好地なるは世人の詳知するところ、都門萬丈の塵埃に身を埋むる者には、其名を聞くさへ猶は何となう心地すゞしく覺ゆるなり。況んや身其境に臨みて、朝には青嵐に心を洗ひ、夕べには温泉に身を清めたらむには、羽化登仙とやらの思ひして熱鬧塲裡の厭ふべきを應ずるなるべし。また徃遊を試みざる人は、先づ此の圖に對してその如何に幽邃の雅致に富めるかを見て他日觀光の資けとせよ。

女鑑歌文月次兼題

七月五日　歌　夕立　六月廿四日〆切
　　　　　文　人の新盆を吊ふ文

七月廿日　歌　夏旅　七月九日〆切
　　　　　文　夏の朝

八月五日　歌　筆　七月廿四日〆切
　　　　　文　虫干の記

懸賞

天には三册（一月半分）　地には二册（一月分）　人には一册を
贈呈す

政治學博士 神藤才一閲
高橋正熊
松本敬之 合著

中等
法制經濟教科書

法制之部
洋裝全壹册
定價金六拾錢
郵稅金八錢

法學博士 天野爲之閲
マスター、ヲブロース
ドクトル、アンシヤス
ポリツク、アドミニストラスチーフ
福岡秀猪閲
松本敬之
高橋正熊 合著

中等
法制經濟教科書

經濟之部
洋裝全壹册
定價金六拾錢
郵稅金八錢

本書は明治卅五年二月六日發表の中學校教授細目に基き編纂せしものなれば材料に於ては過不及なく專門に流れず一二學者の說に偏せず最も中學校師範學等の教科書に適當す
本書は社會的見地に基き倫理と法理と經濟との關係を明かにし連絡を取ることを主眼として編纂せるものなれば教科書として學科の統一を失ふの憂ひなく又始めて法制經濟の學を學ぶものには簡明にして要領を會得すべし

發行所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
特電話新橋八十八番
株式會社 國光社

會員募集

女子作法夏期講習會

（高等科五十名　普通科五十名募集）

來八月一日より帝國教育會内に於て開始し講習を懇篤にして修了せる會員諸氏をして直ちに實用教授の任に當らしむる學力を養成す

◎講師　宮中作法講師 臣民作法講師 石井泰次郎君外助教數名

◎學科　實際適切 女子作法科　普通應用 儀式科

◎會期　普通科 自八月一日至八月十日　高等科 自八月十一日至八月二十日

◎會費　普通科金壹圓五拾錢　高等科金貳圓

（前記會費の外入會金及修業證書手數料等を要せず）

◎申込　七月廿八日迄に東京市京橋區鈴木町十一番地大日本割烹學會内夏期講習會事務所宛の事

◎講習所　東京市神田區一ッ橋通帝國教育會内

大日本割烹學會作法部

●夏季女子講習會廣告●

今般本會ニ於テ教員タルニ必須ノ學力ヲ補充シ兼テ一般女子ノ爲メ新智識ヲ啓沃セシムルノ目的ヲ以テ本年七月廿八日ヨリ同八月十六日マテ東京神田橋外東京府立第一高等女學校内ニ於テ夏季女子講習會ヲ開ク講習志望者ハ講習科目、住所、族籍、職業、氏名、生年月ヲ記シタル書面(用紙半紙)ヲ本會事務所ニ差出スヘシ

◎講習科目及講師

一 國語　東京府女子師範學校教諭　前田捨松君

一 音樂　東京音樂學校教授　小山作之助君

一 家事(育兒法)　女子高等師範學校教諭　波多野とく子君

◎講習料

一科目金壹圓　二科目金壹圓五拾錢　三科目金貳圓

但シ音樂科ノミヲ修ムルモノハ金壹圓貳拾錢

◎證明書

講習結了後證明書ヲ授與ス

◎科外參觀

女子教育上有益ナル工場學校等ヲ參觀スルノ便宜ヲ與フヘシ

明治三十五年六月

東京市神田區一ツ橋通リ町廿一番地　東京府教育會

入會願書式(用紙半紙)

入會願

現住所、族稱、職業　氏名　生年月

貴會夏季女子講習會ヘ入會致度此段相願候也

明治　年　月　日　右　氏名㊞

東京府教育會御中

少年武士道史傳

全八冊第壹篇既刊第貳篇以下續刊

文學士大町桂月著

山中鹿之助

第一編 山中鹿之助……文學士大町桂月著
第二編 上杉謙信……文學士三好物外著
第三編 本多平八……文學士笹川臨風著
第四編 小早川隆景……田岡嶺雲著
第五編 立花宗茂……文學士白河鯉洋著
第六編 木村重成……文學士太田蒼溟著
第七編 山鹿素行……國府犀東著
第八編 大石良雄……文學士中内蝶二著

山陰の麒麟と稱されたる尼子十勇士の棟梁山中鹿之助は新月の前立打たる鹿の角の五枚兜に緋縅の鎧を着し武士道の標本として現れ出てたり著者桂月氏は嘗て山陰の古戰場を經歷して勇健豪快の筆を揮ひ珠城畫伯は其颯爽たる英姿を着色に描きたれば人をして元龜天正の昔に生れて鹿之助共人を眼前に見るの思ひあらしむ各位の一讀を待つや切なり



口繪密畫極彩色摺
定價一冊金十九錢
郵税四錢

發行元 東京築地 國光社出版部

伯爵東久世通禧君題字
高等教育會議々員湯本武比古君序文
東京感化院長高瀬眞卿君講述

家庭學校 修身一夕話 全

洋裝全一册四百頁
總クロース美本
表紙金文字入
正價金六拾錢
郵税金八錢

本書の叙述す處は修身倫理の大綱、東西古今の偉人碩儒の事蹟にして滔々數萬言、行文平易、趣味饒多、近來稀有の一大珍書、今や盛裝して世に出づ。身教職にある者は勿論、苟も子女教育に留意せらるる諸氏、幸に愛讀を賜はんことを。

日露の英雄

山崎忠和君著

洋裝四六版
全一册
定價金廿錢

露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其識見事業の世界的なる處同一なり其帝たり侯たり事功の成否の如きは別問題とすべし今此の三大英雄の性行經歷に就て細かに觀察すれば識慮の遠深なる意氣の雄偉なる機略の豁大なる未だ嘗て其の間に甚しき軒輕あるを見ず但其成功と否とは境遇に順逆ありしのみ之を以て三大英雄を輕重する如きは眞に皮相の見なりと言ふもの是れ本書の著者が立論の骨子なり著者燃犀の史眼を以て東西數百卷の史傳を看破し以て此の書を爲す三大英雄の音容動作眼前に現れ出でて宛も活動寫眞を見るが如し大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒するの志氣を養成せられんことを望む

白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著
文學士寺内淳二郎君譯

奢侈亡國論

洋裝全一册
定價金二十錢

現今の世、人心靡然として奢侈に流れ、競ふて外觀の華を衒び、皮相の美を粧ひ、豪奢淫佚自ら得たりと爲すもの滔々世を擧げて、比々みな是なり、彼の歐米交際社會といふ者の如き綾羅の錦衣に非ざれば、乃ち共に臂を交へざる也。粱肉の美味に非ざれば、乃ち共に卓を圍まざる也。是を以て一夕の燕遊に數千萬金を費消して、傲奢誇耀唯だ其額の少なからんことを是れ恐る、而て曰く是れ文明也、進歩也と、嗟斯の如くにして已まずんば、遂に羅馬衰亡史中の事實を再演せずんば幸のみ、著者白國リーヂ大學教授ラヴレー氏茲見るあり、奢侈の定義、動念、不正を論じ、其の道德及び進歩の原因に非ざるを說破して、一代の頽瀾を將倒に挽回せんと試みたり、本書は即ち是れ也、議論元と經濟上より觀察を下せりと雖も、而も一般經濟書の無味乾燥、砂を嚙み、臘を舐ぶるが如きに類せず、其の現代社會の華侈驕奢を冷評罵倒するや、骨を刺し、腸を抉り、世の流行紳士をして狐奔鼠竄殆ど顏色なからしむ、譯者亦流麗の筆を以て親切鄭寧に原文を譯出したれば、繙讀の間趣味津々自ら禁ずべからざるのあり、吾國民由來勤儉の美風に富む、幸ひに本書を熟讀せば、奢侈の甚だ恐るべく、勤儉の益々尙ぶべきを知りて、謂ゆる文質彬々の美果を占むるを得ん、乞ふ購讀の榮を賜へ

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社出版部

女鑑

明治三十五年六月廿日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百五拾五號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷